長野県埋蔵文化財センター年報 41

2024年度

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報 41

～２０２４年度～

一般財団法人長野県文化振興事業団
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

①中野市　南大原遺跡全景 （南から）

②中野市　南大原遺跡　カマド遺物出土状況 （平安時代）

口絵２

③長野市　長沼城跡　足金物出土状況　（中世）

④松本市　南栗遺跡　竪穴建物跡　遺物出土状況　（平安時代）

⑤松本市　真光寺遺跡全景（北西から）

⑥松本市　安塚古墳群　第13号古墳

口絵４

⑦飯田市　正泉寺遺跡全景（南東から）

⑧飯田市　正泉寺遺跡　竪穴建物跡　遺物出土状況（古墳時代）

目　次

口絵写真

①中野市　南大原遺跡全景
②中野市　南大原遺跡　カマド遺物出土状況
③長野市　長沼城跡　足金物出土状況
④松本市　南栗遺跡　竪穴建物跡遺物出土状況
⑤松本市　真光寺遺跡全景
⑥松本市　安塚古墳群　第13号古墳
⑦飯田市　正泉寺遺跡全景
⑧飯田市　正泉寺遺跡　竪穴建物跡遺物出土状況

Ⅰ　2024年度の事業概要 …… 1
Ⅱ　発掘作業の概要 …… 3
(1) 南大原遺跡 …… 4
(2) 長沼城跡 …… 8
(3) 塩崎遺跡群 …… 12
(4) 南栗遺跡 …… 14
(5) 真光寺遺跡・真光寺古墳群 …… 18
(6) 安塚古墳群 …… 22
(7) 西浦遺跡 …… 24
(8) 五郎田遺跡 …… 29
(9) ママ下遺跡 …… 33
(10) 正泉寺遺跡・五郎田遺跡 …… 34
(11) 宮崎下遺跡 …… 38
(12) 川原遺跡 …… 40
Ⅲ　整理作業の概要 …… 42
(1) 塩崎遺跡群 …… 43
(2) 川原遺跡 …… 45
(3) 信州大学医学部所蔵考古資料整理 …… 46
支援事業
Ⅳ　普及公開活動の概要 …… 48
(1) 施設公開 …… 49
(2) 現地説明会等 …… 50
(3) 速報展・講演会等 …… 51
(4) 展示室普及啓発用教材等 …… 54
(5) 講座・出前授業・職場体験 …… 55
(6) 出版物 …… 56
Ⅴ　指導者招へい …… 57
Ⅵ　会議・研修会への参加 …… 58
(1) 会議・委員会等 …… 58
(2) 研修会等 …… 58
Ⅶ　学校・関係機関への協力等 …… 59
(1) 職員派遣・技術支援等 …… 59
(2) 学校等への協力 …… 61
(3) 調査資料の利用 …… 62
(4) インターンシップ等 …… 64
(5) 県有施設利用の応急的保存処理 …… 64
(6) 派遣等の受入 …… 64
Ⅷ　組織・事業の概要 …… 65
(1) 組　織 …… 65
(2) 職　員 …… 65
(3) 事　業 …… 66
Ⅸ　調査研究ノート …… 67
(1) 飯田市川原遺跡の配石遺構の構築方法に関する考察 …… 68
(2) 南大原遺跡の玉つくり …… 74
(3) 川崎市高津区下作延遺跡出土の弥生土器について …… 82
(4) 川原遺跡出土百済土器盌の一様相 …… 94
(5) 千曲川の瀬直し（中野市上今井）と丸山要左衛門について …… 100
奥付

Ⅰ　2024年度の事業概要

本年度は、発掘調査事業は、国５件（一部市・ネクスコを含む）、県３件、民間１件、そのほか１件の計10件となった。このほかに県教育委員会からの研修等受託事業及び普及啓発や地域協力などの自主事業も行った。

１　発掘調査事業

国関連12億6835万円、中央新幹線７億1225万円、長野県１億7203万円、その他２億5745万円の計24億1008万円（2025年３月５日現在の見込）の受託費により、14箇所の発掘作業と３箇所の整理作業を行った（大学からの整理委託は１箇所とした）。

（１）発掘作業

中野市南大原遺跡：本年度は確認調査約15万㎡と本調査1,000㎡を行った。弥生時代中期後半の「玉つくり工房跡」や平安時代中期の竪穴建物群が検出された。

長野市長沼城跡：本年度は、二の丸推定地、南三日月堀、武家屋敷推定地及びそれにともなう江戸時代以前に遡る可能性のある土塁や堀跡を調査し、本年度で発掘作業は完了した。

長野市塩崎遺跡群：用地を南北に横断する市道部分のみを本年度調査し、2013年度から始まった調査が完了した。

松本市南栗遺跡：南や南東側では遺構密度は粗となり、集落域の端が判明した。一方北西側は遺構密度が高く、古墳時代末から平安時代の竪穴建物跡107軒が検出された。

松本市安塚古墳群：古墳時代終末期の川原石で構築された石室（第13号古墳）が検出された。

松本市真光寺遺跡・真光寺古墳群：中世後半の竪穴状遺構、溝跡、土坑群、さらには長辺60m以上、短辺約50mの方形の区画溝跡（SD30）を検出した。松本市内ではこうした館や寺院を囲む堀跡がみつかっており、当地域の近世以前の土地利用を考える手がかりになろう。

飯田市西浦遺跡：弥生時代の竪穴建物跡、古代から中近世の掘立柱建物跡群が出土している。２×５間の掘立柱建物跡ST302は、奈良時代か。一辺数m程度の方形の溝跡が５基ほど見つかっているが、古代から中世の板塀などの布掘り跡とも考えられる。

飯田市五郎田遺跡：中央新幹線地点では、弥生時代から平安時代の建物跡35軒を含む当該地域の拠点的な集落跡が見つかっている。

飯田市正泉寺遺跡：古墳時代中期の竪穴建物跡SB４の北西床面から高坏を中心に小型の土師器計25点が集中して出土した。祭祀の痕跡と考えられる。他にも古墳時代竪穴建物跡の埋土から耳環が出土している。集落内での着用者の存在や建物跡への埋葬の可能性がある。

（２）整理等作業

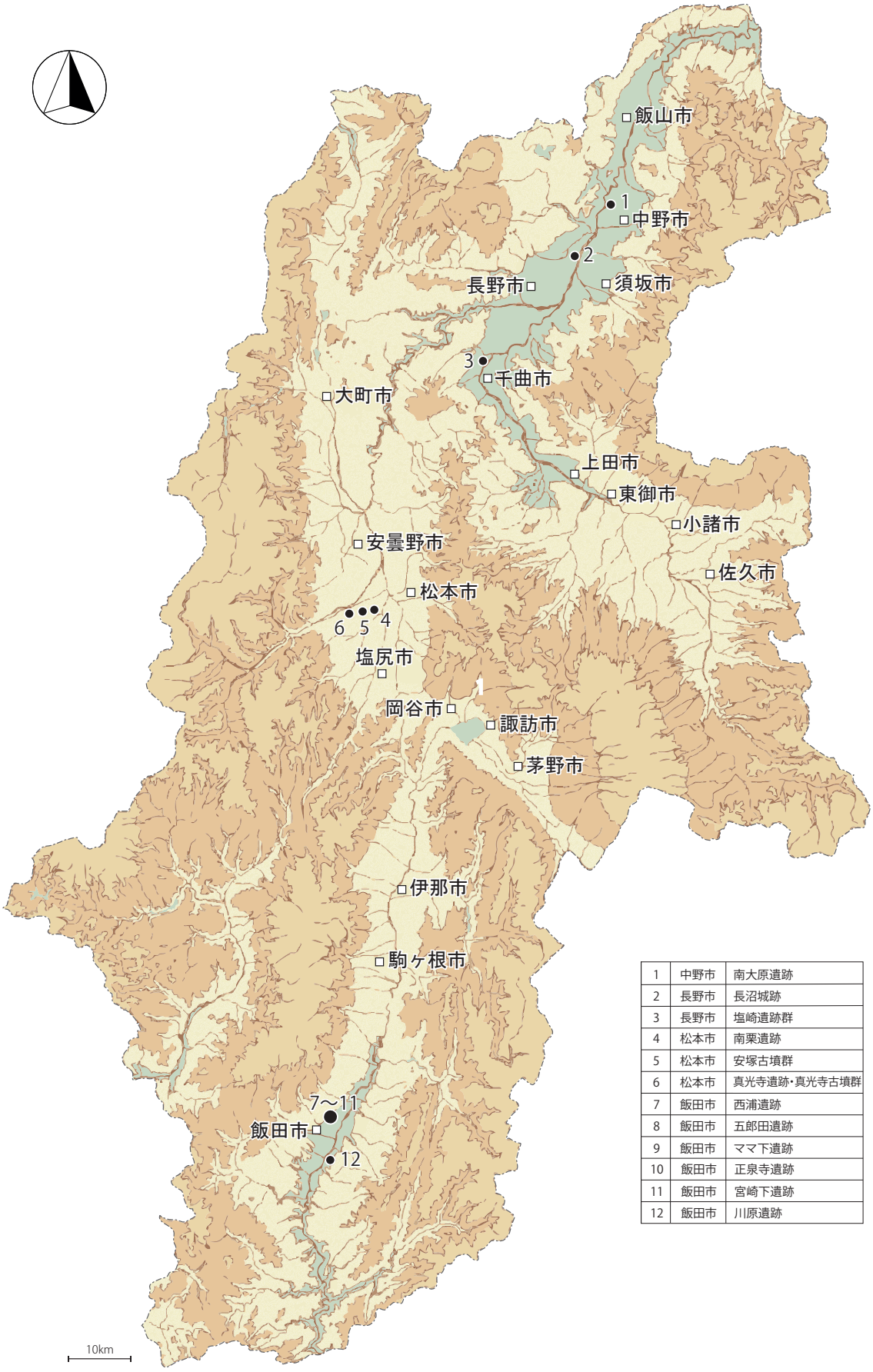
長野市塩崎遺跡群など：報告書刊行に向けて原稿執筆、図版作成などの整理作業が行われた。

信州大学医学部所蔵考古資料：2020年度からの遺物洗浄や基礎的な台帳整備は完了した。整理の成果を地域展や講演会を通じて公開した。

２　普及公開、研修事業

昨年度につづき事業団（芸術文化推進室、県立美術館、松本文化会館）、県・県立歴史館、大学、地域等と連携し、施設公開、現地説明会、職場体験、講演会、地域展、地域連携歴史講座、普及啓発用教材「古墳カレンダー」の作成などを行った。事業団インセンティブ事業として採択された中央日本四県連携事業「クロスロード信州　れきし×アート」でもある県立美術館での展示会、ワークショップ、トークイベントを企画し、関係機関と協力、開催した。専門研修ほか、職員自身の企画による自己研鑽研修（沖縄、山形、関東など）も実施できた。

（川崎　保）



1	中野市	南大原遺跡
2	長野市	長沼城跡
3	長野市	塩崎遺跡群
4	松本市	南栗遺跡
5	松本市	安塚古墳群
6	松本市	真光寺遺跡・真光寺古墳群
7	飯田市	西浦遺跡
8	飯田市	五郎田遺跡
9	飯田市	ママ下遺跡
10	飯田市	正泉寺遺跡
11	飯田市	宮崎下遺跡
12	飯田市	川原遺跡

図１　2024年度　調査・整理対象遺跡

Ⅱ　発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物
南大原遺跡	中野市	上今井 遊水地 整備事業	152,100	2024.6.3～ 2024.12.6	弥生：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、遺物集中、土坑、溝跡 古墳：竪穴建物跡 平安：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡	縄文：土器、石器 弥生：土器、石器、玉つくり関連遺物（管玉、勾玉、未成品、玉鋸、玉錐、石核、剝片） 平安：土器、石器、金属製品（紡錘車、刀子）
長沼城跡	長野市	長沼地区 河川防災ステーション 整備事業	7,229	2024.4.5～ 2024.11.18	中世～近世：土塁、堀跡、溝跡、土坑、井戸、建物跡、礎石列、柱穴列、石列、炭・焼土範囲、礫集中・敷石遺構、遺物集中、不明遺構 近代：土坑、炭・焼土範囲	中世～近世：土器・陶磁器（内耳鍋、カワラケ、碗、皿など）、土製品（土錘など）、石器・石製品（臼、鉢、五輪塔など）、金属製品（銭貨、足金物など）、木製品（漆碗、曲げ物など） 近代：土器・陶磁器（碗・皿など）
塩崎遺跡群		一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	150	2024.10.1～ 2024.11.29	弥生：掘立柱建物跡 弥生以降：土坑、溝跡	弥生：土器 古墳～平安：（土師器、須恵器） 近世：陶器 時期不明：磨石、黒曜石剝片
南栗遺跡	松本市	松本 JCT 建設事業	9,000	2024.5.20～ 2024.12.18	古墳～平安：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑 古代～中世：土坑、溝跡	古墳～平安：土器・土製品（畿内系暗文坏、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器） 平安以降：土器（山茶碗）、土製品（羽口）、石器（砥石）、鍛冶関連資料（鍛造剝片、粒状滓、羽口、鉄滓）、その他（動物骨）
真光寺遺跡・真光寺古墳群		一般国道158号 （松本波田道路） 改築工事	1,800	2024.4.15～ 2024.9.30	中世以降：竪穴状遺構、焼土跡、溝跡、土坑	中世以降：土器・土製品（内耳鍋、カワラケ、陶磁器、土製円盤、羽口、「南鐐二朱銀」模造品）、石器・石製品（凹石、砥石、石臼）、金属製品（銭貨、釘、キセル） 近世以降：木製品（木杭）
安塚古墳群			1,500	2024.6.3～ 2024.10.31	古墳～奈良：古墳 中近世：集石、土坑、焼土跡、井戸跡 時期不明：竪穴状遺構	縄文：土器、石器 古墳～古代：土器、金属製品（鉄鏃） 中近世：土器、陶磁器、金属製品（鉄釘等）
西浦遺跡	飯田市	中央新幹線 建設工事	7,743	2024.7.1～ 2025.2.28	縄文～古代：土坑 弥生：竪穴建物跡 古墳：土坑 古代～中世：土坑、溝跡、柵列、不明遺構 近世：掘立柱建物跡、土坑、柵列	縄文：土器、黒曜石剝片 弥生：土器、石器 古墳：土器、石器 古代：土器 中世：土器、陶磁器 近世：土器、陶磁器、金属製品（寛永通寶）
五郎田遺跡			1,606	2024.7.3～ 2025.2.7	弥生：竪穴建物跡、土坑 古墳：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑 古代：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑 不明：溝跡	弥生：土器、石器 古墳：土器、石器（石鍬、有肩扇状形石器、石包丁、砥石、管玉、臼玉ほか） 古代：土器
ママ下遺跡			1,080	2024.9.9～ 2024.9.11	なし	なし
正泉寺遺跡		座光寺上郷道路 建設工事	4,500	2024.4.3 ～ 2024.12.20	弥生：方形周溝墓 弥生～古墳：溝跡、流路跡 古墳～古代：土坑、溝跡、流路跡、掘立柱建物跡	縄文：土器 弥生：土器、石器（打製石鏃、磨製石鏃、有肩扇状形石器）、 古墳：土器、石器（打製石斧）、金属製品（耳環） 古墳～古代：（刀子、鎌） 古代：土器 近世：陶磁器
五郎田遺跡			200	2024.4.3～ 2024.12.20	古墳：竪穴建物跡 古墳～古代：土坑	弥生：土器、石器 古墳：土器、石器 古代：土器
宮崎下遺跡			8,000	2024.10.10 ～ 2024.11.29	弥生？：溝跡	縄文：土器、石器・石製品（打製石斧、黒曜石剝片） 平安：灰釉陶器 中世：陶器 近世・近代：磁器
川原遺跡		防災・安全交付金（道路）事業・国補ダム建設（治水ダム）事業　合併	200	2024.4.26～ 2024.6.6	縄文：竪穴建物跡、土坑、配石、集石遺構 時期不明：土坑	縄文：土器、石器（剝片、石核）

（1）南大原遺跡（みなみおおはらいせき）

上今井遊水地整備事業

所在地及び交通案内：中野市大字上今井字南大原1089ほか
上信越自動車道信州中野インターチェンジから北西に2.3km。

遺跡の立地環境：千曲川は1870～1872（明治３～５）年に現在の位置に瀬替えされているが、遺跡形成時には旧千曲川左岸の曲流部に発達した自然堤防及び後背湿地上に立地する。

発掘期間等

調査期間	調査対象面積	調査担当者
2024.6.3～2024.12.6	確認調査151,100㎡ 本調査1,000㎡	上田典男　水科汐華 町田賢一　山田清朝 黒岩　隆　藤原直人

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	14（17）	弥生時代、古墳時代、平安時代
掘立柱建物跡	4（5）	弥生時代、奈良時代、平安時代
遺物集中	1（1）	弥生時代
土坑	719（763）	弥生時代、奈良時代、平安時代
溝跡	8（16）	弥生時代、奈良時代、平安時代、近世

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、弥生、平安時代
石器	縄文、弥生、平安時代
玉つくり関連遺物	弥生時代（管玉、勾玉、未成品、玉鋸、玉錐、石核、剝片）
金属製品	平安時代（鉄製紡錘車・刀子）

発掘調査の概要

本年度は、すでに本調査を実施することが協議されていた範囲内の本調査（1,000㎡）と、遺跡内容が不明瞭な範囲全域（151,100㎡）を対象とした確認調査を同時並行で実施した。調査はいずれも（公社）日本文化財保護協会に支援委託して行った。なお、検出遺構数は、本調査地区のみの数字である。

図２　遺跡の位置（1：50,000）※本調査位置

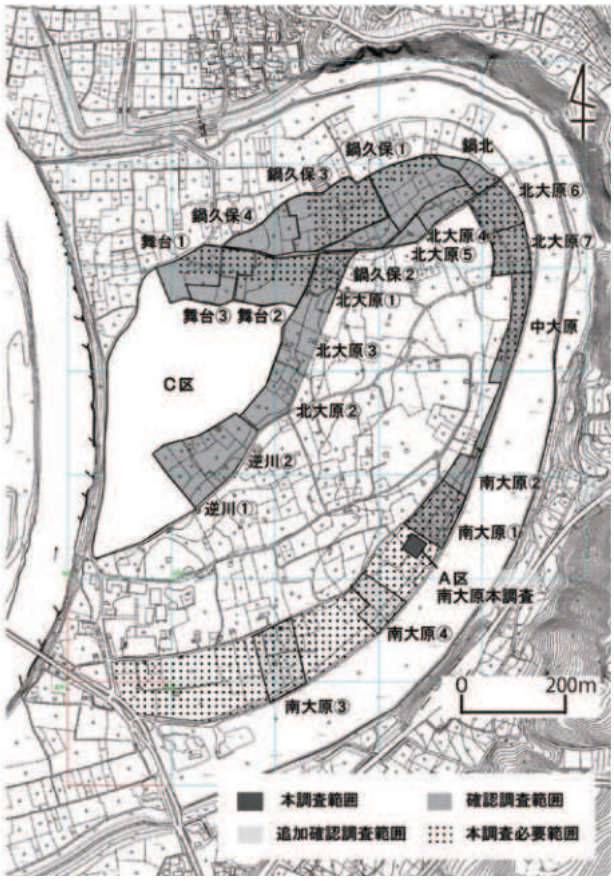


図３　調査位置図

莫大な面積を対象とした確認調査

確認調査は、事業地内の地籍（逆川・北大原・舞台・鍋久保・中大原・南大原・鍋北）ごとに小区分し（図３）、トレンチ調査を進めた。

逆川地籍の調査区は、昨年度調査のＣ区の北側に接し、市道逆川１号線の東側にあたる。昨年度

の古地理復元分析調査により「上今井耕地絵図」（東江部村山田庄左衛門家文書　39-７-１）に記載されたミチが現市道と同位置とみられることから、近世水田跡は市道逆川１号線の西側に分布し、一部が同市道の東側に存在することが予想された。逆川②15・19・21トレンチで水田層と畦畔・水路（取水溝）跡が確認され、近世水田跡境界部が絵図と同様であったことを把握することができた。土層の堆積層序は、昨年度のＣ区北半部と同様で奈良時代の文化層は欠落していた。遺物の出土状況はＣ区と同様で、縄文土器がトレンチからわずかに出土するのみであり、近世水田跡以外の遺構は検出されなかったこと等から本調査不要と判断した。

北大原地籍は、地形からみて逆川地籍に接した北大原②③、舞台地籍に接した北大原①、鍋久保地籍に接した北大原④⑤、旧千曲川に接した北大原⑥⑦に大きく分かれる。

北大原②③は、堆積土層、遺物出土状況とも逆川地籍に近似することから、面調査不要と判断した。ただ、北大原②18・19トレンチと北大原③23トレンチで畑の畝跡を確認した。被覆する洪水起源の土砂が近世水田跡の被覆土に近似するため、ミチを挟んで西側に水田、東側に畑が広がる近世の土地利用の有り様、景観が想像される。なお、畑の畝跡は舞台②16トレンチでも確認されており、水田の周囲に畑が作られていたという景観が復元される。

北大原①は、北大原④から舞台①へと続く段丘状地形の一角を占め、いずれの地区も南側が低くなる傾斜を持つ。北大原①、舞台①②③では高まりの部分で、遺構密度は低いものの、古代の竪穴建物跡が検出され、次年度以降、本調査の対象範囲とした。一方、今回の調査で最も標高の高い北大原④⑤は、北大原④の一部を除いて、耕作土直下が河床堆積物となっており、後世の削平・土砂流失の影響もあろうが、遺構・遺物は確認されず、本調査不要である。

北大原地籍と鍋久保地籍は、旧千曲川と市道古川北線の間（鍋北地区とした）は段差等が無く、市道以南は、最大比高差５ｍ弱の崖面で分かたれている。河床砂層の堆積状況から、北大原と鍋久保地籍は、かつては同一面で、千曲川の水流によって鍋久保側が深く削られ、次第に流路が大俣側

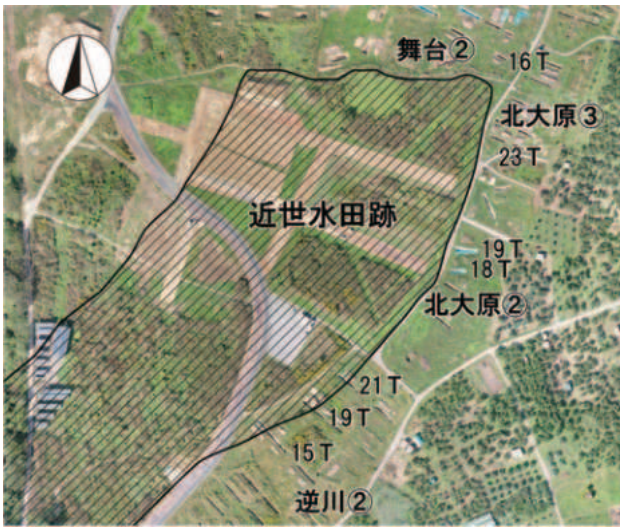


図４　近世水田跡の範囲

図５　２段掘りしたトレンチの土層断面写真
（３Ｄ計測に伴うオルソ画像）

図６　旧千曲川の流路の変遷

の崖面方向に追いやられ流路が定まり、その流路による自然堤防上を古代の人々が占地し、集落を形成したと考えられる。鍋久保①の一部と鍋久保③に該当し、いずれも遺構検出面は地表下約1.5mと深く、鍋久保③ではさらに下層に弥生時代後期の文化層が確認された。

旧千曲川に沿った斜面地は、南大原②の谷状地形で、南北に地形面が分かれると考えられる。南の県道三水中野線の発掘調査で「埋没谷地形」が確認され、これが南大原③まで続くことが明らかとなり、さらに斜面上方にも幾筋も観察される。この微地形は、河川の湾曲部内側に形成・成長した蛇行州（スクロールバー）と微低地（スウェイル）と考えられる。こうした地形は北側には見られない。南大原②の一部、中大原、北大原⑥⑦及び鍋北の北大原地籍辺りまでが同一地形面と捉えられ、鍋北の鍋久保地籍辺りで、旧千曲川の水流によって深く削られていた。北側では弥生時代中期後半及び古代の竪穴建物跡等が検出され、本調査を要する箇所である。

県道三水中野線から本調査地区までは、弥生時代中期後半から古代に至る遺構が調査・検出されており、本調査が必要な範囲として協議されてきたが、北側の南大原①でも該期の遺構が確認され、本調査の必要な範囲が北へ延伸した。また、南大原③④の調査でも、該期の遺構が検出されており、本調査が必要である。なお、中大原～南大原地籍の事業範囲が狭まる箇所については、狭小のため調査不能とした。

相次ぐ新発見で沸いた本調査

本調査は、昨年度の確認調査で竪穴建物跡が複数検出されたＡ区６トレンチを拡張する形で調査区を設定し（1,000㎡）、調査を進め、弥生時代中期後半から平安時代に至る遺構群が検出された。弥生時代中期後半では、５軒の竪穴建物跡の内４軒が円を基調とする平面形で、そのうち３軒が中央土坑をもち、床面に被熱痕跡を伴い、中央土坑を中心に、直線的に主柱穴が配置される。

出土遺物から凝灰質頁岩を石材とする石器製作工房跡（SB104）、管玉製作工房跡（SB110）と考

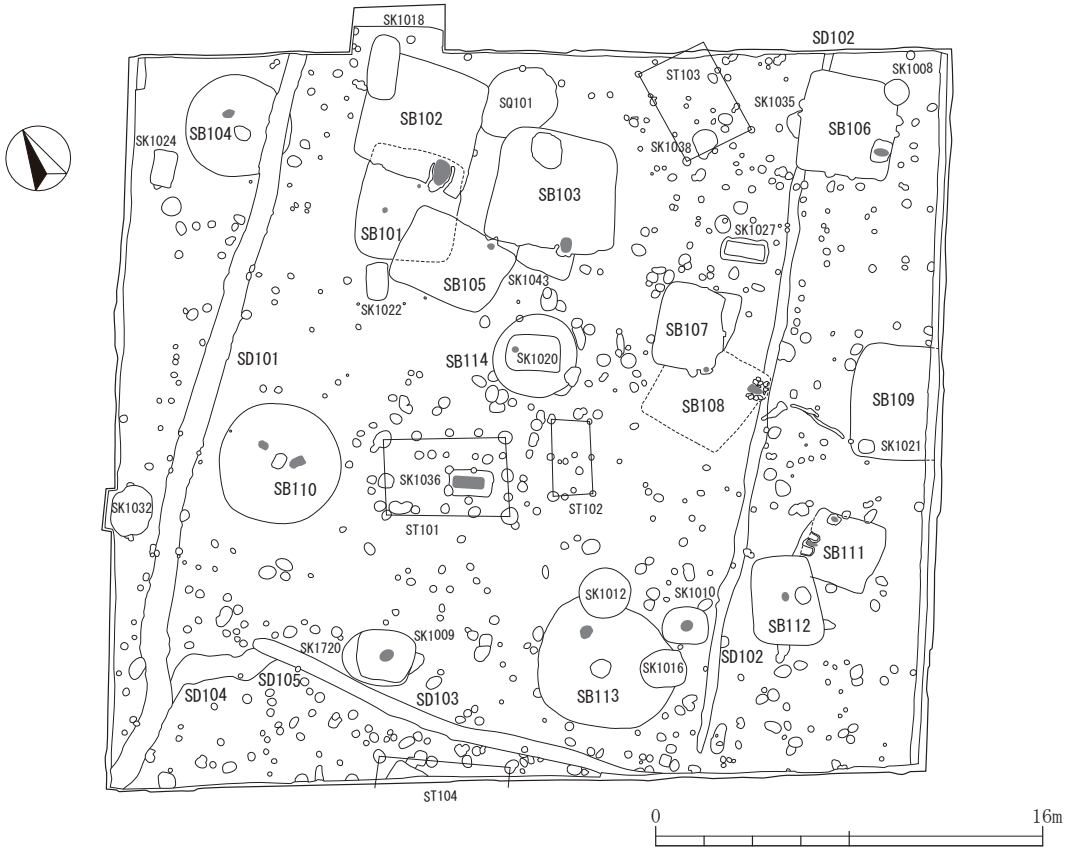


図７　本調査地区（南大原地籍）遺構分布図

えられる。床面中央に地床炉をもつ一般的な構造の竪穴建物跡は皆無であり、生活の有り様を示す土器や石器の出土も少ないため、生活の拠点となる建物群ではなく、集落の中でもモノつくりに特化した領域ではなかったか。その他、大形土坑の埋没過程で凹みを利用して火を使用した箇所が幾つもあり、掘立柱建物跡として組めないものの直線的に並ぶ柱穴状の土坑群とともに、工房跡に関連する施設ではなかろうか。弥生時代中期後半の遺構群は、その重複状況から、少なくとも３段階に分けることが可能である。なお、玉つくりに関しての詳細は、本書所収の「Ⅸ 調査研究ノート」の黒岩論考を参照されたい。

古墳時代前期では、２軒の竪穴建物跡が検出された。これまでの南大原遺跡での調査では、当該期の遺構は周溝墓のみであり、造営母体とも考えられる集落の痕跡を得ることができた。

平安時代では７軒の竪穴建物跡が検出された。建物の向きは、古墳時代前期と同様にいずれも旧千曲川の流路方向と並行している。流路方向と平行する壁面にカマドを持つものと直交する壁面にカマドを持つものの二者があるが、カマドの壁面位置は隅に寄る。SB108は堅牢な石組カマドを持つ。いずれも９世紀後半から10世紀代に構築されたと考えられ、遺構の重複・分布状況から少なくとも３段階に分けられそうである。このうち、SB102からは黒色処理された耳皿や完形に近い食器類の出土が多く、他に鉄製紡錘車・刀子が出土した。鉄滓が出土したSB103とともに規模が大きく、集落単位の中でも中心的な存在であったと考えられる。また、限られた範囲での調査であるものの、古代の区画溝と考えられるSD101より斜面上方には竪穴建物跡の分布がみられず、今後の調査の着目点のひとつとなる。

2024年度調査の成果

約70万㎡に及ぶ事業地全体の中で、すでに本調査が確定している約８万㎡に、本年度の確認調査により本調査が必要と判断した約５万㎡が加わることとなった。

また、南大原地籍での本調査により、弥生時代中期後半に、当地で玉つくりが行われていたことを遺構と遺物の両面から明らかにすることができた。また、北信濃では初となる10世紀代の集落が発見され、今後の調査の進展が期待される。

（上田典男）

図８　SB104完掘写真

図９　SB110中央土坑出土の玉鋸

図10　SB102床面出土の耳皿

（２）長沼城跡（ながぬまじょうあと）

長沼地区河川防災ステーション整備事業

所在地及び交通案内：長野市大字穂保69番１ほか国道18号長野バイパス（アップルライン）大町交差点から北北東に約１km。

遺跡の立地環境：千曲川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡西方の集落内を通る北国街道脇街道（松代道）沿いには、往時の街並みが残っている。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.4.5～2024.11.18	7,229㎡	伊藤　愛　広田良成 中野亮一　藤原直人 依田健太　小出晟生

検出遺構

遺構の種類	数	時期
土塁	1（3）	中世～近世
堀跡	2（5）	中世～近世
溝跡	17（29）	中世～近世
土坑	243（339）	中世～近代
井戸跡	3（7）	中世～近世
建物跡（竪穴・礎石・掘立柱・門）	0（11）	中世～近世
礎石列・柱穴列	0（2）	中世～近世
石列（土塁に伴う）	1（2）	中世
炭・焼土範囲	5（25）	中世～近代
礫集中・敷石遺構	0（23）	中世～近世
不明遺構	0（1）	中世
遺物集中	0（7）	中世～近世

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	中世～近代（内耳鍋・カワラケ・碗・皿など）
土製品	中世～近世（土錘など）
石器・石製品	中世～近世（臼・鉢・五輪塔など）
金属製品	中世～近世（銭貨・足金物など）
木製品	中世～近世（漆碗・曲物など）

調査の概要

長沼城跡は戦国時代から江戸時代にかけての平城で、戦国大名の武田信玄がその築城に関わったとされている。松代の海津城と並ぶ武田氏の重要拠点であり、江戸時代初期にこの地に長沼藩が置かれると、藩主である佐久間氏の居城となった。しかし、廃藩・廃城以降は度重なる水害や農地利用によって徐々に地中に埋もれていき、いつしかその姿をうかがい知ることはできなくなった。地元の歴史研究会が絵図などをもとに縄張り推定図を作成しているが、発掘調査例もなく、長い間実態は不明であった。

図11　遺跡の位置（1：50,000 中野）

2019年、台風19号により長沼地区が大規模な浸水被害を受けると、河川防災ステーションの建設が計画され、長沼城跡を含む34,500㎡が発掘調査の対象地となった。長野市教育委員会のトレンチ調査を経て2021年より本調査を開始し、４年目となる本年度ですべての調査が終了した。本年度の調査面積は7,229㎡である。対象となったのは、二の丸と推定されている平場の北西部と南三日月堀、初代藩主の長男が屋敷を構えたとされる武家屋敷推定地であった。

二の丸推定地北西土塁

二の丸推定地の北西部分は、従来の縄張り想定図（図12）では、南から連続してきた土塁がこの調査地点で東方向にほぼ直角に屈曲するように描かれる。昨年度までの調査成果を踏まえ、土塁の屈曲部分にあたると考えられる箇所にトレンチを設定し掘り下げたところ、中堀と土塁の境界ラインを検出した。

土塁は想定よりもやや外側に張り出すように湾曲し、東の調査区外に続く（図13）。土塁の際には土留めのための石列や木杭が施されており、昨年度隣接する調査区で検出したものに接続すると

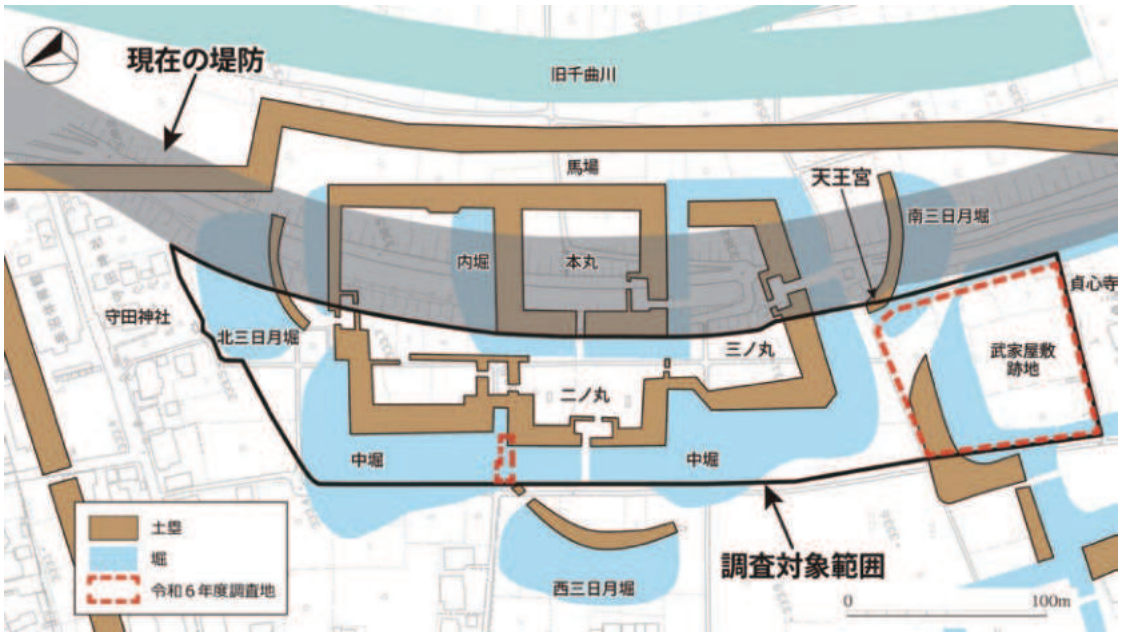


図12　長沼城跡　縄張り想定図（長野市埋蔵文化財センター所報32掲載図を加筆・修正）

みられる。石列の石材は、過去の調査では人頭大が主体であったのに対し、やや小ぶりで散在した印象を受ける。当該地点には住宅建設時のものと考えられる攪乱が広範囲かつ深く掘り込まれており、これにより石のいくつかが失われた可能性がある。石列の下部には、木杭が一定間隔で打ち込まれていた（図14）。杭の太さは最大径約10㎝、長さは１ｍほどで、先端は鋭利に加工してあり、残存状態は良好であった。

南三日月堀

2023年、地元における長沼城跡のシンボルでもあった天王宮が工事により解体された。城の南出入口の外側に築かれた丸馬出の土塁の一部であると伝わっており、工事に先行して行った調査によって、２段階に盛土された土塁であることが判明した。この土塁に伴うのが、本年度調査対象となった南三日月堀である。

堀のラインを想定し、それに直交する形でトレンチを掘削したところ、深さ約３ｍの堀の断面を検出した（図15）。堀底が平らな箱掘りであり、堆積土には洪水痕跡や近世の水田層などがみられる。丸馬出や三日月堀は武田氏の城の特徴と捉えられることが多いが、2022年に検出した北三日月堀と同様、武田氏時代のものとしては規模が大きい。近世に廃城となるまでの間に拡張された可能性があるが、それを裏付けるような拡張痕跡などは確認できなかった。

図13　土塁検出状況

図14　石列と木杭

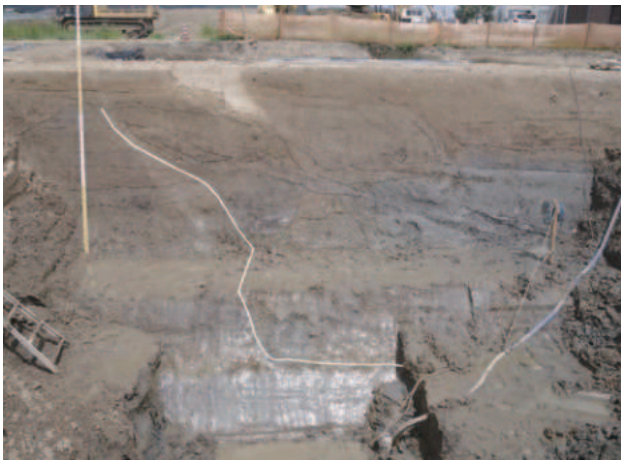


図15　南三日月堀断面（白線が断面ライン）

図17　石組み遺構

図16　方形区画

図18　井戸跡遺物出土状況（破損した曲げ物）

武家屋敷推定地

本調査区は、城に隣接する武家屋敷の跡地とされている。確認した遺構面は第１～４面である。長沼城跡の調査は文化庁、県教育委員会、市教育委員会との協議により最上遺構面のみに留め、埋め戻して保護する方針をとっていた。しかし本調査区は最上面の改変が激しく、遺構の残存状況が著しく悪かったことから、県・市の合意のもと、第２面を保護面として調査を実施することとした。ただし調査区南部一帯は工事によって深く掘削される予定であったため、当該箇所については最終面まで記録保存調査を実施することとした。以下、第３・４面の記述は当該箇所における所見である。

第１面は先述のとおり後世に大きく改変されており、削平を受けた土坑や溝を検出した。溝跡は数条が南北方向に延び、排水施設の可能性はあるが大部分が削平を受けているため判然としない。

第２面では複数の土坑、溝跡を検出した。調査区南東部では、約20m四方の方形に巡る溝跡を検出している（図16）。溝の内側で建物跡等の存在を想定して精査をおこなったが発見には至らず、詳しい性格は不明である。しかし、本遺構の主軸が屋敷推定地の平場のそれと一致していることから、方角を意識した区画溝であったと考えられる。

本面では刀装具の足金物が１点出土した（口絵２）。銅製で表面に黒漆が施されており、今後実体顕微鏡などでの詳しい解析が必要となる。

第３面は第２面の30～40㎝下層で検出し、屋敷推定地に伴う土塁や堀は、本面の段階で造られたものであることが断面観察によって判明した。本面で特筆すべき遺構は、土塁の内際で検出した石組み遺構である（図17）。拳大～人頭大の石を方形に配し、部分的に２段に積む。西面では石の検出はなく、後世の改変による消失を想定している。貯水および排水施設の可能性もあるが、覆土

に水成堆積層がみられず、明確な排水設備も確認できないことから、現段階では貯蔵施設と考えている。本面では井戸跡も確認しており、底面付近からは破損した曲げ物が出土した（図18）。

第４面は当初想定していなかったが、第３面造成土を除去したところ、調査区南東部で下面の遺構を発見した。カワラケが複数出土した溝跡や大型土坑、井戸跡などを検出し、南北方向に２列に並ぶ柱穴列も確認している（図19）。この柱穴列より西では、本面を構成する造成土が厚みを減じて消失する。遺構もほとんど検出されないことから、本調査区内における第４面の範囲は東部の一部のみで、調査区外の現堤防下に続いていくと考えられる。屋敷推定地の土塁や堀が構築される以前の遺構面である可能性が高く、長沼城が城として成立する前段階の様相を示すものとみられ、重要な発見となった。

武家屋敷推定地の土塁・堀跡

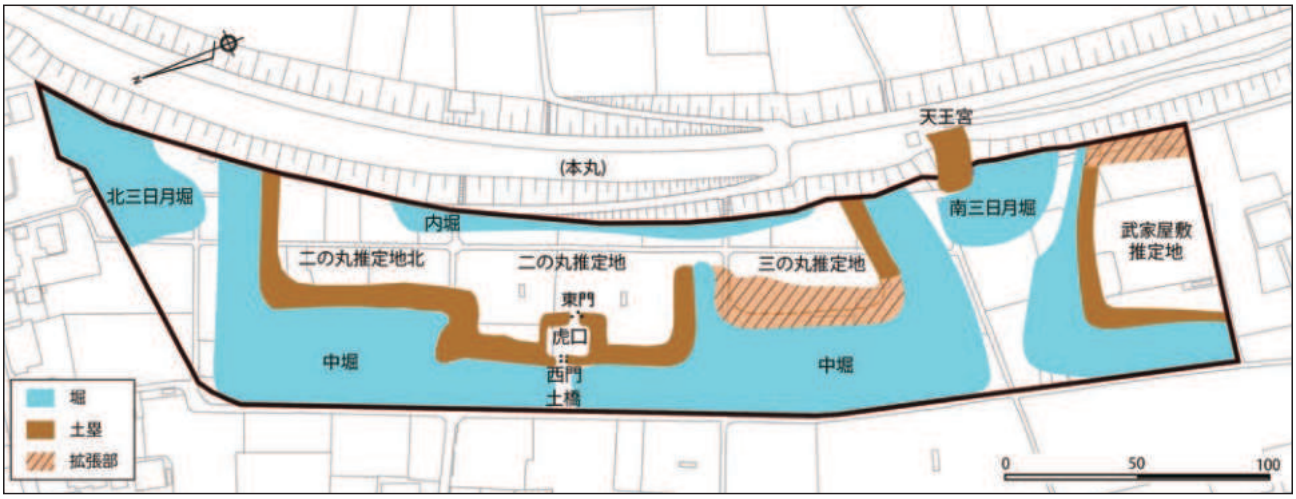
土塁と堀は先述のとおり第３面段階に構築されている。城跡の中堀や内堀に伴う土塁は、土留めのための石列や木杭が施されていたことは既に述べたが、本調査区の土塁には土留めの痕跡はみられなかった。これが城と武家屋敷の格差を示すのか、今後の検討が必要である。堀跡は安全面を考慮し堀底までの掘削はおこなわなかったが、少なくとも3.2m以上の深さであることが判明している。断面では分厚い洪水の堆積や、近世以降の水田層が確認できた。堀は屋敷推定地の北面で急激に幅を減じる。これは、その北側に位置する南三日月堀を避けたためと考えられる。また、屋敷推定地東面の堀は第２面段階で埋められ、平場を東へ拡張した様子を断面観察により確認した。拡張後の平場は調査区外に続く。これに伴い東側の土塁も消失したとみられ、城と同様に屋敷地でも改修がおこなわれていたことが明らかとなった。

調査成果から描く縄張り想定図

以上の調査成果を踏まえ、昨年度作成した新縄張り想定図に加筆・修正を加えたものが図20である。武家屋敷推定地では屋敷の存在を示すような痕跡自体はみられなかったものの、土塁・堀跡を検出したことで全体的な縄張りの把握に至った。

長沼城跡の現地調査は、本年度をもってすべて終了となる。来年度以降の整理作業によって、新たな報告ができるよう努めたい。　（伊藤　愛）

図19　第４面の遺構



現段階で想定される城郭構造名を記している

図20　新縄張り想定図

（３）塩崎遺跡群（しおざきいせきぐん）

一般国道18号（坂城更埴バイパス）
改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所在地及び交通案内：長野市篠ノ井塩崎2232ほか。篠ノ井線稲荷山駅から南東に0.8km。

遺跡の立地環境：千曲川左岸に形成された自然堤防上に立地。調査区は自然堤防を横断するように位置する。

図21　遺跡の位置（1：50,000）

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.10.1～2024.11.29	150㎡	市川隆之　風間真起子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
掘立柱建物跡	3（14）	弥生時代
土坑	14（2226）	弥生時代以降
溝跡	4（50）	弥生時代以降

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代（土器）、古墳時代～平安時代（土師器・須恵器）、近世（陶器）
石器	磨石・黒曜石剝片

調査の概要

本遺跡は弥生時代～平安時代の複合集落遺跡で、2013～2017年度に東側（千曲川側）の１区から西側の３区にかけて発掘調査を実施している。本年度は、残された２区と３区の間の市道下部分の調査を実施し、これをもって本遺跡の発掘調査は全て終了した（図22）。

本年度も含めた検出遺構数は、竪穴建物跡415軒を始め、貯蔵穴・井戸跡を含む土坑2,226基、土器棺再葬墓・木棺墓や周溝墓・古墳など多岐に渡る墓跡109基、区画溝などの溝跡50条を数える。

本年度の検出遺構は、掘立柱建物跡３棟・土坑14基・溝跡４条である。狭小調査区であるにも関わらず、これまでの調査での隣接調査区の資料を補完する成果に恵まれ、集落西端の様相をより具体的に捉えることができるようになった。

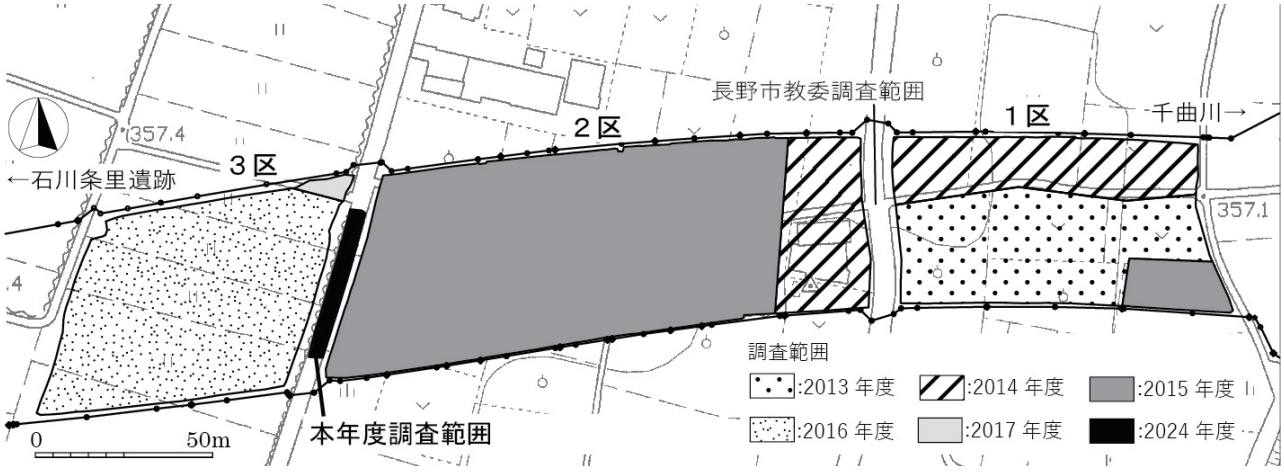


図22　塩崎遺跡群　年度別調査範囲図

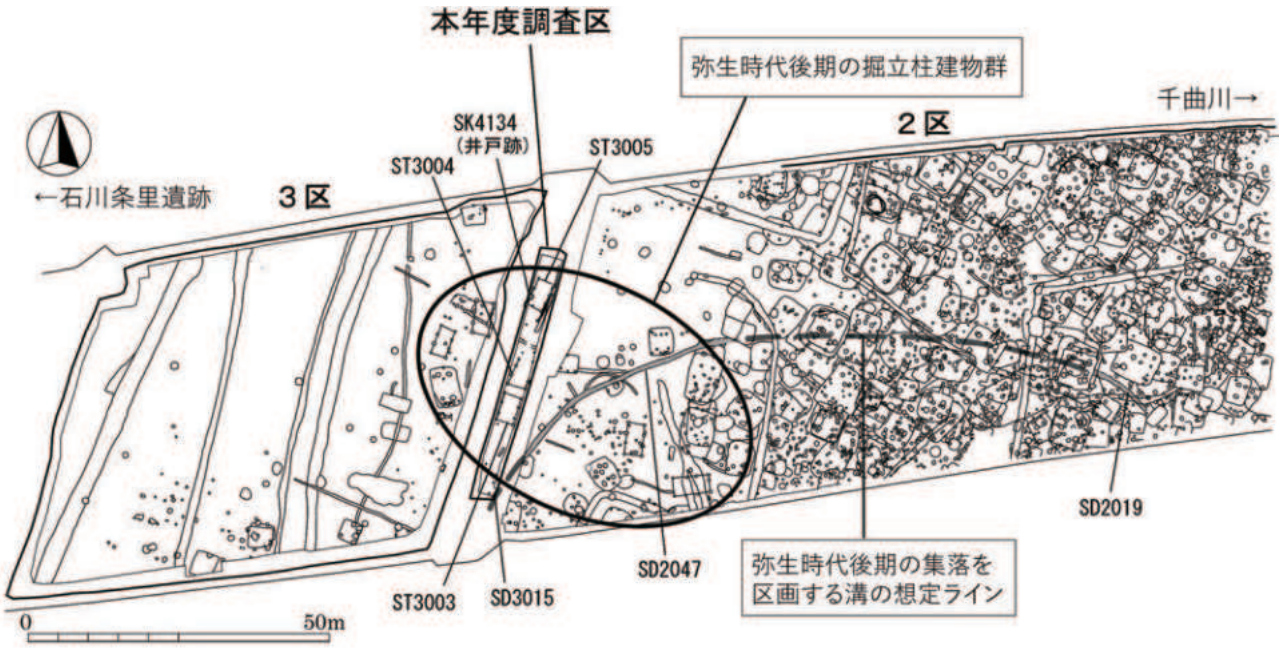


図23　塩崎遺跡群西側（２区西側～３区）の遺構配置図

集落の西端に建ち並ぶ掘立柱建物群（ST3003・3004・3005）

本年度は、弥生時代後期と考えられる掘立柱建物跡３棟を検出した（図23・図24）。３棟とも３間×１間で、規模は約4.5m ×3.0m である。規模・方向とも、３区で確認した掘立柱建物跡と同様である。集落の西側では竪穴建物跡がまばらとなり、その西端には倉庫などに使われた掘立柱建物が建ち並んでいたと考えられる。

弥生時代後期の集落の境界施設か（SD3015）

本年度は溝跡を４条検出したが、その配置からSD3015は２区 SD2047延長上にあたる可能性が考えられる（図23）。SD2047（・SD2019）は、弥生時代後期の集落を区画する溝跡と考えられ、SD3015がその延長であれば、当時の集落の区画範囲を示すものと想定される。

96基目の井戸跡を検出（SK4134）

本年度は井戸跡１基（SK4134）を検出し（図25）、井戸跡の検出数は96基となった。多くが２区西側から３区にかけて分布し、時期は弥生時代中期後半～近世と幅広い。周辺に中世の井戸跡が多いことから、SK4134も同様な時期の可能性がある。これまでに検出した中世の遺構は井戸跡・溝跡・土坑墓で、建物跡は検出しておらず、居住域は遺跡の調査範囲外にあったと考えられる。

（風間真起子）

図24　掘立柱建物跡 ST3003（北から）

図25　井戸跡 SK4134（東から）

（４）南栗遺跡（みなみくりいせき）

松本 JCT 建設事業

所在地及び交通案内：松本市島立5017ほか
長野自動車道松本 IC から南に３㎞。
遺跡の立地環境：鎖川左岸の自然堤防背後の緩斜面に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.5.20～2024.12.18	9,000㎡	廣田和穂　関　杏介 丸山晃平　小出晟生 鈴木時夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	107（157）	古墳時代末～平安時代
掘立柱建物跡	5（11）	奈良・平安時代
土坑	151（273）	奈良～中世
溝跡	5（13）	奈良～中世

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	古墳時代末～平安時代（須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗）、羽口
石器・石製品	平安時代（砥石）
金属製品	奈良・平安時代（鉄鏃）
その他	平安時代（鉄滓、鍛造剝片、粒状滓） 平安時代以降（動物骨）

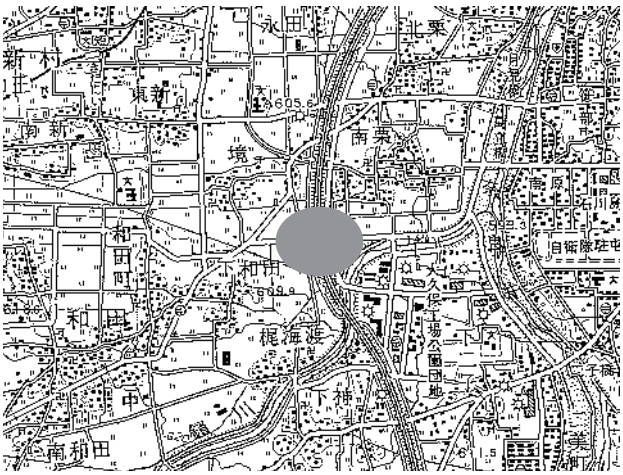


図26　遺跡の位置（1：50,000 松本）

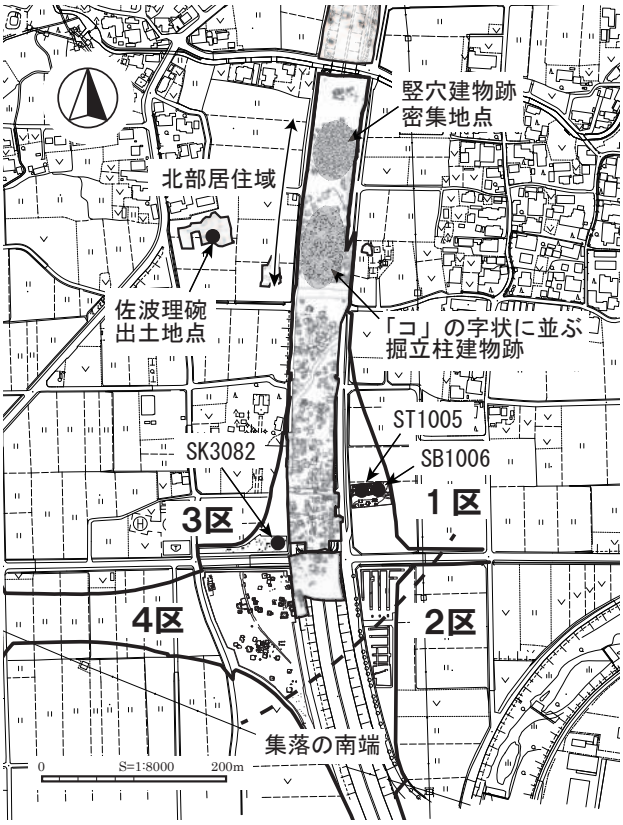


図27　南栗遺跡における既調査区と今年度調査区との関係

調査の概要

南栗遺跡は、1983～1999年に松本市教育委員会が圃場整備に伴い、1985・1986年には当センターが長野自動車道の建設に伴い発掘調査を実施した。2022年からは当センターにより、中部縦貫自動車道と長野自動車道を結ぶ松本 JC T の建設に伴う発掘調査が継続的に実施されている。

竪穴建物跡の検出数は過去の調査成果を含めて525軒となり松本市内最大級の古代集落跡であることが改めて確認された。今年度の調査地区は長野道建設時における調査区の東西両側に接しており、集落規模や遺構の性格の把握が大きな課題となった。

なお、今年度は当センターが行う発掘調査に加え、㈱シン技術コンサルと㈱島田組へ発掘作業支援業務を委託して調査を実施した。

今年度の調査では、古墳時代末期～中世までの遺構・遺物を検出した。以下、主な成果について時代ごとにその特徴を述べる。

古墳時代末期～奈良時代初頭

１区で当該期の竪穴建物跡（SB1006）１軒を

図28　竪穴建物跡（SB1006）完掘状況

図29　竪穴建物跡（SB1006）出土畿内系暗文坏

検出した（図28）。床面からは畿内系暗文坏（図29）が出土している。また３区では土坑（SK3082）から底部に丸みを有する須恵器が出土した（図30）。

図30　土坑（SK3082）出土須恵器坏

本遺跡では長野道の調査時に、１区の北側300ｍ程離れた地点で古墳時代末期の集落（図27）が成立し、短期間のうちに今年度調査地周辺の鎖川に近い南部にまで居住域が広がることが判明している（県埋文1990a、b）。今年度調査区である１・３区で当該期の遺構や遺物を確認したことは、本集落の拡大する状況を考える上でも重要である。

当該期は本遺跡から２～３km西方の新村地域に安塚古墳群、真光寺古墳群、秋葉原古墳群などの古墳群が点在しており、本集落との関連性も今後の検討課題となる。

図31　１区全景

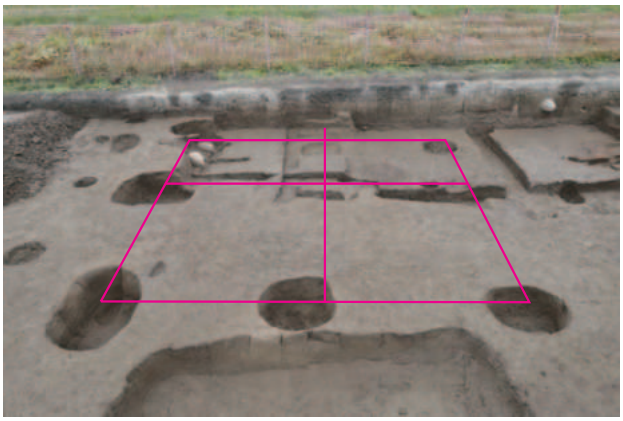


図32　掘立柱建物跡（ST1005）

図33　掘立柱建物跡（ST1005）ピット２版築状の堆積

奈良時代

１区では柱穴の平面形が方形の東西２間、南北２間以上と考えられる掘立柱建物跡を検出した（図32）。柱穴は長軸が100cm前後、深さ60cm程と大形で、掘方埋土では版築状に薄く土を突き固めた層が確認できた（図33）。

本遺跡では長野道の調査時に１区の約250m北側で掘立柱建物跡が「コ」の字状に並ぶ区画を検出したほか（図27 県埋文1990a）、松本市教育委員会の調査地点では佐波理碗が出土するなど（図27 松本市教委1984）、当該期に律令制度の影響を強く受けていたと推測される遺構、遺物がある。本遺跡の性格を考えるには周辺における既調査地点の情報を総合的に検討していく必要がある。３区では竪穴建物跡が40軒以上密集する範囲を検出した。いずれも１辺が４m前後で、東側カマドが多いなど規模形状に共通点が多く、一定の範囲で重なり合うように検出されることから、居住域に何らかの計画的規制が存在した可能性がある。当該期において掘立柱建物が並ぶ公的な空間と竪穴建物が並ぶ空間がどのように配置されていたかを探るのが今後の調査課題となる。

平安時代

３区では１辺が３～４m程の小形の竪穴建物跡を60軒以上検出した（図34）。規模や形状が類似しており、建物跡の向きにも共通性がある。同

図34　３区平安時代面（西から）

図35　竪穴建物跡（SB53）　内被熱した小形土坑

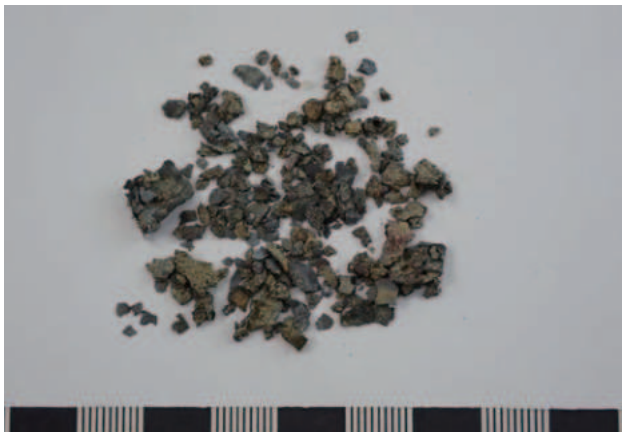


図37　竪穴建物跡（SB53）　出土鍛造剝片

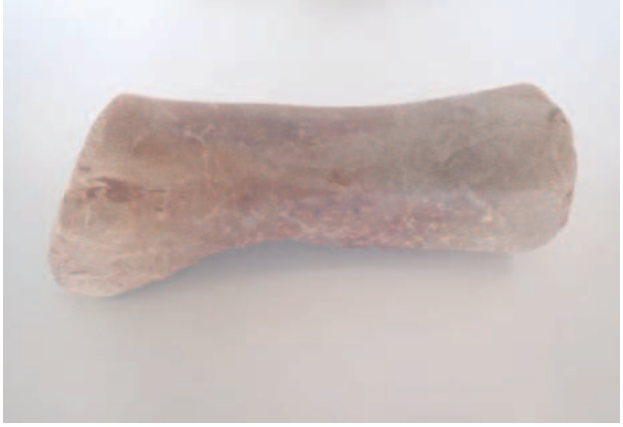


図36　竪穴建物跡（SB53）　出土砥石

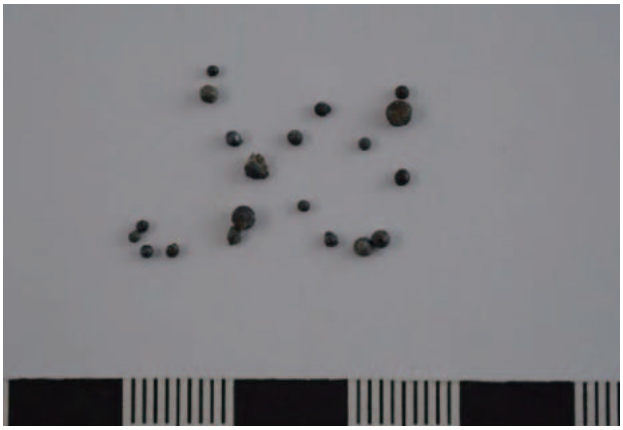


図38　竪穴建物跡（SB53）　出土粒状滓

様の竪穴建物跡密集地点が３区の北側約400mの長野道調査地点でも確認されている。こうした範囲が同時代に複数存在する点は集落内における居住域の計画性を考える上で重要となる（図27 県埋文1990ａ）。

４区の調査では、平安時代の竪穴建物跡（SB53）１軒を確認し、建物内で直径20cm、深さ約５cmの被熱した小形土坑を検出した（図35）。土坑周辺の埋土中には炭化物や焼土粒が多く含まれ、鞴の羽口片も出土したため、埋土を篩にかけたところ、鉄滓、鍛造剝片（図37）、粒状滓（図38）などを検出した。本建物跡からは大形の砥石（図36）も出土しており、出土遺物と遺構の状況から建物内で小鍛冶が行われたものと推測した。

１区では当該期の竪穴建物跡（SB1001）の床下から須恵器の壺が横位で出土した。壺は頸部から上を欠損しており、頸部側で土師器の皿、底部側で灰釉陶器の皿が出土した。壺内からは遺物等は出土していないが、床下からの出土であり、壺と皿の位置関係から見て、意図的に埋納された可能性が考えられる（口絵④）。

遺跡の範囲について

２区では遺構は確認できなかったが、自然流路を検出した。該当範囲を圃場整備前の航空写真（注１）と対比したところ、鎖川水系の旧流路の痕跡と一致することが判明した。また４区の調査では前述の竪穴建物跡より南側からは、ほとんど遺構がみつかっていない。以上の結果から今年度の調査で本集落の南端を明らかにすることが出来た。来年度以降は遺跡西側の調査が進むため、集落の西端を探ることも課題となる。

注１：国土地理院電子国土 web を活用

（廣田和穂）

参考文献

松本市教育委員会1984『松本市島立南栗遺跡』
長野県埋蔵文化財センター 1990a『南栗遺跡』
長野県埋蔵文化財センター 1990b『総論編』

（５）真光寺遺跡・真光寺古墳群

一般国道158号（松本波田道路）改築工事

所在地及び交通案内：松本市波田1719ほか
松本電鉄上高地線三溝駅から北に0.3km

遺跡の立地環境：梓川右岸に形成された河岸段丘上（森口面）に立地する。本遺跡の範囲内には1557（弘治３）年に再興されたと伝わる真光寺が所在している。遺跡の北側と南側には、開発が中世にさかのぼるとされる新村堰、和田堰、神林堰が流れており、これらは「三溝」の地名の由来とも言われる。

また、遺跡の東方には７世紀後半以降の築造と推定される安塚古墳群や秋葉原古墳群、古代・中世の新村・島立条里的遺構や、古代・中世の集落遺跡である新村遺跡が分布している。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.4.15～2024.9.30	1,800㎡	杉木有紗　酒井実姫 鈴木時夫　河西克造

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴状遺構	11（12）	中世以降
焼土跡	2（2）	中世以降
溝跡	8（39）	中世以降（時期不明含む）
土坑	261（737）	中世以降（時期不明含む）

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	中世以降（内耳鍋・カワラケ・陶磁器、土製円盤、羽口、「南鐐二朱銀」模造品）
石器・石製品	中世以降（凹石、砥石、石臼）
金属製品	中世以降（銭貨、釘、キセル）
木製品	近世以降（木杭）

図39　遺跡の位置（1：50,000 松本）

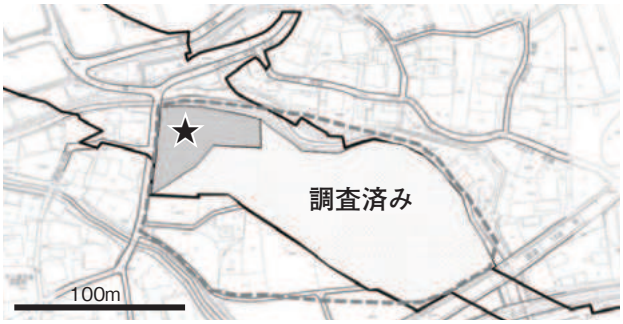


図40　本年度の調査位置（★部）

調査の概要

標記事業に伴い当センターが2020年度から調査を実施し、本年度で調査対象地における発掘作業がすべて終了した。2021～2023年度の調査では、７世紀後半～８世紀初頭の築造と考えられる古墳２基（SM01・02）、中世の火葬施設跡や土葬墓、中世の可能性が高い竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・柵跡・土坑・石列などの遺構を確認したほか、縄文時代中期の遺物も出土している。

本年度は遺跡範囲の北西側の地区を調査し（図40）、昨年度までと同様に中世後半の竪穴状遺構や溝跡、土坑などを検出した。さらに、近世後半から明治初頭の竪穴状遺構や溝跡、土坑を検出した。

また、本年度は2020～2023年度に出土した遺物の接合・復元及び実測作業や、脆弱遺物のクリーニング作業等の整理作業も行った。そして接合・復元の結果、2022年度に古墳（SM02）の石室入口付近でみつかった多数の須恵器片は、高さ約1.1ｍ、最大径約１ｍの大甕となることがわかった。

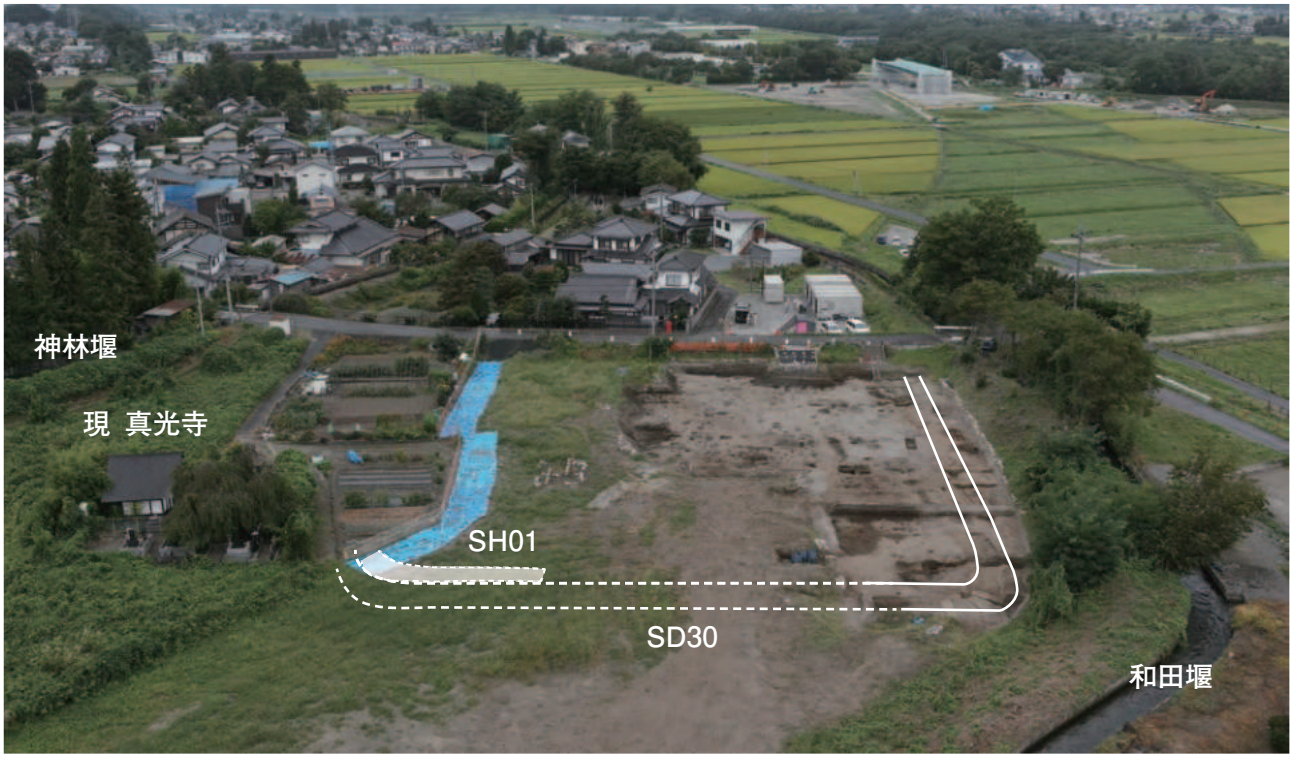


図41　溝跡 SD30全景（東から）

方形に巡る中世の溝跡（SD30）

昨年度の調査では、現真光寺お堂の北東部分で東西方向から北に向かってほぼ直角に屈曲する溝跡（SD30）を検出した（図41）。その後、同年12月に松本市教育委員会が現和田堰付近で試掘調査を行ったところ、SD30屈曲部から北に50m程離れた地点で、南北方向から西方向に屈曲する溝状遺構が確認されていた。

本年度の調査を開始し遺構の広がりを精査したところ、松本市が確認した屈曲する溝状遺構は、昨年度調査した溝跡（SD30）と連続することが判明した。昨年度調査区から北に向かって伸びたSD30は、和田堰手前で西に向きを変えて屈曲し、本年度調査区の西端まで続いていた（図42）。

溝跡（SD30）は幅約２ｍで、残存する深さが0.2～0.3m程の逆台形状をなす。溝跡の埋土からは16世紀半ば頃の内耳鍋のほか、凹石や錆で覆われているが方形の金属製品が出土しており、中世後半期に埋没した遺構であることがわかった。

昨年度と本年度の調査で屈曲部が２箇所みつかったことから、３辺を有する方形であることがわかった。東側の屈曲部から屈曲部までの長さは約

図42　溝跡 SD30屈曲部（東から）

50mで、西側はおそらく現道路下に巡ると想定されるので、SD30は短辺約50m、長辺60m以上の長方形に巡る溝跡であると推測している。なお、長方形の軸はほぼ正方位になっている。県内では、このような溝跡は15～16世紀頃の館や寺院を囲む「堀跡」として確認されている。

本遺跡のように面的に確認できた事例は松本市内では数例にとどまり、旧波田町内では初めての調査となった。

溝跡（SD30）に関連する遺構

現和田堰付近で確認したSD30の屈曲部からは

図43　溝跡 SD30と SD44検出状況（真北から）

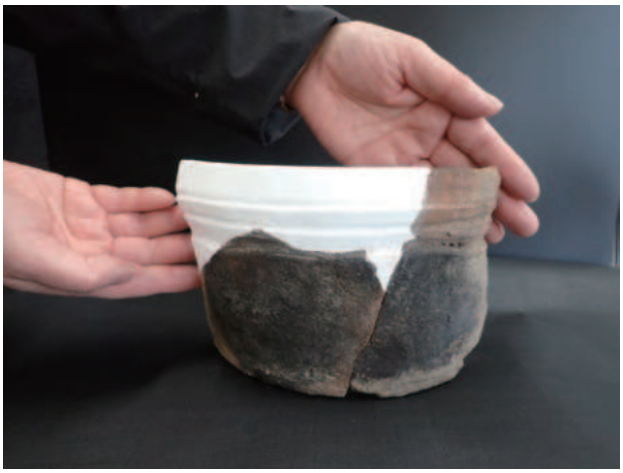


図44　土坑（SK701）出土の内耳鍋

溝跡（SD44）が東方向に向かって分離し、調査区北東端に続いていた（図43）。SD44は幅約1.4ｍで、深さはSD30の半分ほど（約0.1ｍ）であった。SD30とSD44の検出状況や埋土を観察したところ、２つの溝跡には切り合い関係が認められなかった。そのため、２つの溝跡は同時期に埋没したものと考えているが、埋没以前にどのような用途があったのかは判明していない。SD30が堀のような溝跡であるため、SD44は堀に関係する溝であった可能性も考え、同時存在していたのではないかと現場では考えたが、今後類似例を調査して本遺構の性格を位置付けたい。

また、昨年度の調査ではSD30南東の屈曲部に並行して石列（SH01）がみつかったが、本年度掘削を行ったSD30の付近では同様な石列の痕跡は認められなかった（図41）。後述する近世の溝跡に削平された可能性も否めないが、SH01の性格を考えるにあたり慎重に遺構間の関係を捉えていきたい。

中世後半の土器・陶磁器

方形に巡る溝跡（SD30）で区画された内側では、竪穴状遺構や土坑などから、中世後半の内耳鍋・カワラケや瀬戸美濃窯産の陶器片、輸入磁器片が出土した。特に内耳鍋は、土器組成のうちで多くを占めていること、溝跡（SD30）で区画された外側の出土量に比べ内側の出土量が多いことが特徴である。

内耳鍋は、体部が直線的あるいはわずかに内湾して立ち上がり、直径は30㎝、高さは15㎝前後のものが多いが、直径20㎝程の小形もある（図44）。口縁部はわずかに内側に屈曲して内面に段があるものと、直線的に立ち上がって内外面に数条の横ナデがあるものがある。これらの特徴から出土した内耳鍋の主な時期は16世紀頃とみられ、方形に巡る溝跡や方形区画の内側で内耳鍋が出土した竪穴状遺構や土坑は、当該期に属する可能性が高い。

近世以後の真光寺遺跡の姿

本年度の調査では中世の遺構群のほかに、近世後半の遺物が出土する溝跡や、幕末～明治初頭頃の遺物が出土する竪穴状遺構や土坑を検出した。

調査区の北側では、中世の溝跡（SD30）を切って、近世後半の陶磁器片が出土する溝跡（SD36）がみつかった（図45）。SD36は東西方向を軸とし、現和田堰に並行していた。溝の幅は約２ｍ

図45　溝跡 SD36の検出状況（西から）

で、残存する最も深い部分は約0.6mを測る。そして部分的ではあるが、SD36の壁際で先端を加工した木杭が等間隔に並んでいて、土止めが行われた可能性が考えられる（図46）。埋土の観察からは流水があったと思われるが、採取した土の珪藻分析等の科学分析を実施しているため、その結果と合わせて判断していきたい。

また、竪穴状遺構（SB05）からは鉄製の「寛永通宝」のほか、幕末～明治初頭の陶磁器が出土した。さらに鞴の羽口片や椀形滓を含む複数の鉄滓が出土したため、鍛冶に関わる遺構である可能性を考えて本遺構や周辺遺構の埋土を精査したが、板状剝片といった微細遺物は確認できず、直接的な鍛冶の痕跡は認められなかった（図47・48）。ただし、昨年度調査したSK337（図49）は松本城下町跡伊勢町地点（注１）の「鍛冶遺構」と酷似しており、出土した羽口片がSK337から廃棄されたものであると考えれば、遺跡内における幕末～明治初頭頃の鍛冶の存在が想定される。

今後の課題

これまでの調査で、７世紀後半～８世紀初頭、中世後半期、近世後半から近代にかかる時期の遺構や遺物出土の様子を捉えてきた。なかでも本年度は中世の遺構群の広がりを捉えることを調査の目的としていたわけだが、16世紀頃の方形に巡る溝跡をはじめとする居住に関わる中世後半の遺構群の姿がみえてきた。

2021～2023年度に調査した、遺跡範囲の東側から中央にかけて広がっていた火葬施設跡や土葬墓、13～14世紀頃の遺物を主体とする遺構は、本年度調査区では確認できず、中世後半期においても数段階の時期があることや利用する場所が変わっていたことがわかった。今後、個々の遺構の時期や性格を改めて評価して、遺跡内で展開した中世後半期の土地利用の変遷を明らかにしたい。

（杉木有紗）

（注１）松本市教育委員会1996『松本城下町跡伊勢町～近世・町屋跡の発掘調査～』

図46　溝跡（SD36）から出土した木杭

図47　竪穴状遺構（SB05）完掘状況

図48　竪穴状遺構（SB05）出土の羽口（長さ約９㎝）

図49　土坑（SK337）の検出状況

（６）安塚古墳群（やすづかこふんぐん）

一般国道158号（松本波田道路）改築工事

所在地及び交通案内：松本市和田134-１ほか
アルピコ電鉄新村駅から南西へ750m。

遺跡の立地環境：梓川の右岸、東筑摩郡山形村から流れる唐沢川が形成した扇状地の扇端部に分布する。調査対象地は古墳群の南端に位置する。遺跡の東側には秋葉原古墳群（1982年度に松本市教育委員会調査）が隣接して分布する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.6.3～10.31	1,500㎡	河西克造

検出遺構

遺構の種類	数	時期
古墳（石室）	１（５）	古墳～奈良時代
集石	１（４）	中近世１、時期不明３
土坑	54（74）	中近世49、近世以降５、時期不明20
焼土跡	１（１）	中近世
井戸跡	１（１）	中近世
竪穴状遺構	１（１）	時期不明

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、古墳～古代、中世
石器	縄文
金属製品	古墳～古代（鉄鏃）、中近世（鉄釘等）

調査の概要

安塚古墳群は、1978年に圃場整備事業に伴う発掘調査が松本市教委により行われ、９基の古墳が調査された。

今回の事業用地は、古墳群の南端を東西方向に延び、調査対象面積は21,000㎡に及ぶ。用地内では、2020・2023年度に松本市教委が行った試掘調査で３基、2023年度に埋文センターが行った遺構確認調査で２基の古墳が確認されている。

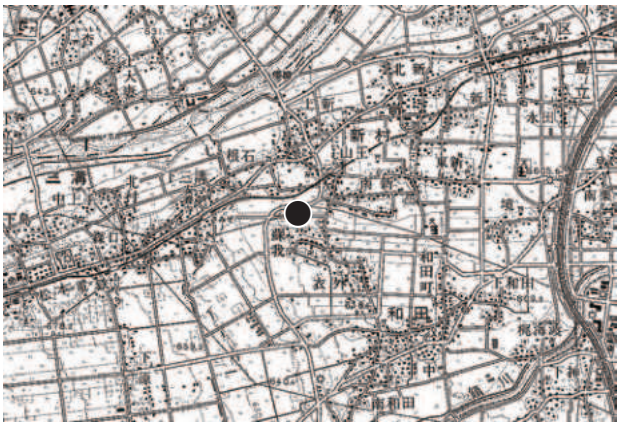


図50　遺跡の位置（1：50,000 松本）

今年度は、㈱島田組に発掘支援業務を委託して本調査と遺構確認調査を実施した。

第13号古墳の調査

今回は、昨年度に発見した第13号古墳のある５区で面的調査を行った。

第13号古墳は、墳丘が近世以降の水田造成で削平され、横穴式石室のみ遺存していた（口絵）。周溝は確認されておらず、存否は不明である。石室の長軸はN12°Wで、南東に開口する（図51）。

石室は地面を細長く掘り窪めた半地下式の構造である。長軸3.3m、短軸0.9～1.1mを測り、形状は無袖で開口部がやや幅広気味になる長方形である。石室には梓川から運んだと推測される河原石が用いられており、奥壁に大振りの石を３個立て並べ、側壁は扁平な河原石を平積みに積み上げている。また、石室内は開口部から1.1m奥壁側に立柱石が設置されており、この立柱石を境界に石室内は２分割されていると理解できる。石室の床は、地山の上に小石が混じる地山主体層を約10cm埋めて構築されている。石室の検出面から土師器の甕もしくは壺の破片、石室内から鉄鏃が

図51　安塚古墳群　第13号古墳　奥壁と側壁（南東から）

出土した。土器の時期は不明であるが、隣接する地区（４区）で第15号古墳の検出時に出土した須恵器の時期から、第13号古墳は８世紀中頃と推測できる。

第13号古墳では石室の解体調査を行った。その結果、側壁は楕円形の河原石のため上下の石はほとんど接しておらず、土を入れ込み積んでいることや（図52）、側壁は立柱石を支える石を除き、石にある平坦な面が石室内に向くように積んでいることなどがわかった。梓川では、平坦な面がある石を選んで採取していると推測される。

中近世の遺構

５区では古墳と同時期の遺構は確認できず、古墳が単独で存在したと推測される。その一方、埋土から古瀬戸の合子（蓋）が出土した遺構や、古墳が埋まった後に堆積した土層が埋土になっている遺構が確認され、中近世にもこの地が利用されていたことが判明した。秋葉原古墳群では墓址を主体とした近世遺構が数多く確認されており、中近世の新村・和田地区の様相がうかがえる資料である。

図52　安塚古墳群　第13号古墳　側壁断面（南東から）

遺構確認調査

５区の西側（３・４区）にトレンチを設定して調査を行った。その結果、用地内の北側は古墳などの遺構と黒色土（包含層）の堆積が確認された。その一方、南側は緩やかに傾斜しており、砂礫を含む土層が堆積する状況で、遺構は確認できなかった。昨年度の調査成果と同様、用地内は北側と南側とで土層堆積状況と土地利用が違うことがわかった。

今後の課題

現時点で調査対象地内における古墳の存否確認は、約半分の面積に過ぎない。今後は、さらに用地内における古墳の存在を把握し、用地外の古墳密集域と用地がある南端とでの古墳の様相の違いを見出すことが必要となろう。　　（河西克造）

図53　安塚古墳群　調査範囲全景（松本市和田上空から乗鞍岳方向を臨む）

（７）西浦遺跡（にしうらいせき）

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼2701ほか
JR 元善光寺駅から、南西約1,200m。
遺跡の立地環境：天竜川右岸、南東に向かい傾斜する低位段丘面、標高約440～450mに立地する。二段ある低位段丘のうち上位の段丘面。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.7.1～2025.2.28	7,743㎡	村井大海・大泰司統・和田普治

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	3（16）	弥生時代
掘立柱建物跡	7（18）	古代・中世・近世
土坑	275（784）	縄文時代～古代、古墳時代、古代、中世、近世（精査の結果、過去に調査した土坑が２基欠番）
溝跡	11（31）	古墳時代～中世　本年度は2022年に調査したSD110の続きも検出し、調査した
柵列	3	中世～近世
不明遺構	1（3）	古代～中世
古墳	（1）	（2022年　古墳時代）
方形周溝墓	（2）	（2023年　弥生時代）

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世
石器	弥生時代、古墳時代
黒曜石剥片	縄文時代
金属製品	寛永通宝１点、桐一銭青銅貨（大正時代）１点

調査の概要

本調査は民間調査組織、国際文化財株式会社の支援導入を実施して行った。

本年度の調査区は、2023年同様、2022年の地区設定Ａ～Ｆ区を踏襲した。過去に調査した地区に隣接する調査範囲に－２と枝番号を付け、本年度の調査区をＢ－２区、Ｅ－２区、Ｆ－２区とした（図56）。

図54　遺跡の位置（1：50,000 飯田）

排土置き場を調査区外に確保できなかったことから、各調査区とも範囲の半分を先行して調査し、残る半分に排土を置き、先行調査終了後に、反転し、残り半分を調査するという方策を取った。過去の調査結果を踏まえて、遺構密度が濃いと予想されたＢ－２区、Ｆ－２区、Ｅ－２区の順に調査を開始し、適宜、反転、調査再開とした。

Ｂ－２区の県道市場桜町線に面した段丘崖を掘削、宅地造成した部分（図55・57）には建物基礎が残っていた。11月に直上の段丘面部分の調査を終了し、JR 東海に基礎撤去を依頼した。段丘面上から重機による基礎撤去を清水建設が行うこととなり、12月中に基礎撤去が終了（図59）、2025年１月、調査開始の運びとなった。

Ｂ－２区段丘面部分は、水田や宅地の造成により削平されていたが、残された遺構を調査できた。また調査区北側縁は流路跡（図55・57）で遺構を確認できなかった。この流路は段丘と段丘崖を侵食する。この地形を生かし、現在は下位の段丘へ降りる道路となっている（図57・59）。Ｂ－２区の主な調査成果に、２×５間の掘立柱建物跡ＳＴ302がある（図57・58）。側柱の建物跡だがその内外に並ぶ側柱と規模と形状が似た土坑に、付属施設の可能性もある。新屋敷遺跡の建物址10（飯田市教育委員会1986『恒川遺跡群』）等の類例から、奈良時代かその前後と考える。

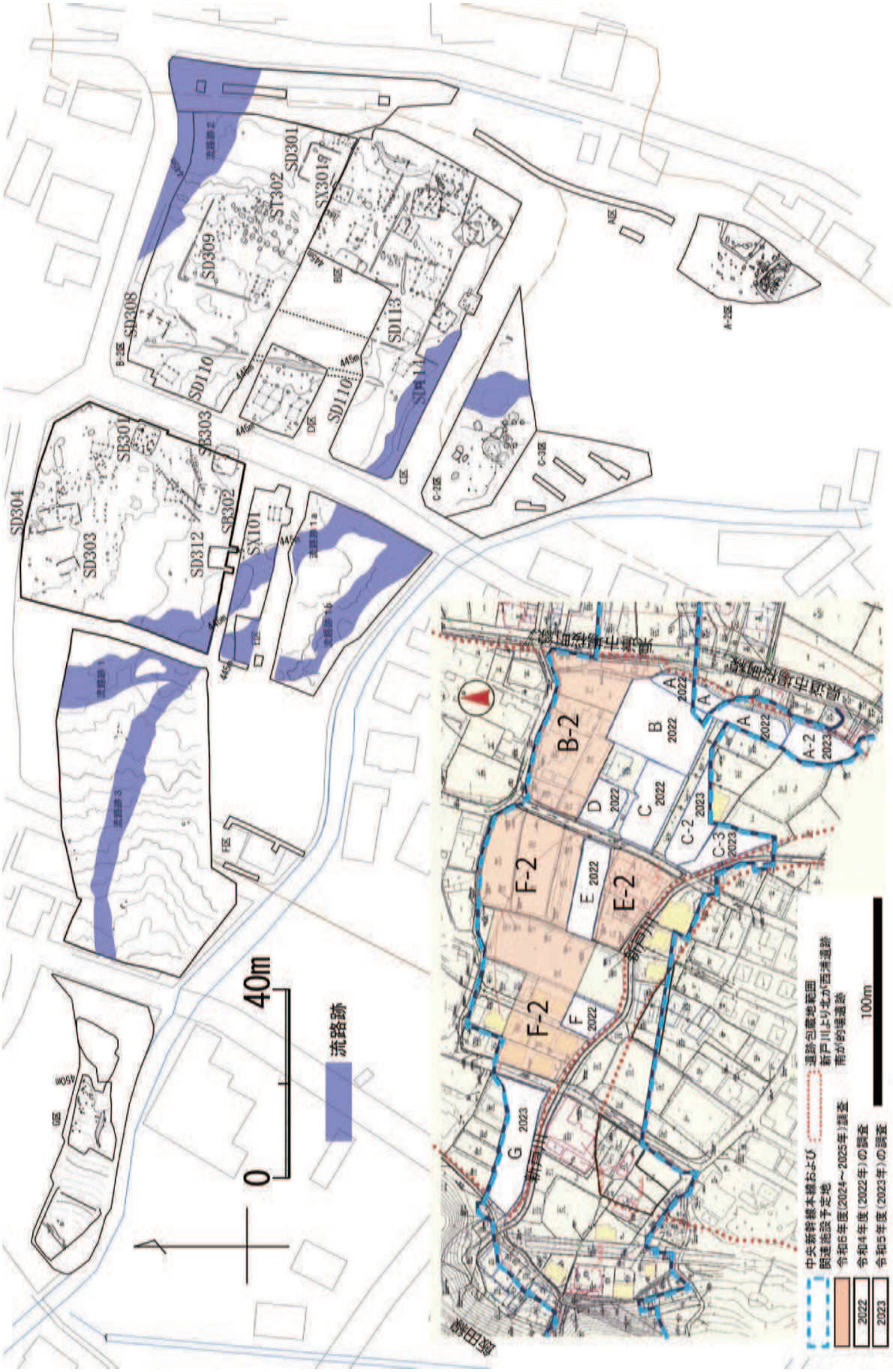


図55　検出遺構・トレンチ掘削位置

図56　調査区名称

図57　B－2区東側（図55参照）左に流路と現在の道路　右上にSD301とSX301　右下にST302の柱穴跡が並ぶ

図58　B－2区ST302　右奥にSD301とSX301（西から）

また2022年に調査したＣ区で確認された溝跡SD113・114と連続するSD309（図55・60・61）や、Ｃ・Ｄ区で確認された溝跡SD110（図55）の続きを検出した。SD113・114は古墳時代の集落を区画する塀の布掘りと想定されており、溝の底部形状もSD309と似る。ただしSD309に時期を特定できる遺物出土状況は無かった。

SD110（図55）は土の堆積状況から、用水路等の水の流れがある遺構の可能性が、2022年調査時も今回も想定された。

Ｆ－２区も耕作地と宅地の造成により削平されており、残った遺構を調査した。特徴的な遺構として弥生時代の竪穴建物跡SB301～303（図55）がある。SB301は土器埋設炉で（図62・63）、弥生時代中期後半の台付甕が埋められていた。SB302の中心部分を近世以降の暗渠が壊していた。暗渠から出土した一個体分の土器破片が炉の埋設土器だったと思われる。時期と器種の断定には接合作業が待たれるが、甕のようである。SB303は床面まで造成が及び、大部分無くなり、また推定される平面形の半分は調査範囲外の道路下である。調査区壁面直下で検出した埋設された中期後半の甕が炉に伴うと考える。遺構の残存部分からSB301、302、303は類似性の高い建物跡と考える。

本年度、全ての調査区を通して、注目すべき遺構に、方形に巡る溝跡SD301・303（図64）、304（図65）、308、312がある（図55）。

四角い溝の中に丸く粘土が貼られていたSX301とそれを取り囲むSD301（図66）は、平面形の線対称軸を同一とするためひとつの遺構とも想定できる（図55・57・58）。

2022年検出の不明遺構SX101は位置と形状からSD312の南東隅部分と考える（図55）。

これらの遺構の時期は、出土遺物等から古代から中世にかけての可能性がある。長楕円形の穴が長軸方向に連続して溝を構成するため、板塀の布掘りと考えた。ただしSD309などと比較すると規模が小さい。また囲いの中に掘立柱等の痕跡は無い。その規模から『一遍聖絵（一遍上人絵伝）』

図59　西浦遺跡遠景（東から　段丘崖側から）

図60　Ｂ－２区　SD309（北西から）

図61　Ｂ－２区　SD309の底部形状（西から）

「巻11　一遍上人正応２（1289）年８月２日　兵庫の観音堂にて法談す」に描かれている祠の瑞垣（みずがき）を想定した。この絵の祠は、掘立柱建物では無いとのことで、今回の検出状況から同様の建物が囲いの中に存在した可能性を指摘できる。また、祠の側面側に塀が開口部を持つ点も似る（小野正敏編 2001『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会）。そこで『一遍聖絵』を参考にしてSD303を

推定復元したのが図67である。

流路跡はB－2区に加え、E－2区・F－2区からも複数検出された（図55）。旧新戸川と考える。川は段丘面に扇状地を形成する一方、この段丘を開析する。そのような土砂が動く土地を、人間が継続的に利用してきた事がわかる。

（大泰司　統）

図62　F－2区　SB301（東から）

図65　F－2区　SD304（北から）

図63　F－2区　SB301土器埋設炉（南から）

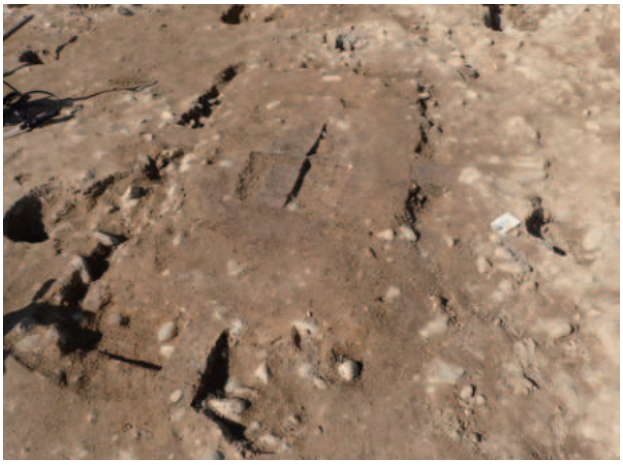


図66　B－2区　SX301土層断面（南から）

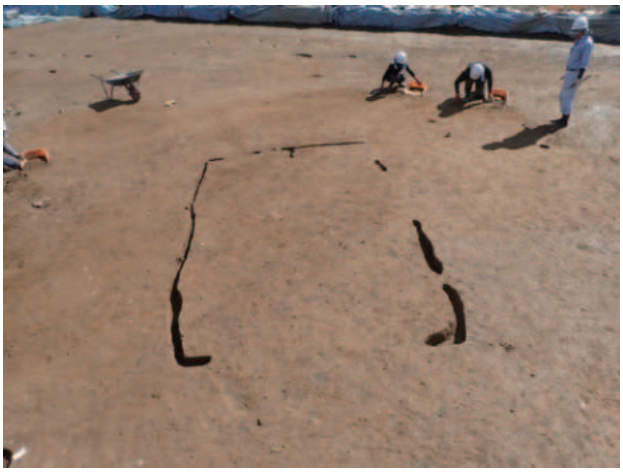


図64　F－2区　SD303（北から）

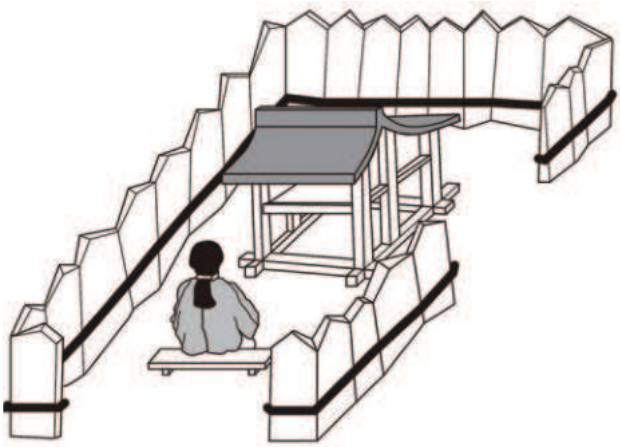


図67　SD303推定復元図

（８）五郎田遺跡（ごろたいせき）

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4067ほか　JR元善光寺駅から南南西約１㎞。

遺跡の立地環境：天竜川右岸、南東に向かい傾斜する低位段丘面、標高約430ｍに立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.7.3～2025.2.7	1,606㎡	村井大海　大泰司統 和田晋治

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	32（100）	弥生時代、古墳時代 奈良・平安時代
掘立柱建物跡	3（15）	古墳時代～奈良・平安時代
土坑	203（919）	弥生時代、古墳時代 奈良・平安時代
溝跡	4（24）	不明

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代中期・後期、古墳時代 奈良・平安時代
石器・石製品	弥生時代、古墳時代（石鏃、有肩扇状形石器、石包丁、砥石、管玉、臼玉など）

調査の概要

五郎田遺跡は、リニア中央新幹線建設工事や国道改良工事に伴う発掘調査で、弥生～平安時代の集落跡がみつかっている。

本年度の調査区は、竪穴建物跡34軒などが検出された2021・2022年度の調査区の北側に隣接する道路建設予定地である（図69）。発掘調査は、昨年と同様に㈱シン技術コンサルに発掘作業支援業務を委託して実施した。

調査区は、天竜川の支流である土曽川の左岸に位置し、北西側から南東側にかけて比高約５ｍの緩斜面となっている。そのため農地の造成により

図68　遺跡の位置（１：50,000飯田）

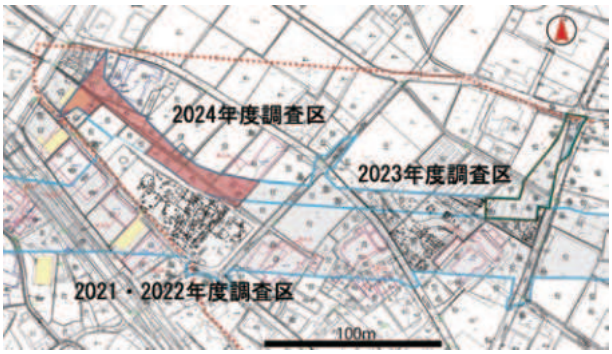


図69　本年度調査区

全体が深く削平されており、床面のみの確認にとどまる竪穴建物跡も少なくなく、遺構の保存状態はけっして良好とはいえなかった。

調査区外に表土を排出できないことから、調査区を大きく二分して実施することとし、まず南東部側からの調査に着手した。その後、排土を反転し、北西部側の調査を実施した。遺構の検出面は１面で、耕作土直下の黄褐色砂質土の地山層である。

検出された主な遺構は、竪穴建物跡32軒、掘立柱建物跡３棟、土坑203基である。遺構は、南東部に集中しており、著しく重複していた。また、調査区の幅が狭いこともあり全体を調査できたものは少ない（図72）。

竪穴建物跡の所属時期の内訳は、弥生時代後期２軒、古墳時代中期１軒・後期５軒、奈良・平安時代20軒、時期不明４軒である。掘立柱建物跡は、確実なものは３棟で、2021・2022年度の調査区ですでに検出されているものの北東部の妻側に

図70　調査区遠景（南東から撮影）

図71　調査区南東部全景

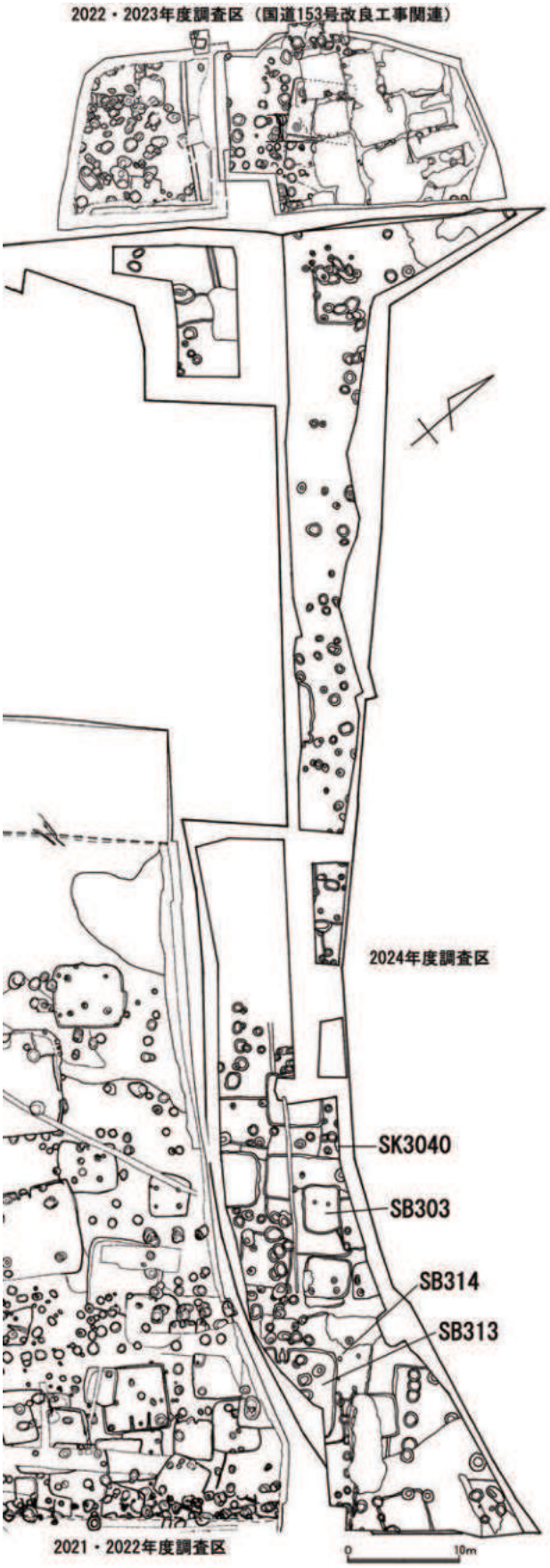


図72　調査区遺構配置図

相当する部分である。なお、掘立柱建物跡については、土坑の規模や配置を検討すれば棟数はまだ増える可能性がある。

弥生時代の竪穴建物跡

竪穴建物跡SB314は、古墳時代や平安時代の竪穴建物跡などと重複し、さらに攪乱が入っていたことから全体の約1/3の範囲の調査にとどまった。壁は北東辺のみが存在し、床面までの深さは10cm程度であった。床面は全体的に固く締まり、容易に検出することができた（図73）。

炉跡は、口縁部と底部を打ち欠いた甕を埋設し、板状に割った河原石を炉縁石として添えていた（図74）。主柱穴は、本来は4基と思われるが、検出できたのは北西の1基のみで、他の柱穴は後世の遺構や攪乱によって滅失しており、痕跡を確認することはできなかった。現存する遺構から平面形は一辺約5.5mの方形と推定される。出土遺物は少ないが、床面直上から管玉が1点出土している。時期は、炉に埋設された土器から弥生時代後期前半である。

竪穴建物跡以外では土器埋設土坑などが検出されている。SK3040は中期後半の大形甕の胴部破片を埋設していた（図75）。土器の内部や周辺に焼土が認められたことから、屋外炉としての機能が考えられる。

古墳時代の竪穴建物跡

竪穴建物跡SB313は、南側が調査区外となるため発掘できたのは北側の1/3ほどである（図76）。2021年度の調査で南側の一部が調査されており、その成果もふまえると、平面形は方形で、一辺約8mを測る大型の建物跡である。

床は2面が確認され、古い床面は地山を平らに整地し、新しい床面はその上に厚さ5～8cmの土を貼っていた。新しい床面には壁溝と壁柱穴が付設していた。また、カマド左側の床面上には砂が敷き詰められていた。

主柱穴は4基と考えられ、調査区内で検出された1基は直径1m、深さ90cmを測り、底面に直径40cmの柱の痕跡も認められた。

カマドは北西壁の中央に構築されていた（図77）。煙道部が建物の外部ではなく内部に備わる特殊な構造のものであった。粘土造りで、火床面、壁面ともに赤化が著しく、焼土も厚く堆積し、支脚石もやや傾いた状態で残っていた。カマド全体の規模は壁から焚口までの長さ1.4m、幅60cmを測る。焚口の間口は55cm、燃焼部は奥行き

図73　SB314（南東から撮影）

図74　SB314土器埋設炉（北東から撮影）

図75　SK3040（南西から撮影）

図76　SB313（北西から撮影）

図78　SB313遺物出土状況（南東から撮影）

図77　SB313カマド（南東から撮影）

図79　SB303（北西から撮影）

60cm、幅40cm、煙道部は長さ80cm、幅25cmを測る。

カマドの袖の先端部のみに石が埋め込まれていた。袖石は長さ86cmの鰹節形の河原石を半折し、各々を左右両側に折面を上に向け内傾させて立てていた。また、煙道部の入口の両脇にも大形の扁平な河原石を内傾させて置き、周囲を粘土で覆い固めていた。

焚口の天井石は、左袖に架かったまま半ばで折れていた。右袖に架かっていた部分は焚口から30cmほど離れた床面上で見つかった。カマド周辺からは他に大形の河原石が３点出土しており、これらも天井石の一部と考えられる。

カマド周辺には厚さ１～３cmの炭化物層が広がっており、袖石まわりに貼った粘土下にも認められた。それによりカマドが改修されていることが明確となった。また、袖石は旧床面時から使用されていたことも併せて判明した。

遺物は、カマドの両脇及び燃焼部から土師器の坏や甕の大形の破片がまとまって出土した（図78）。それらから、本建物跡は６世紀前半のものと思われる。

平安時代の竪穴建物跡

竪穴建物跡SB303は、平面形は隅丸長方形で、長辺4.3m、短辺3.3m、検出面からの深さ25cmを測る（図79）。カマドは、北東コーナーに設置されていた。石組カマドと思われるが、原形をとどめておらず、天井石や袖石と思われる大形の河原石が散乱していた。主柱穴は４基で、中心から南東側に寄った位置に穿たれていた。

小形の坏や高台付盤などが出土しており、それらから本建物跡の時期は11世紀後半と考えられる。（和田晋治）

（9）ママ下遺跡（したいせき）

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼1404-２ほか　JR 元善光寺駅から、南西に約１㎞。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の東側に向かい緩やかに傾斜する低位段丘面に立地する。標高およそ435m。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.9.9～2024.9.11	1,080㎡	村井大海　大泰司統 和田晋治

検出遺構

なし

出土遺物

なし

調査の概要

民間調査組織（国際文化財株式会社）による技術支援を導入し、４本のトレンチによる確認調査を実施した。

ママ下遺跡は2001年から2002年にかけて、飯田市教育委員会が発掘調査を実施しており、今回の確認調査範囲の隣接地において古墳時代後期の竪穴建物跡12軒、掘立柱建物跡３棟、平安時代の土坑２基、中世の建物跡１棟などを調査している。また縄文時代から奈良・平安時代に至るまでの幅広い時代の遺物が出土している。その際の遺構検出面は地表下約50cmから確認されており、土質は固く締まった砂土とされている（飯田市教育委員会2003）。今回の確認調査では、それを目安に遺構検出面の確認及び遺構の検出に努めた。

結果、いずれのトレンチからも地表下約１m～1.8mの深度まで客土が堆積しており、客土の下からは、締まりの弱いまたはやや強い砂質シルトの堆積を確認した。飯田市教育委員会による発掘調査時の地表から遺構検出面までの深度を大幅に上回る深さまで客土が堆積しており、さらに客土下の堆積は河川等によるものと推定され、遺構検出面は滅失していると判断した。そのため本年度の確認調査範囲において本調査は不要と考える。

（村井大海）

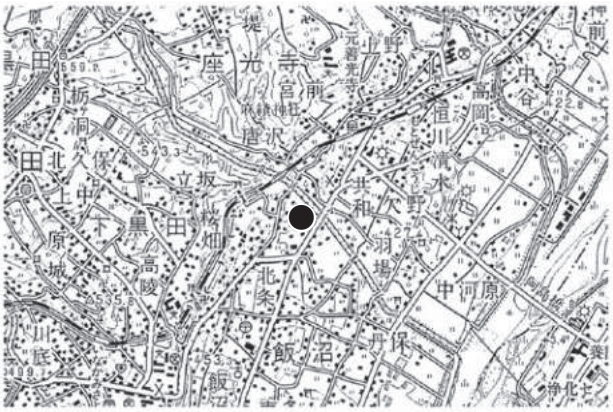


図80　ママ下遺跡の位置（1：50000 飯田）

図81　調査範囲及びトレンチ配置図（1：2500）

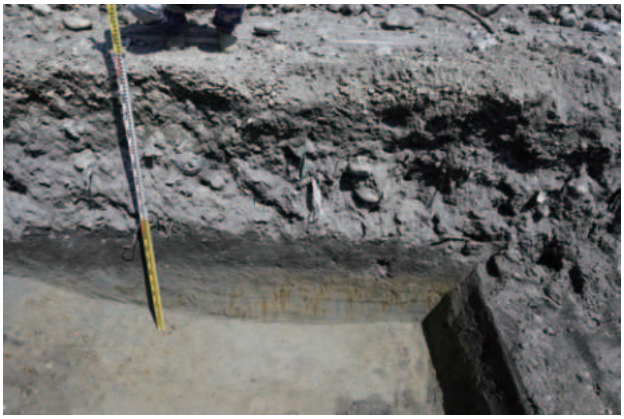


図82　３Ｔ西側北壁セクション

参考文献

飯田市教育委員会 2003『ママ下遺跡』

（10）正泉寺遺跡・五郎田遺跡

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業
座光寺上郷道路

1　正泉寺遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺 4090-1 ほか JR 元善光寺駅から南西へ約 0.9㎞。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の土曽川左岸の土石流堆積物上に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.4.3 ～ 2024.12.20	4,500㎡（うち2,000㎡は確認調査）	長谷川桂子　綿田弘実 春日皓介　島田亮仁 関　杏介　依田健太 遠藤恵実子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	70	古墳時代～古代
土坑	196	古墳時代～古代
方形周溝墓	2	弥生時代
溝・流路跡	1	弥生時代～古墳時代
掘立柱建物跡	1	古墳時代～古代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代 陶磁器（近世）
石器	弥生時代（打製石鏃、磨製石鏃、有肩扇状形石器） 古墳時代（打製石斧）
金属製品	古墳時代（耳環） 古墳時代～古代（刀子、鎌）

調査の概要

正泉寺遺跡は、座光寺上郷道路建設に伴う調査で４月から行った。これまでの発掘調査歴はないが、弥生時代から近世の遺物散布地として知られている遺跡であり、2020～2022年に行われた確認調査では弥生時代と古墳時代の遺構・遺物を確認しており、一帯での集落の広がりが想定されていた。

調査は南東（国道153号側）から１区、２区、３区に分割して行った（口絵４⑦、図84）。調査区は全体的に後世の攪乱の影響を大きく受けていたものの、竪穴建物跡70軒、土坑196基、掘立柱建物跡１棟、流路１条を検出した。古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構が重複して存在しており、先の確認調査においても特に竪穴建物跡が重なり合うことを確認していたが、当初の予想よりも多くの遺構が検出された。また、全体的に土器をはじめとした遺物の出土量が多いことが特徴である。中でも古墳時代の遺物は出土量が多く、耳環などの特徴的な遺物が出土している。

図83　遺跡の位置（1：50,000）

正泉寺遺跡北西側2,000㎡を対象とした確認調査では、幅２～３ｍのトレンチ18本（約200㎡）を掘削した。その結果、微高地上では古墳時代から奈良・平安時代の遺物、遺構を確認したが土曽川沿いの低い部分は氾濫原に相当し、遺構・遺物ともに確認できなかった。

屋内祭祀を行った竪穴建物跡（SB４）（口絵４⑧、図85・86）

古墳時代中期（５世紀中頃）の竪穴建物跡（SB４）は一辺５ｍ弱の方形で、検出面から床面までの深さが約20㎝ある。

カマドの反対側にあたる北西壁付近の床面では、高坏を中心に坏、小形の甕、壺、甑が集中して出土した。高坏は坏部と脚部の接合部分で割れ、被熱の痕跡があることから、竪穴建物内で行われた祭祀跡と推測する。この他の竪穴建物跡では、高坏や小形の壺が出土しているものの、明確なまとまりは認められない。飯田市内では同じ時期にこのような竪穴建物内から高坏を中心に土器

図84　正泉寺遺跡１区～３区、五郎田遺跡５区　全景（南西から）

図85　竪穴建物跡（SB４）土器出土状況　（北西から）

図86　竪穴建物跡（SB４）カマド・土器集中位置（北西から）

が多くみられる例は、細新遺跡（飯田市教育委員会1998）、新屋敷遺跡（飯田市教育委員会2003）、井戸下遺跡（飯田市教育委員会2001）などで確認されている。

カマドが良好に残る竪穴建物跡（SB69）（図87）

平安時代の竪穴建物跡SB69のカマドでは、明瞭な袖部の石組がみつかっている。北西方向を向くカマドで、建物南東壁や煙道部分は調査区外となっているが、手前から左右３個の袖石を検出した。一番手前と手前から３つめの石は、長方形の石の1/3から半分程まで深く埋め、この間に手前から２番目の石を入れこむように設置している。これにより、２番目の石の底は床面の上となるが、しっかりと固定された状態となっている。左右とも同じ造り方で、さらにカマド内部火床面には甕が平に置かれ、その下には５～10cm大の礫が並んでいた。

図87　竪穴建物跡（SB69）　カマド（北西から）

図89　竪穴建物跡（SB３）　耳環出土状況（南から）

図88　竪穴建物跡出土　耳環

図90　竪穴建物跡（SB45）　打製石斧出土状況（北東から）

出土遺物（図88～90）

耳環が３点出土している（図88）。古墳時代の竪穴建物跡（SB３、SB20、SB21）から、各１点が出土した。SB３とSB20は埋土から、SB21は床面付近から出土している。またSB21で出土した耳環には金メッキが残っている。

耳環は、竪穴建物内から出土することが少ない遺物であるが、３例あることから集落内に着用者が居住していたことが考えられる。

このほか、古墳時代の竪穴建物跡SB45では、埋土中や床面で炭化物、土器とともに打製石斧が多くみつかっている（図90）。古墳時代の土器に伴っており、この時期にも打製石斧が多くみられるのは、飯田地域の特徴である。

掘立柱建物跡（ST１）（図91）

掘立柱建物跡１棟を検出した。ST１は長辺方向が北西、規模は検出部分で４間×２間を測り調査区外へ連続する可能性がある。柱穴の直径は60～70cmで、このほかにも類似した同規模の土坑が調査区内でみられることから、掘立柱建物跡は今後の整理作業で増えるであろう。

図91　掘立柱建物跡（ST１）（南西から）

図92　１区古墳時代面全景（北から）

図93　１区弥生時代面全景（北から）

弥生時代の方形周溝墓（図93）

2020年度の確認調査において、古墳時代～古代の遺構とともに弥生時代の遺構・遺物も確認されていたため、古墳時代面の調査後に弥生時代面の確認を行った。１区の南東部と中央部で溝状の遺構を検出した。南東部の溝跡は幅70～90cm、検出面から底面までの深さは30～40cmである。途中で屈曲し調査区外へ連続する。埋土中から高坏が出土した。中央部の溝跡は幅70～100cm、検出面から底面までの深さは10cmほどである。この溝跡も途中で屈曲している。これらの溝跡は形状から方形周溝墓の周溝に相当すると考えられる。２・３区では、同様の溝跡は検出されなかった。

今後の課題

正泉寺遺跡は本年度の調査範囲において、古墳時代中期・後期から奈良・平安時代の集落域が広がること、弥生時代は墓域であることが分かった。来年度は土曽川上流側へ調査を展開するので、古墳時代から奈良・平安時代の集落の広がりや弥生時代の墓域と集落域の様相がさらに明確になると期待される。また、同じ土曽川左岸の微高地上に連続する五郎田遺跡や右岸側に広がるママ下遺跡との関係も明らかにしていきたい。

２　五郎田遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4090-１ほか JR 元善光寺駅から南西へ0.9km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の土曽川左岸の土石流堆積物上に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.4.3～2024.12.20	200㎡	長谷川桂子　綿田弘実

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	1	古墳時代
土坑	6	古墳時代～古代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代、古墳時代、古代
石器	弥生時代、古墳時代

調査の概要

正泉寺遺跡１区の南西側国道153号沿いの200㎡を調査した。後世の攪乱による影響を大きく受けていたが、竪穴建物跡と土坑を検出した。弥生時代から平安時代の遺物が出土した。2022・2023年度調査地点（国道153号拡幅部分）では、古墳時代の竪穴建物跡や土坑がみつかっており、正泉寺遺跡から連続する集落域であると考えられる。

（遠藤恵実子）

参考文献

飯田市教育委員会1998『細新遺跡Ⅱ』

飯田市教育委員会2003『恒川遺跡群（新屋敷・薬師垣外・阿弥陀垣外地籍』

飯田市教育委員会2001『井戸下遺跡』

（11）宮崎下遺跡（みやざきしたいせき）

社会資本整備総合交付金（道路）事業
座光寺上郷道路

所在地及び交通案内：飯田市座光寺698-１ほか
座光寺スマートICから南西に1.3㎞。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の中位段丘上の、東側に向かって傾斜する緩斜面に立地する。標高はおよそ540m～562mで、遺跡の北側を流れる土曽川との比高はおよそ14m、遺跡の南を流れる栃ヶ洞川との比高はおよそ30mを測る。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.10.10～2024.11.29	8,000㎡	関　杏介　島田亮仁 依田健太

検出遺構

遺構の種類	数	時期
溝	1	弥生時代（？）

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代、平安時代（灰釉陶器）、中世（陶器）、近世・近代（磁器）
石器・石製品	縄文時代（黒曜石剝片・打製石斧）

図94　遺跡の位置（1：50,000 飯田）

調査の概要

宮崎下遺跡は過去の調査歴はないが、縄文時代・弥生時代・古墳時代・近世の散布地として知られている。また周囲には遺跡も多く、宮崎上遺跡や米の原遺跡、座光寺原遺跡や黒田大明神原Ａ・Ｂ遺跡などが点在している。

本年度は本調査に備えて、遺構の広がりや密度などを確認するための確認調査を実施した。

調査は標高およそ562m付近の8,000㎡を対象とし、このうち831㎡分についてトレンチを設定して調査を行った（図96）。

基本層序

宮崎下遺跡の基本層序は最上部に現代の耕作土

図95　2024年度調査地全景

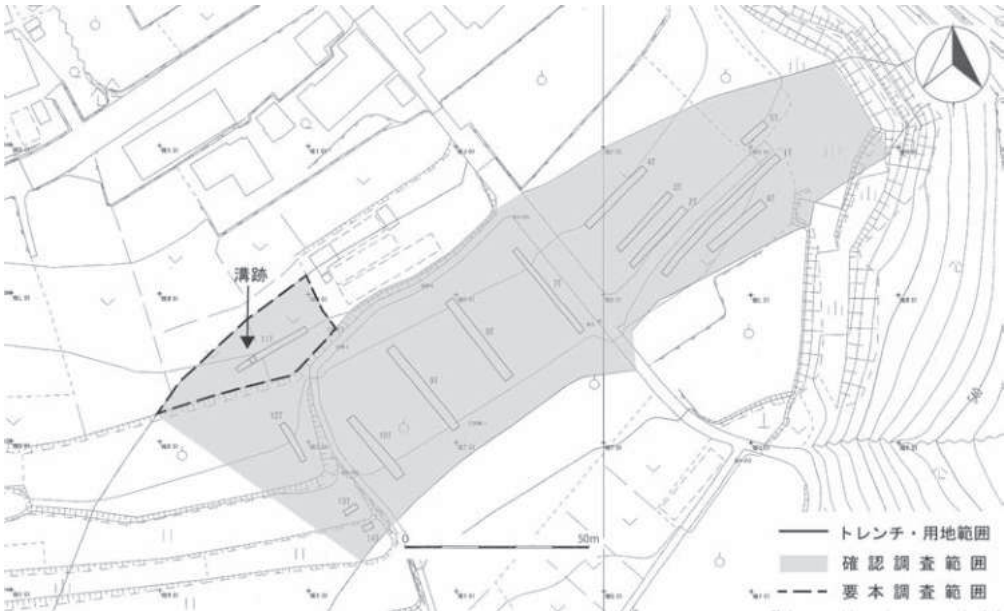


図96　調査全体図

が堆積し、その下層に黒色土が堆積する。黒色土層以下はローム層となる。遺構はこのローム層を掘り込んで、黒色土が堆積する。ローム層のさらに下層は花崗岩からなる礫層になっている。

今回、上記の土層が確認できたのは１Ｔの北端のみで、他のトレンチでは大きく削平を受けていた。特に２・３・４Ｔでは耕土から数cmで花崗岩を含む礫層になっていた。その他のトレンチもローム層の大部分が削平され、遺構検出面が確認できない状態であった。唯一遺構が検出された11Ｔはほかのトレンチよりも約1.4ｍ以上標高が高い段に位置しており、削平の影響が少なかった。

検出遺構

11Ｔでは溝１条が検出された。この溝は幅約1.7ｍ、深さ約0.6ｍで、断面形はＵ字状に近いが、北側は上部が張り出してフラスコ状に立ち上がる（図97）。平面形は直線で、トレンチを横断する東西方向に走っており、検出できた部分の長さは約1.3ｍを測る。時期は、溝内からの遺物の出土がなく、不明である。

出土遺物（図98）

縄文土器（１）、打製石斧（２）、黒曜石の剝片（３）、古代の灰釉陶器（４）、中世の瀬戸焼（５）などが出土したが、いずれも盛土や耕作土中からの出土である。

図97　11Ｔ溝断面

図98　宮崎下遺跡出土遺物

今後の調査

本年度調査区においては溝を検出した11Ｔ周辺については本調査が必要と考えられる。

また、宮崎下遺跡では令和７年度以降も面積約12,000㎡を対象に、確認調査を実施していく予定である。　（関　杏介）

（12）川原遺跡（かわらいせき）

防災・安全交付金（道路）事業・
国補ダム建設（治水ダム）事業　合併

所在地及び交通案内：飯田市下久堅1524-３ほか
中央自動車道飯田 IC から東へ約7.0㎞。
遺跡の立地環境：天竜川左岸低位段丘上。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2024.4.26～6.6	200㎡	春日皓介　遠藤恵実子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	2（10）	縄文時代
土坑	13（88）	縄文時代、時期不明
配石・集石遺構	1（30）	縄文時代

（　）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文土器
石器	縄文時代（剥片、石核）

調査の概要

本遺跡は、2016年度調査（堤防部分）で縄文時代中・後期の竪穴建物や土坑を、2022・2023年度調査では、縄文時代後期の竪穴建物跡と配石遺構、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡を確認し、縄文時代中・後期に集落、弥生時代には墓域、古墳時代中期に再び集落域となることを確認した。

2023年度調査では、縄文時代後期の遺構を検出し、竪穴建物跡をはじめ礫の使用が多くみられた。この中で大形の礫を半円形に組んだ配石遺構（SH22）を検出した。飯田地域をはじめ類例のない遺構であることから2024年度に改めて現地指導を含めた調査を行うこととなった。

本年度の調査は４月から開始し、西側に接する2016年調査区から連続する遺構の検出と下層面の確認を行った。配石遺構（SH22）は、５月に現地指導で調査方法などについての指導を受け、現地説明会後から調査・解体を行った。

図99　川原遺跡の位置（1：50,000）

図100　川原遺跡と天竜川（南から）

図101　配石遺構（SH22）調査前状況（南から）

配石遺構（SH22）

調査は、主に礫組みの周辺と礫の検出位置より下からの遺構に伴う遺物または施設の確認、解体による石組の記録と構築過程の復元を明らかにすることをめざした。特に記録については、オルソ画像により、礫を積み上げた遺構の立体的な状態

を３Ｄで復元することができる記録をとることを目的とし、2023年度に１回（図102）、本年度に２回の計３回の記録を撮った。石組の解体は、立ててある礫とその前に置かれた礫の重なりをみながら外していき、その際に礫のインプリントを残すことで構築順序の確認を行った（研究ノート（１）参照）。立てた礫とその前面の礫を取り外した後、背面に組まれた礫を出し２回目のオルソ撮影（図103）を、背面の礫は２段に組まれていたことから上段の礫を取り外し、下段の礫を出した状態で３回目（図104）を撮影した。この結果、配石遺構は、始めに後ろの抑えとなる礫を横方向に、間に小形の礫を裏込め状に入れて安定させながら２段に積み、これに沿わせる形で前面に礫を立てるが、その際にも小形の礫を咬ませることで高さ等を揃え、最後に20～30cm大の礫を前面に並べて造られていることがわかった。周辺の掘り下げとトレンチによる下層確認により、遺構に伴う掘り込みや遺物はみられず、SH22は半円形に礫を組んだ遺構と考えられる。

図102　オルソ撮影１回目　全体（2023年10月）

図103　オルソ撮影２回目　背面石組上面

図104　オルソ撮影３回目　背面石組下面

周辺・下層面の確認

調査区西側（堤防沿い）は、北側は遺構がないことを確認していたが、南側には遺構が存在しており、2016年度調査からの続きとなる竪穴建物跡２軒と土坑13基を検出した。下層面はSH22トレンチを南側に伸ばし、東西方向も合わせて調査し遺構がないことを確認した。　（遠藤恵実子）

図105　竪穴建物跡（H28調査区つづき）

図106　SH22下層面・周辺確認トレンチ

Ⅲ　整理作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
塩崎遺跡群	長野市	一般国道18号 （坂城更埴バイパス） 改築工事	遺物実測 遺物実測トレース 遺構図版組版 遺物図版組版 遺構写真図版組版 原稿執筆	塩崎遺跡群は、2017年度より整理作業を開始した。今年度で８年目となり、報告書刊行に向けて最終段階を迎えている。昨年度に引き続き、本年度も土器・土製品・石器の遺物実測・トレース作業を行い、本遺跡の遺物実測・トレース作業は全て終了した。また、今年度の発掘調査成果を追加した上で、遺構図版・遺物図版・遺構写真図版等の組版作業と原稿執筆作業を開始した。
川原遺跡	飯田市	令和６年度防災・安全交付金（道路）事業・国補ダム建設（治水ダム）事業合併に伴う埋蔵文化財調査	遺構図面修正、版組 所見カード作成 石器抽出 原稿執筆	川原遺跡は、縄文時代中期後半～古墳時代中期中葉の集落跡・墓域である。本年度は、６月まで行っていた調査の遺構図面修正、所見カードの作成など基礎整理作業を含めて整理を進めた。 また、３年度分の石器84箱分の分類、抽出を行い、来年度の実測・トレースの準備を行った。
信州大学医学部所蔵考古資料	信州大学	信州大学医学部所蔵考古資料に伴う支援事業	遺物洗浄 骨類鑑定 資料点箱ラベル貼付	2022年度に所蔵資料の台帳作成、2023年度に遺物洗浄と骨類鑑定の一部を実施して、今年度は洗浄、鑑定共に全てを完了した。 資料の基礎整理終了後に所蔵点箱ごとに整理ラベルを貼り、収蔵資料を台帳から検索できるようにした。 本事業ではないが、本年度普及啓発活動として、地域展「掘るしん in 信州大学」を開催し、信州大学附属中央図書館で整理成果を展示した。

塩崎遺跡群整理作業の状況

川原遺跡本格整理作業の状況

（1）塩崎遺跡群（しおざきいせきぐん）

一般国道18号（坂城更埴バイパス）
改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

塩崎遺跡群は長野市南部塩崎地区に位置し、2013～2021・2024年度に発掘調査し、2016年度から本格整理を継続している。

整理作業の概要

塩崎遺跡群は膨大な遺構・遺物がみつかっており、昨年度に引き続き報告書刊行に向けての整理作業を継続している。遺構整理はトレース図・写真の図版組を行い、遺物整理は観察表作成を進め、実測・トレース作業を完了し、図版の仮組を開始した。また、科学分析では新たにみつかった種実圧痕の同定分析を追加実施した。

以下には昨年度の年報では報告できなかった科学分析結果や、資料閲覧で指摘された事項を含め整理の成果について記す。

玉類の石材

塩崎遺跡群では弥生時代中期中葉～古墳時代の玉類が600点ほど出土している。弥生時代中期中葉の木棺墓や弥生時代後期末の木棺墓等からの出土が大部分を占めるが、それ以外は竪穴建物跡や土坑からの単体出土で、混入の可能性もあり製作・使用年代が不明なものも多い。昨年度、玉類の石材鑑定分析を実施した。注目される点として、１cmに満たない小形勾玉数点の石材はクロム白雲母と鑑定された。長野県内では類例が知られておらず、今後注意が必要と思われる。

本遺跡では玉類と共に、ヒスイ（図107）、緑色凝灰岩、鉄石英といった玉類の石材の石核・剝片も出土している。熱処理が確認され、未貫通の鉄石英製管玉の出土もあることから、遺跡内でも少量ながら、玉類の製作が行われている可能性が判明した。本遺跡では石鋸も出土しているものの、緑色凝灰岩や鉄石英の剝片等で溝切技法が確認されたものはない。管玉は打割で柱状の粗形を作り出したとも思われるが製作方法の詳細は不明である。なお、本遺跡で扁平片刃石斧や石鏃石材の千枚岩に溝切技法が認められるので、石鋸はこれらの石器製作、再加工に使われたとみられる。

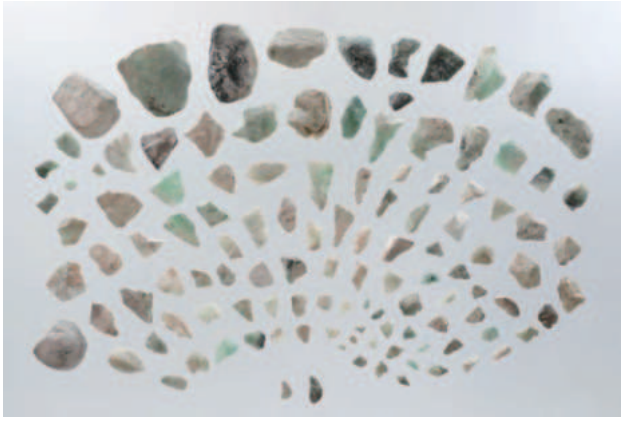


図107　ヒスイ勾玉製作資料

この玉類製作の時期は、緑色凝灰岩剝片やヒスイ石核が弥生時代中期後半の竪穴建物跡から出土し、それより古い遺構からは出土していないので弥生時代中期後半と想定される。同一竪穴建物跡から、ヒスイと緑色凝灰岩・鉄石英が出土しており、ヒスイ勾玉と緑色凝灰岩･鉄石英管玉とのセット製作とみられる。

弥生時代前期末～中期前半土器と種実圧痕

これまでの年報で紹介したように、本遺跡では弥生時代前期末～中期初頭の土器が多く出土している。特に遠賀川系土器は壺以外に甕、蓋、鉢など多様な器種があり、在地で変容したものも含めると現時点では長野県内で最も出土量が多いと思われる。それ以外にも柴山出村式の壺、条痕文系土器の壺や少量の甕、内傾口縁土器・厚口鉢等、南東北系、関東系と指摘された壺や甕、鉢類もある。これに加えて在地条痕文系壺や、条痕文系の影響を受けた甕、縄文時代晩期系統の口縁二重凸帯の壺や肩部で屈曲して口縁が外反する甕がみられる。在地の土器も各地の土器の影響を受けたものが認められ、交流が活発化して多系統の土器が入り混じる様相と捉えられる。

昨年度、これらの弥生時代前期末～中期中葉の土器に残る種実圧痕の同定分析を実施した。種実以外の石や木片、不明種実やエノコログサ属、シソ属等の圧痕を除くと、キビ21点、アワ18点、イネ籾15点が確認された。この点数は同一土器に複

数存在するものも各１点とカウントし、土器の年代や搬入品の識別が不十分なこともあって種実圧痕の種別量比をそのまま弥生時代前期末～中期初頭での栽培状況を反映しているとは言い切れない。しかし、遠賀川系土器の多さに比して遺跡地での栽培は稲作主体に転換しているとは考えづらく、畑作を中心に少量のイネが加わる様相の可能性がうかがえる。一方で、弥生時代中期中葉と思われる土器３点の種実圧痕は何れもイネ籾であった。本遺跡では木棺墓内で打製石鏃・剝片複数と共に扁平片刃石斧１点が集中出土した例があり、稲作に関わる木材加工用の大陸系磨製石器の定着が当期とみられる。農工具や水田造成のための技術を含めて弥生時代中期中葉には稲作が定着したことを示す資料と考えられる。

なお、本遺跡の弥生時代前期末～中期初頭の遺構は平面円形の貯蔵穴と思われる土坑と土器棺再葬墓があり、その次の時期の遺構は弥生時代中期中葉の木棺墓群で、弥生時代中期前葉の確実な遺構はない。現時点では一旦居住が途切れると考えているが、弥生時代中期中葉の木棺墓造営開始時期の様相も把握し切れておらず、弥生時代中期初頭以後の居住の連続・途絶状況については、土器からの裏付けはできていない。

弥生時代後期の鉄製品

本遺跡では、弥生時代後期遺構やそれ以後の時期の遺構に混入したとみられる弥生時代後期の鉄製品が複数出土している（図108）。確実に鉄製品が出土しているのは弥生時代後期後半以後の遺構からで、鉄鏃、釣針、ヤリガンナ等があり、他時代遺構への混入とみられるものには刃のない板状鉄製品（鉄斧？）や同じく刃部がやや平坦な柱状鉄製品（鉄斧？）がある。続く弥生時代後期末～古墳時代初頭では長柄短剣や刀子がある。本年度、本遺跡出土の弥生時代鉄製品を北陸と関東を中心とする研究者が資料閲覧する機会に立ち会うことができた。鉄製品の多くは北陸と共通する器種や共通形態の鉄鏃があり、そこに東日本に多い無茎の鉄鏃が加わる様相と指摘を受けた。また、螺旋状鉄釧を小形化したような指輪の存在が注目された（図109）。この指輪は他遺跡での出土例がないものである。さらにSK1198出土の長柄短剣には鞘の上に布が巻かれていることなどを指摘された。

弥生時代後期の鉄製品は、長野県内では東北信で多く出土し、調査面積を考慮すれば本遺跡が特に多いとは言い切れず、弥生時代後期の東北信全般の傾向といえる。しかしながら、鉄製品の搬入状況や地域内での加工の可能性は明らかにされていない。本遺跡での複数の炉をもつ竪穴建物跡の存在からは地域内の鉄加工の可能性も残るが、調査では鉄加工の存在は明確にしえなかった。搬入品と地域内の加工品を含めた弥生時代後期の鉄製品の検討はこれからと思われるが、塩崎遺跡群の資料がその様相を明らかにする一助となりうると期待される。　（市川　隆之）

図108　弥生時代の鉄製品

図109　螺旋状鉄製品（指輪）

（２）川原遺跡（かわらいせき）

防災・安全交付金（道路）事業・国補ダム建設（治水ダム）事業合併に伴う埋蔵文化財調査

整理作業の概要

川原遺跡は、飯田市の南東部天竜川左岸の低位段丘上に位置する集落跡と墓域である。県道飯田富山佐久間線の工事に先立ち、2022年度から調査を行っていた。本年度は６月まで調査を行い、並行して４月からこれまでの基礎整理作業および本格整理作業を行った。

本年度は、４月より遺構図面の点検、修正を行った。その後、合計68箱におよぶ石器に関して、2022年度に出土したものから計測・抽出作業をおこなった。また、本年度までに出土した黒曜石について産地分析を委託した。現時点では、分析中であるため結果を述べることはかなわないが、飯田地域の当該期資料の分析事例は少ないため、成果は注目される。今後報告していきたい。

川原遺跡で出土した縄文時代中期の石器について

2022年度に調査した１区からは、縄文時代中期の土器とともに大量の石器が出土している。内訳は、打製石斧139点、磨製石斧３点、石錘８点、横刃型石器32点、石匙２点、石鏃９点である。なかでも量が多かったものは打製石斧と横刃型石器である。打製石斧は、その大きさに非常にバラエティーがあり、最大のもので長さ17cm、最小で7.6cmであった。石錘には、加工の仕方に違いがあり、石材の両端部を打ち欠いたものや、切れ目を入れたものなどが存在する。土錘とともに漁具として使用され、漁網につけた錘と考えている。川原遺跡の名の通り、天竜川に近いため天竜川の恵みを享受していたのであろう。

遺構に伴わず、多くの石器と土器がほぼ一か所にまとまって出土したことや、段丘が急激に上がる際でみつかっていることから、上方から流れてきたものと考えている。

2023年度以降の遺物に関しては来年度以降に抽出していく予定である。土器の主体は縄文時代後期と考えており、十腰内式土器に影響を受けた壺形土器や埋設土器、甕被り葬に用いた鉢など多くの土器類が出土しており、飯田地域における当該期の土器様相が明らかになると考える。

（春日皓介）

図 110　図面修正作業の様子

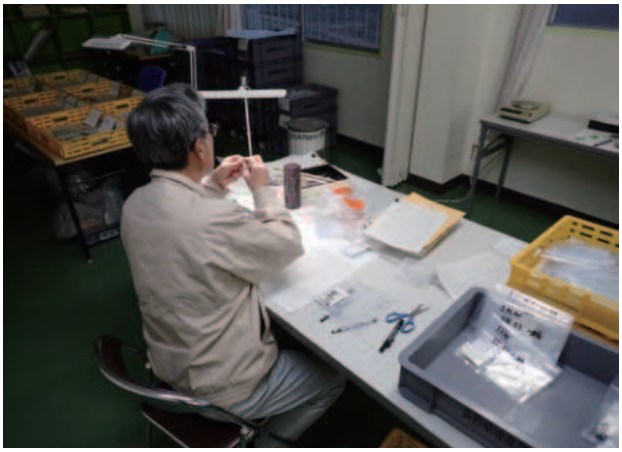


図 111　石器の抽出・計測の様子

図112　打製石斧

（３）信州大学医学部所蔵考古資料整理支援事業

遺跡の概要

信州大学医学部の赤レンガ倉庫には、戦後医学部第二解剖教室において、鈴木誠や西沢寿晃等を中心に実施した古人骨発掘調査研究に伴う考古資料や、遺跡の発掘調査による考古資料の他、戦前に県内各地の教育会から保存活用及び研究のために旧制松本高等学校に寄せられた考古資料が収蔵されていた。

2021年６月に信大医学部、長野県教育委員会、長野県立歴史館、当センターが調査を行い、これら資料の中に県内の遺跡調査資料が多数含まれることが判明した。関係機関で協議を行い、令和４年度から当センターで資料整理の技術支援を継続して実施し、本年が３年目となる。

整理作業の概要

収蔵資料は出自が不明な遺物が多いことに加え、保管されたのが70年以上も前であるため、考古資料と遺跡からの出土骨類が混在する状況にあった。

整理作業では、資料の分別と遺物洗浄を行い、劣化していた保管箱から新しいコンテナへの入れ替えを実施した。併せて台帳の整備や論文掲載履歴などの調査を実施した。さらに出土骨資料については、京都大学名誉教授の茂原信生氏らによる鑑定を実施した。

３年間の整理により考古資料（自然遺物は除く）だけで約３万点の収蔵が明らかとなった。県内を中心に、国内では北海道から九州、さらに海外資料も含まれることも明らかとなった。この中には学史上重要な資料が含まれることも確認されるなど、一大アカデミズム・コレクションであることが判明した。

今年度は整理作業による成果の集大成として、信州大学において地域展「掘るしん in 信州大学」を開催し、優品を厳選して展示した。

以下主要な資料を紹介報告する。

①松本市下原遺跡　土偶

頭部のみで胴部以下は欠損する。顔面はやや上を向き、短い沈線または削り込みにより眼と口を、粘土粒を貼付し鼻を表現する。裏面の剝離痕は、髪型表現の可能性がある。波田町下原（現松本市）から出土したとされ、縄文時代中期の可能性があるが、共伴遺物などは不明。人類学者であり考古学者でもある鳥居龍蔵が、信濃教育会諏訪部会の委託を受けて編纂した『諏訪史』に掲載されている（鳥居1924）。

②佐久市内出土　石皿

堅果類などをすり潰すための道具で、大きな石を四隅が突出する長方形に加工し、底面に四脚を作り出している。寸法から『北佐久郡の考古学的

図113　松本市下原遺跡　土偶

図114　佐久市内出土　石皿

調査』掲載の資料と推定され、本資料は望月町本牧（現佐久市）から出土したものと思われる。縄文時代中後期の可能性があるが、詳細な地点や共伴した遺物は不明である（八幡1978）。

③佐久市月明沢遺跡　歯牙垂飾

佐久盆地西縁の八ヶ岳連山の一つ蓼科山に連なる台地端の断崖に位置する。以前より人骨が採集されており、鈴木誠に出土骨の鑑定が依頼されていたが、これらに伴って送られた土器の中に、弥生時代前期相当の条痕文土器が含まれていることを西沢寿晃・小松虔が確認し、1971年に調査が行われた。この調査では土器や人骨の他に、人の奥歯（上顎右第３大臼歯）に穴をあけた加工品が出土した。縄文時代晩期から弥生時代前期の身体加工風習の一つとして、注目される（西沢ほか1978）。

図115　佐久市月明沢遺跡　歯牙垂飾

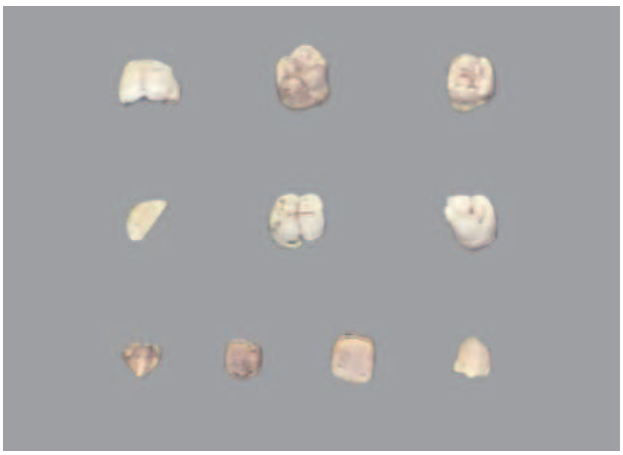


図116　長野市伊勢宮遺跡木棺墓　人の歯

④長野市伊勢宮遺跡木棺墓　ヒトの歯

千曲川左岸の自然堤防上に位置する塩崎遺跡群に含まれる伊勢宮遺跡では、長野市による1985年の調査で、木棺墓から多数の人骨が出土した。この人骨は茂原信生・西沢寿晃・松村博文によって分析され、渡来系弥生人の可能性があると指摘された。（茂原ほか1997）。

⑤茅野市栃窪岩陰遺跡　ニホンオオカミの歯

白樺湖から南西に位置するカシガリ山裾の断崖に位置する縄文時代～弥生時代の遺跡である。1953年、1967～68年に、地元の柏原区が組織した調査団が発掘を行っている。また、1963年には日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会による調査も行われた。出土遺物の中に今は絶滅したニホンオオカミの上顎第四小臼歯（列肉歯）と上顎第一大臼歯（右側）があり、他の大型哺乳動物の骨と共に発見されている。縄文時代のニホンオオカミの骨は北相木村栃原岩陰遺跡からも出土しているが、類例は少なく、非常に貴重である（宮坂ほか1966）。　（廣田和穂）

図117　茅野市栃窪岩陰遺跡　ニホンオオカミの歯

参考文献

茂原信生・西沢寿晃・松村博文1997「伊勢宮遺跡（塩崎遺跡群：長野市）出土の弥生時代人骨」『長野市立博物館研究紀要』４
鳥居龍藏 1924『諏訪史 第一巻』信濃教育會諏訪部會
西沢寿晃・小松　虔 1978「「長野県佐久市月明沢遺跡」発掘資料について」『長野県考古学会誌』31
宮坂英弐・宮坂虎次 1966『蓼科』茅野市尖石考古館
八幡一郎 1978『北佐久郡の考古学的調査』歴史図書社

Ⅳ　普及公開活動の概要

	分類	名称		場所等	期日	参加者数（名）
1	施設公開	夏休み考古学チャレンジ教室		埋文センター	7 /26・7 /27	249
2	現地説明会・現地公開			川原遺跡	5 /11	57
				真光寺遺跡	7 /20	96
				南大原遺跡	8 /10	139
				長沼城跡	8 /24	131
				正泉寺・五郎田遺跡	9 /14	46
				南栗遺跡	10/ 5	97
				五郎田遺跡	10/19	30
3	講座	縄文の力と心		篠ノ井老人福祉センター	5 /16	36
		発掘調査の手順		篠ノ井老人福祉センター	6 /20	33
		縄文時代の信州と北陸		篠ノ井老人福祉センター	7 /18	33
		「渡来人」と信濃国の南北		篠ノ井老人福祉センター	8 /22	35
		北海道の遺跡発掘		篠ノ井老人福祉センター	9 /19	30
		松本平の中世遺跡		篠ノ井老人福祉センター	10/17	26
		遺跡探訪		長野市南宮遺跡 長野市立博物館	11/21	26
		朝鮮半島から運ばれた土器		篠ノ井老人福祉センター	12/19	26
	出前授業	地域素材の教材化Ⅰ ～埋蔵文化財センターを活用した教材研究～		県総合教育センター 南栗遺跡	7 / 5	20
		調査研究員のお仕事		信州大学教育学部	7 /19	40
		体験教室		松本市立島立小学校	9 /12	57
		埋蔵文化財センターの仕事 整理作業・普及啓発		信州大学教育学部	11/12	47
	職場体験	県上田染谷丘高等学校		県立美術館	1 /13	1
		座光寺小学校		正泉寺遺跡	6 /27・7 / 2	45
		長野市立篠ノ井西中学校		埋文センター	7 /18・23	3
		長野市立川中島中学校		埋文センター	7 /30・31	3
		長野市立篠ノ井東中学校		埋文センター	10/10・11	3
		長野市立更北中学校		埋文センター	10/23	1
		長野市立通明小学校		埋文センター	11/20	31
		塩崎小学校		塩崎遺跡群	11/22	25
4	速報展・展示会	掘るしん2024		キッセイ文化ホール	2 /17～3 /17	1,109
		掘るしんin信大　講演会		信州大学附属中央図書館	9 /17	44
		掘るしん2025	展示会	キッセイ文化ホール	2 / 8 ～ 3 / 9	575
			遺跡報告会等		2 /16	89
		中央日本４県 山の洲文化財交流事業	展示会	長野県立美術館	1 / 4 ～ 1 /19	859
			ワークショップ		1 /13	129
			トークセッション		1 /18	82
5	施設利用			展示室		300
				図書室		39
					総計	4592

◎展示室・図書室の利用人数は2025年２月28日現在の数字。

（1）施設公開

○第15回夏休み考古学チャレンジ教室の開催

実施日：７月26日（金）午後１時～４時
　　７月27日（土）午前９時～午後３時

目　的：夏休みの期間中に、埋蔵文化財センターの施設を公開し、展示室等の見学や実際の整理作業等の業務を体験していただくことで、当センターの社会的役割及び埋蔵文化財に対する県民の理解を深める。

内　容：

・施設公開…展示室、図書室及び遺物の整理作業を公開、埋蔵文化財や考古学の質問に回答した。
・体験…本物の遺物及び土器パズルを用いた遺物接合作業の体験、出土土器の洗浄作業の体験、実物の土器を用いた拓本体験、土器の施文体験及びワークショップ「縄文スタンプでいろいろ作ろう」を実施した。

来場者数：249名（26日105名、27日144名）

当センターの業務理解の促進や埋蔵文化財に対する理解の深化という施設公開の趣旨に立ち返って、新型コロナ感染症蔓延前とほぼ同等の規模に体験ブースを復活しての開催となった。

地元篠ノ井地区を中心に長野市内の小学生以下の子供とその家族が多数来場された。コロナ禍でも継続して行ってきたことにより、センター業務や埋蔵文化財行政に対する理解、考古学に対する普及啓発に資するイベントとして定着してきている。

本年度は昨年度よりさらに体験ブースを充実させ、遺跡から出土したばかりの出土の洗浄作業体験や土器の接合作業体験、縄文・弥生時代と同じ道具を使っての土器の施文体験等を実施した。

また、文化振興事業団活動支援ワーキンググループと共同で行うワークショップも３年目となり、今年度は講師に石川奈緒美氏を招き、「縄文スタンプでいろいろ作ろう」を実施した。テラコッタ粘土を使い、参加者が自由に形や文様を工夫してオリジナルの作品を作成し、大変に好評であった。また、長野県立歴史館ブースも体験型の「縄文人になろう」が実施され、縄文服を着用し、実物の土器に触れ、縄文ムラの風景をバックに多数の参加者が笑顔で記念写真に納まり大変好評であった。

この他に、クイズに答えながらの展示室及び図書室の見学、来場者の考古学や埋蔵文化財についての質問に当センター職員が回答する「まいぶん博士の考古学なんでも相談室」も設けた。また、来場の記念品として遺跡出土の石鏃をデザインした手ぬぐいを配布し好評であった。

来場者へのアンケートでは、「毎年楽しませてもらっています。今年は子供が別の用事で参加できず、泣きながら「行ってきて」と頼まれ参加しました。今日の様子を伝えようと思います。」「実際に作れるものがたくさんあって楽しかったです。」など、好意的な感想が多数寄せられた。（西香子）

図118　展示室見学の様子

図119　土器の拓本体験の様子

図120 「縄文スタンプでいろいろ作ろう」の様子

（２）現地説明会等

現地説明会は７遺跡で実施した。見学者は計596名を数えた。

○川原遺跡（飯田市）

開催日：５月11日（土）　**見学者**：57名

地元の方を中心に、配石遺構や出土した東北系の土器を見学いただいた。「飯田から東北や百済の土器が出ることに驚いた。」という声があがり、遠隔地との交流に非常に興味を持った様子であった。

○真光寺遺跡（松本市）

開催日：７月20日（土）　**見学者**：96名

方形にめぐる溝跡などの遺構や、須恵器の甕等の遺物を見学いただいた。参加者からは「みつかった溝跡は和田堰や用水管理に関係があるのか」など、遺構に関しての質問が非常に多く、当時の遺跡の環境に興味を持つ参加者が多かった。

図121　遺構説明の様子（真光寺遺跡）

○南大原遺跡（中野市）

開催日：８月10日（土）　**見学者**：139名

とても気温の高い日だったが、多くの参加者があった。弥生・古代の竪穴建物跡のほか、出土遺物についても見学いただいた。担当者の説明を聞き入る参加者の姿が印象的だった。

○長沼城跡（長野市）

開催日：８月24日（土）　**見学者**：131名

今年度検出された掘や土塁のほか、過去３年分の調査結果も展示した。事前予約制だったにも関わらず、地元を中心にとても多くの参加者があった。説明の合間や終了後に質問をしてくる参加者がおり、関心の高さがうかがえた。

○正泉寺遺跡・五郎田遺跡（飯田市）

開催日：９月14日（土）　**見学者**：46名

古墳～奈良時代の竪穴建物跡、耳環や高坏などの出土遺物や写真パネルを展示し、説明を行った。地元の人も多く訪れ、地元の埋蔵文化財に関心が高いことがうかがえた。

○南栗遺跡（松本市）

開催日：10月５日（土）　**見学者**：97名

多数の古代の建物跡がみつかった状況や、出土した遺物を見学いただいた。参加者からは「住居があんなに密集していることに驚いた」などの声があり、当時の生活に興味を持ったようだった。

○五郎田遺跡（飯田市）

開催日：10月19日（土）**見学者**：30名

良好な状態で検出された古墳時代のカマドや平安時代の円面硯等の遺物を熱心に見学いただいた。カマドの構造や遺物の使い方についての質問があり、遺跡に暮らした人々の様子を想像する様子がうかがえた。　（丸山晃平）

図122　遺物説明の様子（長沼城跡）

（3）速報展・講演会等

①地域展「掘るしんin信州大学～赤レンガ倉庫の考古資料～」

技術支援として進めてきた信州大学医学部所蔵考古資料整理業務に関して、昨年度までに行った文献調査や台帳作成等の整理成果により考古学史上重要な資料も再認識されてきた。そのため、資料の重要性を県民や信州大学関係者に伝え、今後の資料の保存と活用意識の啓発を図るために「展示会」と「講演会」を催した。それぞれの詳細は以下のとおりである。

○展示会

開催日：2024年９月13日（金）～10月16日（水）
会　場：信州大学中央図書館（松本キャンパス）
内　容：

昨年度までにセンターが信州大学から預かり調査を進めた約29,800点の考古資料（土器、石器類、骨等脆弱遺物）のなかから、『諏訪史』第一巻（1924年）や『長野県考古学会誌』31号（1978年）などに掲載された資料を中心に、下記の11点を選び展示を行った。

No.	資料名	出土地・掲載資料ほか
1	槍先形尖頭器	塩尻市内『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』
2	槍先形尖頭器	松本市内『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』
3	ニホンオオカミの歯	茅野市栃窪岩陰遺跡
4	西沢寿晃先生への手紙	昭和55（1980）年
5	歯牙垂飾	佐久市月明沢遺跡 『長野県考古学会誌』31号
6	土器	上に同じ
7	ヒトの歯	長野市伊勢宮遺跡（塩崎遺跡群） 『長野市立博物館紀要』第４号
8	土器	上に同じ
9	土偶	松本市新田遺跡『諏訪史』第一巻
10	土偶	松本市下原遺跡『諏訪史』第一巻
11	石皿	佐久市内『北佐久郡の考古学的調査』

また、栃原岩陰遺跡などの調査研究を行った鈴木誠先生の経歴、月明沢遺跡や伊勢宮遺跡などの調査研究を行った西沢寿晃氏の経歴、考古資料が保管されていた「旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫」（信州大学医学部資料室　通称：赤レンガ倉庫）などについて、パネルで解説を行った。

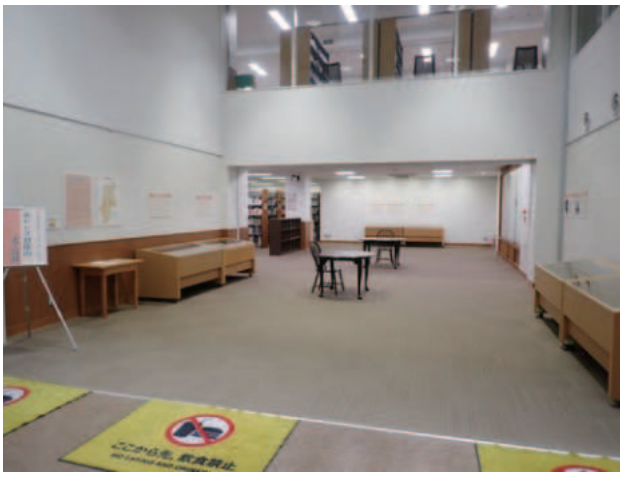


図123　展示会の風景

図124　展示見学の様子

県民、信州大学職員・学生の来場があったほか、県内外の考古学研究者の目にとまり新たな資料閲覧者があったなど、考古資料の活用に貢献できた。

○講演会・報告会

開催日：2024年９月17日（火）
会　場：信州大学中央図書館（松本キャンパス）
　　セミナー室
来場者：44名
講　演：『信州大学の調査研究と日本の考古学』
講　師　早稲田大学名誉教授　高橋龍三郎 氏
内　容：

信州大学医学部第二解剖学教室の鈴木誠、西沢寿晃両氏が日本考古学界で果たした役割や、赤レンガ倉庫など信州大学に収蔵されている考古資料

について、高橋氏が調査研究されているパプアニューギニアの民族例などを交えながら、ご講演いただいた。

鈴木氏が昭和40～50年代に調査を行った南佐久郡北相木村栃原岩陰遺跡については、非常に厚く堆積する地層中から縄文人骨12体をはじめとする豊富な資料が出土し、潜在性のある価値の高い洞窟遺跡であると当時注目されたことに加え、近年の最新研究成果を踏まえて北相木村教育委員会が2011年に刊行した報告書にも言及された。

また、西沢氏が、佐久市月明沢遺跡で弥生時代初期段階の極めて特殊な「歯牙垂飾」を発見したことをはじめ、長野県埋蔵文化財センターや県内各市町村の教育委員会等の発掘調査で、人骨や動物骨の鑑定や調査に尽力されたことが紹介された。

来場者は信州大学関係者はもとより、松本周辺在住の県民や考古学研究者も多くみられた。また、会場で聴講した44名のほか、信州大学が設営したオンラインでの参加も多数あった。さらに、講演会終了後に当日録画した講演の様子をYouTubeの長野県埋蔵文化財センターのチャンネル内でも公開している。

アンケートによれば、チラシやポスターで講演会の実施を知り来場した参加者が最も多かったが、信州大学中央図書館のWEBサイトや大学から発信されたメールで知った方もおり、また事前に掲載された新聞記事をきっかけとした方もいた。

考古学史上、各時代の画期となる重要な調査研究を進めた鈴木誠、西沢寿晃両氏の業績や、信州大学で保管されてきた貴重な資料群の重要性が伝わったほか、未来の人材を育てる重要な教育機関である信州大学と長野県埋蔵文化財センターが連携して作り上げた展示会及び講演会として非常に大きな成果があった。　（杉木有紗）

図125　講演会の様子

図126　高橋氏の講演風景

図127　掘るしん in 信州大学　ポスター

②「ほるしん2025」展示会・講演会

開催日：2025年２月８日（土）～３月９日（日）

当センターで毎年行ってきた速報展だが会場であるキッセイ文化ホール（長野県松本文化会館）と昨年度から共催事業として行っている。2024年度の調査・整理成果を展示した「展示会」と「報告会・パネルディスカッション」を催した。それぞれの詳細は以下の通りである。

○展示会

開催日：2025年２月８日（土）～３月９日（日）

会　場：キッセイ文化ホール
　　２階　ギャラリー（旧レストラン）

８遺跡を対象に、出土品と写真パネルを展示した。出土品の展示遺跡は松本市真光寺遺跡、南栗遺跡、飯田市正泉寺遺跡の３遺跡である。多くのイベントが開催される文化施設であるため、考古学に関心が高くない方でも入りやすいような展示を試みた。塗り絵、ペーパークラフトなどのワークショップ、縄文土器の立体パズルなどは大変好評だった。また、職員が質問を受け、松本市はもちろん、北信、南信の遺跡についても関心の高さがうかがえた。

○報告会・パネルディスカッション

開催日：2025年２月16日（日）

会　場：キッセイ文化ホール　国際会議室

来場者：89名

報　告：長野市長沼城跡　　報告者　依田健太
　　松本市真光寺遺跡　報告者　杉木有紗
　　松本市南栗遺跡　　報告者　廣田和穂
　　飯田市正泉寺遺跡　報告者　遠藤恵実子

今年度調査した４遺跡について調査報告を行った。長野市長沼城跡は、今年度をもって調査を終了するためこれまでの調査のまとめを報告した。松本市真光寺遺跡は中世の石列や火葬施設跡、墓跡などの概要、南栗遺跡は今年度も確認された古代集落の広がりについて詳しく説明を行った。飯田市正泉寺遺跡は古墳時代の集落跡を中心に報告した。

パネルディスカッション

「奈良時代の信州に古墳はあったのか」

パネリスト：河西克造（長野県埋文センター）
　　直井雅尚（松本市教育委員会）
　　風間栄一（長野市埋文センター）
　　石丸敦史（長野県立歴史館）

松本市真光寺古墳群・安塚古墳群より古代の遺物が出土する古墳（石室）が確認されている。また、周辺地域においても秋葉原古墳群などで奈良時代と考えられる遺物が出土する古墳群の存在が知られている。以上の点から、奈良時代まで古墳が造営されていた可能性やこれらの古墳群の意義について研究史や過去の調査例も踏まえた議論が活発に行われた。　（谷和隆）

図129　報告会

図128　掘るしん2025　展示会

図130　パネルディスカッション

（４）展示室・普及啓発用教材等

①展示室（通年公開）

当センターでは、発掘作業・整理作業を実施している遺跡の中で速報性のある出土品や普及公開資料などを展示室で一般公開している。

本年度はリニア中央新幹線建設関連調査における展示コーナーを増やし、飯田市川原遺跡出土の古墳時代中期丸底壺や坏蓋などを展示した。他にも松本市真光寺遺跡出土の中世仏花瓶、長野市長沼城跡出土の小銅仏などを新たに展示した。また、平成25（2013）年から調査に着手し昨年度末に報告書発刊となった長野市石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡についても、中世館出土の兜前立てや明治初期の長谷焼窯道具など特徴ある出土品を展示した。本年度の見学者数は300名（2025年２月28日現在）であった。

②古墳カレンダー（普及啓発用教材）

当センターでは、令和３年度より埋蔵文化財を題材とした普及啓発用教材を作成している。目的は、埋蔵文化財情報をきっかけに、県内の遺跡や博物館等を訪れ、埋蔵文化財への興味を引き出し、文化財保護思想の普及や文化財を活用した地域づくりを推進することである。

また、教材については、県内市町村及び文化施設等と協同して、作成・配布をおこなっており、地域に根差して、県内各地多種多様な埋蔵文化財を広く周知するとともに、ひいては当センター業務の円滑な推進を図ることにも寄与している。

本年度は、普及啓発用教材として「2025年古墳カレンダー」を作成した。

図131　古墳カレンダー

古墳を題材としたのは、本年度当センターで松本市安塚古墳群を発掘調査し、未知古墳の発見、石室調査など多くの成果をあげたこと、前年開催の長野県立歴史館夏季企画展「主張する古墳」に伴いフォトコンテスト「信州の古墳を撮る」が実施され、県民から県内の古墳写真が提供されたことなどが理由である。フォトコンテストの目的が、県内古墳の魅力をより多くの県民に発信し、埋蔵文化財行政への理解と協力へつなげるというものであり、県立歴史館からカレンダー作成への協力についても快諾を得た。他にも県内４市町村から協力をうけ、壁掛け見開きＡ３サイズ（中綴じ冊子タイプ）、２か月１ページとするカレンダーが完成した。

カレンダーは1000部作成し、県立歴史館や協力市町村の博物館などで配布した。また、当センター速報展などのイベント時においても、希望する来場者に配布した。

③情報発信　ＨＰ・ＳＮＳ・YouTube

情報発信については、前年度デザインを一新した当センターＨＰでの新調査情報掲載のほか、ＸやYouTubeを積極的に利用した。

特にYouTubeについては、スピード感を重視し、現地説明会動画などをいち早く編集、早い時には開催翌日にアップできたこともあった。今後も速報性をもち、一般県民の興味関心をひく情報発信に努めていきたい。　（中野亮一）

図132　YouTube 現地説明会

（センター HP　http://naganomaibun.or.jp より視聴可能）

（5）講座・出前授業・職場体験

①講座

○篠ノ井老人福祉センター生きがいづくり講座

「おとなりさんの考古学入門」（全８回）

1）縄文時代『縄文の力と心』（５/16）
2）『発掘調査の手順』（６/20）
3）縄文時代『縄文時代の信州と北陸』（７/18）
4）弥生時代～古代『「渡来人」と信濃国の南北』（８/22）
5）『北海道の遺跡発掘』（９/19）
6）中世『松本平の中世遺跡～真光寺遺跡の発掘』（10/17）
7）遺跡探訪『南宮遺跡・長野市立博物館見学』（11/21）
8）古墳時代『朝鮮半島から運ばれた土器』（12/19）

７回目となる本年度は、縄文時代から中世までの時代ごとの題材とともに、北陸地方や北海道といった長野県外の考古学を題材とした講座も行った。

また、座学だけではなく篠ノ井東福寺と川中島御厨にまたがって所在する南宮遺跡の発掘調査現場と、長野市立博物館で過去の調査による出土品の見学を行った。今後もより参加者の興味関心を引くことができる講座を考えていきたい。

②出前授業

○信州大学教育学部出前授業

７月19日（金）、11月12日（火）

内　容：「信州考古学最前線」「調査研究員のお仕事」「埋蔵文化財センターの仕事～普及啓発～」「埋蔵文化財センターの仕事～整理作業～」

信州大学教育学部の学生を対象に、主に当センターの業務内容について講義を行った。教員を目指す学生が主体の上、同大学には考古学の授業がない状況だったが、埋蔵文化財保護業務に対する理解は深まったものと思われる。

○長野県総合教育センター　教科等教育研修

７月５日（金）

内　容：「地域素材の教材化Ⅰ～埋蔵文化財センターを活用した教材研究～」

長野県内の小中高校の教諭19名に、長野道の調査を事例として、記録保存調査にいたる保護協議や遺跡地図等の埋蔵文化財保護行政の仕組みと、調査成果を歴史の中にどう位置付けるかを講義した。また、実際の発掘作業と土器洗浄の体験も行った。

③職場体験

小学校では総合的学習の一環として、当センターの体験や発掘調査現場の見学を実施している。

中学校ではキャリア教育や進路学習の一環として、地元の企業・機関での職場体験学習を実施している。

当センターは学校の要望にできるだけ応えるべく、以下のような複数の形で、可能な限り受け入れている。

ア　センターにおける職場体験（小学校）

実施校：長野市立通明小学校

内　容：通明小学校では『「箱清水式土器」をPR

図133　遺跡探訪（長野市南宮遺跡）

図134　通明小学校　展示作業体験

して埋蔵文化財センターを盛り上げよう』と題して、当センター展示室の一角を利用した展示作業体験や、顔出しパネルや缶バッジ、クイズ作成等の普及啓発活動の体験を実施した。

イ　センターにおける職場体験（中学校・高校）

実施校：長野市篠ノ井西中学校、同川中島中学校、同篠ノ井東中学校、同更北中学校、県立上田染谷丘高等学校

内　容：遺物の整理と図書整理作業を主として行った。遺物の整理は、土器洗浄・注記、土器の接合・拓本などで、図書室での図書整理などの作業を通して、調査成果としての報告書についても説明をした。

ウ　発掘現場における職場体験

実施校：飯田市立座光寺小学校、長野市塩崎小学校

内　容：座光寺小学校３年生45名による移植ごての掘削による発掘作業体験と、出土遺物の洗浄を実施した。竪穴建物跡内のカマド跡への驚きのリアクション等「発掘たのしかった」「もっとやりたい」等の声が聞かれ、好評であった。

塩崎小学校４年生25名は地元で実施中の塩崎遺跡群の発掘調査現場の見学を行った。

エ　センターにおける探究活動支援

実施校：長野県上田染谷丘高等学校

内　容：高校が実施している探求活動として、遺跡研究の希望があり受け入れた。当センターが参加した４県連携企画のワークショップ運営の体験を行った。

図135　職場体験（拓本作業）

（６）出版物

○長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』

【第23号】2024年７月19日発行

・最新調査成果から　長野市吉田古屋敷遺跡、飯田市川原遺跡

・最新報告書から　辰野町沢尻東原遺跡、飯田市黒田大明神原Ｂ遺跡

・信州の近代遺跡
浅間火山観測所（湯の平）跡

・信州の文化財魅力発信
北沢の大石棒、千曲市森将軍塚古墳館における「御墳印」について

【第24号】2025年２月３日発行

・県内最新調査成果　松本市安塚古墳群、塩尻市内畑遺跡、佐久市龍岡城跡

・遺跡の軌跡　信濃町立が鼻遺跡、長野市大室古墳群

・特集　発見！イチ推し遺物　中野市南大原遺跡、長野市長沼城跡、松本市真光寺遺跡、飯田市正泉寺遺跡

○『長野県埋蔵文化財センター年報 41』
2025年３月21日発行

・2024年度の事業概要、調査研究ノート　ほか

（伊藤　愛）

図136　信州の遺跡　第23号

Ⅴ　指導者招へい

期　日	所　属　等	氏　　名	内　　容
4月～11月	松本市教育委員会文化財課		真光寺遺跡・安塚古墳群・南栗遺跡 発掘調査指導
5月8日～9日	早稲田大学名誉教授 早稲田大学文学部准教授 長野県文化振興課 飯田市教育委員会文化財保護活用課	高橋龍三郎 中門亮太 柳澤亮 加藤大智	川原遺跡配石遺構（SH22） 縄文時代遺物指導
5月9日	元職員	寺内隆夫	川原遺跡配石遺構（SH22） 縄文時代遺物指導
7月5日	長野南警察署交通課		交通安全講習
7月10日ほか	信州大学理学部特任教授	保柳康一	長沼城跡土壌分析
7月24日・26日	早稲田大学名誉教授	高橋龍三郎	信州大学医学部考古資料整理指導
8月21日・22日	県文化財保護審議会委員 安曇野市豊科郷土博物館長	市澤英利 原　明芳	南大原遺跡発掘調査指導
8月26日～27日	滋賀県立大学名誉教授	中井　均	長沼城跡発掘調査指導
8月27日	日本考古学協会員	百瀬長秀	信州大学医学部考古資料整理指導
8月27日～30日	京都大学名誉教授 獨協医科大学医学部 総合研究大学院大学	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美	信州大学医学部出土骨整理指導
8月29日	長野県立歴史館特別館長	笹本正治	長沼城跡発掘調査指導
10月～11月	長野市文化財課		塩崎遺跡群発掘調査指導
10月4日	奈良文化財研究所	中村一郎	遺構写真撮影講習
10月31日	長野県立歴史館	町田勝則 石丸敦史	南大原遺跡発掘調査指導
10月31日	長野県文化振興課	馬場伸一郎	南大原遺跡発掘調査指導
11月26日・27日	大阪府立弥生文化博物館館長	禰冝田佳男	南大原遺跡発掘調査指導
12月3日	奈良県立医科大学	南　武志	塩崎遺跡群水銀朱産地推定指導

Ⅵ　会議・研修会への参加

（1）会議・委員会等

期　　日	内　　容	出　席　者	場　　所
4月24日	文化財保護行政市町村担当者会議	杉木有紗・関　杏介ほか	塩尻市
5月10日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	真関　隆・草間ちづる・川崎　保ほか	長野市
6月13～14日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	真関　隆・川崎　保	福島県福島市
10月25日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック会議	贄田　明・村井大海	名古屋市
1月17日	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議	谷　和隆	埼玉県さいたま市

（2）研修会等

期　　日	内　　容	参加者・調査者	場　　所
5月27～28日	市町村埋蔵文化財研修（基礎研修）	廣田和穂・依田健太ほか	松本市
6月14日、9月27日ほか	文化財専門員研修	春日皓介・依田健太	千曲市
6月29日～7月6日	埋蔵文化財調査士補指定講習会（資格認定）	遠藤恵実子・酒井実姫	リモート・東京都
7月9日	Ｘ線作業主任者免許試験	水科汐華	千葉県市原市
8月5～6日	衛生管理者講習会	水科汐華	長野市
9月18～20日	文化庁埋蔵文化財担当職員等講習会	依田健太	山形市
10月10～12日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	武井和則・杉木有紗・酒井実姫	神戸市ほか
10月29日～11月1日	文化庁文化財マネージメント職員養成研修	杉木有紗	静岡市
11月6日	化学物質管理者講習	伊藤　愛・水科汐華・杉木有紗	長野市・リモート
11月15日	市町村埋蔵文化財研修（発展分野研修）	谷　和隆・上田典男ほか	中野市
1月10～11日	東日本百済土器資料研修（日本大学山本孝文教授）	春日皓介・関　杏介・丸山晃平	千葉県・東京都
1月11～12日	統合生物考古学セミナー	広田良成	茨城県つくば市
2月3日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会デジタル技術等活用推進委員会研修会	関　杏介ほか	リモート
2月3～6日	直弧文土器資料調査	遠藤恵実子	奈良県・三重県ほか
2月12～13日 3月11～12日	玉つくり資料調査	黒岩　隆	新潟県 石川県
2月20～21日	博物館等関係職員研修会	杉木有紗・水科汐華・依田健太	千曲市
2月23～26日	沖縄県戦争遺跡調査	依田健太・町田賢一	沖縄県那覇市ほか
2月25～27日	西日本古墳時代土器資料調査	春日皓介・丸山晃平	大阪府
3月3～5日	３次元測量先進事例調査	谷　和隆・上田典男・水科汐華	徳島県
3月6日	考古資料保存技術講習会	丸山晃平	長野県立歴史館

Ⅶ　学校・関係機関への協力等

（１）職員派遣・技術支援等

期　　日	依　頼　者	対　応　者	内　　容
４月15日	小海町教育委員会	市川隆之	石臼破片の鑑定
５月10日・８月２日・11月22日	山ノ内町教育委員会	綿田弘実	佐野遺跡保存活用計画策定委員会
７月25日	木島平村教育委員会	黒岩　隆	木島平村文化財保護審議会
６月１日～３月31日	伊那市教育委員会	河西克造	伊那市誌編さん協力員
８月１日～３月31日	伊那市教育委員会	河西克造	史跡高遠城跡保存活用計画策定委員会
９月26日・３月４日	佐久市教育委員会	市川隆之	中世陶磁器の鑑定
11月23日	山梨県立富士山世界遺産センター	河西克造	ふじ塚遺跡の調査報告
12月２日・１月10日	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡保存整備委員会
２月13日	佐久市教育委員会	中野亮一	大給恒顕彰委員会

技術支援等

信州大学医学部所蔵考古資料整理業務

期間　2024年４月１日～ 2025年３月31日

信州大学所蔵考古資料の概要　詳細については、別稿でも報告した（川崎2025）が、概要をここでも紹介する。県埋文センターで保存活用のための技術支援を行った信州大学所蔵の考古資料は、医学部保管資料と図書館保管資料に大別される（総数166箱：内訳表１参照）。医学部保管資料は、県埋文センターが調査する前には、いわゆる「赤レンガ倉庫」（医学部資料室：旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫）に保管されていたが、医学部解剖学第二教室（現・人体構造学教室）が研究のために発掘した資料（以下、医学部発掘調査資料）とそれ以外に医学部に持ち込まれた資料（以下、医学部外部調査資料）に分かれる。一方、図書館所蔵保管資料は、旧制松本高等学校時代に収集されていたものが、戦後、信州大学文理学部さらには附属図書館へ移管されたもの（以下、図書館考古資料）と見られる。

種別の内訳　資料は計161箱で、土器や石器が多いが、金属器などの脆弱遺物もある。骨などの自然遺物も約３割の箱に含まれていた。

本年度までの流れ　県埋文センターによる技術支援以前　2010年代にも信州大学の関係者から医学部解剖学第二教室関連の考古資料医学部発掘調査資料の保存活用について、県教育委員会からの協力依頼と現地調査　2021年４月に信州大学大学史資料センターより県教育委員会（当時）の文化財担当に医学部が管理している考古遺物の取り扱いについて相談があり、県内遺跡出土資料が多く含まれており、そがあり、同年５月に信州大学と県教育委員会との間で協議が行われ、信州大学赤レンガ倉庫に保管されている考古資料の現地調査が行われた。

一義的には信州大学において保存活用されるのが望ましいという判断に至ったが、同年12月にはその保存活用を行うにあたっては、考古資料に関する専門的な知識が必要であることから、信州大学による考古資料保存活用のための整理作業を県埋文センターが技術支援することについての協定が結ばれ、2022年から埋文センターに搬出し、財産調べ、一部の遺物洗浄、台帳整備が開始され、2023年には一旦、資料をお返しした。

本年度の作業　一旦返却した遺物の内、未洗浄であった残りの土器・石器類の処置を終了した。これらの資料については、高橋龍三郎（早稲田大学名誉教授）、百瀬長秀（日本考古学協会員、元県埋文センター調査課長）による整理指導を得た。出土骨類も、2022年度に続いて茂原信生（京都大学名誉教授）、櫻井秀雄（獨協医科大学）、本郷一美（総合研究大学院大学）に鑑定を含む整理指導を受け、台帳の整備を行った。

台帳整備ができたことを踏まえ、本事業の中間報告として地域展と講演会を、県埋文センターの普及啓発事業を兼ねて、信州大学医学部・附属図書館・大学史資料センターとともに信州大学中央図書館で開催した。

また、外部研究者による研究成果の一部は、本年報研究ノートに所収した。　（川崎　保）

参考文献

川崎　保2025「信州大学所蔵考古資料整理支援の経緯と課題」『信州大学附属図書館』第14号

表１　信州大学所蔵考古資料の内訳（2025年３月１日現在）

所　蔵	名　称	箱　数	備　考
医学部	医学部発掘調査資料	145	解剖学第二教室・信州ローム研究会調査
	医学部外部調査資料		収集等
図書館	図書館考古資料	16	旧制松本高等学校時代の収集資料等
	計	161	

（２）学校等への協力（職場体験を含む）

期　　日	名　　称	対応者	内　　容
４月～１月	長野大学	川崎　保	講座（日本史概論・信州地域史）
５月16日 ６月20日 ７月18日 ８月22日 ９月19日 10月17日 11月21日 12月19日	篠ノ井老人福祉センター （おとなりさんの考古学入門：全８回）	黒岩　隆 村井大海 町田賢一 川崎　保 広田良成 杉木有紗 依田健太 春日皓介	縄文の力と心 発掘調査の手順 縄文時代の信州と北陸 「渡来人」と信濃国の南北 北海道の遺跡発掘 松本平の中世遺跡 長野市南宮遺跡・市立博物館見学 朝鮮半島から運ばれた土器
５月20日 10月16日	かわまちづくり協議会	川崎　保	歴史・文化ワーキング会議
６月１日	長野県考古学会	春日皓介	研究報告会「飯田市川原遺跡の発掘調査研究報告」
６月１日	座光寺小学校麻績っ子クラブ	長谷川桂子・村井大海 和田晋治	正泉寺遺跡見学等
６月27日 ７月２日	座光寺小学校	贄田　明・長谷川桂子 春日皓介・遠藤恵実子 綿田弘実	正泉寺遺跡見学・発掘体験・遺物洗浄体験等
７月１日	上田市中央公民館	川崎　保	ことぶきアカデミー講座「信州発掘調査最前線」
７月５日	長野県総合教育センター	川崎　保・廣田和穂・ 贄田　明	教員研修（「地域素材の教材化Ⅰ」）
７月18日・23日	長野市立篠ノ井西中学校	市川隆之・風間真起子	職場体験（３名）
７月19日	中野市立博物館	上田典男	南大原遺跡見学（考古学講座受講者）
７月19日	信州大学教育学部出前講座	川崎　保 贄田　明 水科汐華	「信州遺跡発掘最前線」 「文化財保護行政の概要」 「調査研究員のお仕事」
７月25日	安曇野市教育委員会文化財課 安曇野市貞亨義民記念館	河西克造	安塚古墳群見学
７月30日・31日	長野市立川中島中学校	市川隆之・風間真起子	職場体験（３名）
７月31日	SBC 信越放送株式会社	川崎　保・風間真起子	「ずくだせテレビ」取材 塩崎遺跡群ミニチュア土器
８月５日	松本市教育委員会	廣田和穂	南栗遺跡見学（松本市職場体験学生）
８月５日	長野県文化振興課	伊藤　愛	県庁インターンシップ生長沼城跡現場見学（３名）
８月６日	松本市教育会文化財同好会 東筑摩塩尻教育会文化財研究会	廣田和穂	南栗遺跡見学
８月７日	飯田市上郷考古博物館	春日皓介	ギャラリートーク「川原遺跡について」
８月８日	中野市文化財保護審議会	上田典男	南大原遺跡見学
８月17日	南あわじ市教育委員会	廣田和穂	松帆銅鐸市民講座 「柳沢遺跡―本州最東端の青銅器埋納坑―」
８月20日	松本市和田公民館	河西克造	安塚古墳群発掘調査報告会
８月21日	千曲市教育委員会	川崎　保	戸倉公民館いきいき創造学級講座「洪水と遺跡」
８月23日	長野県立歴史館	川崎　保・西　香子	歴史館インターンシップ生本庁見学（１名）
８月29日	同志社大学	川崎　保	同志社大学公開講座「縄文玉の系譜」
９月12日	松本市立島立小学校	廣田和穂・関　杏介	出前授業
10月６日	長野市復興応援事業実行委員会	伊藤　愛	長沼城跡パネル展示
10月10日・11日	長野市立篠ノ井東中学校	谷　和隆・西　香子	職場体験（３名）

10月23日	長野市立更北中学校	谷　和隆・西　香子 広田良成	職場体験（１名）
11月12日	信州大学教育学部出前講座	杉木有紗 伊藤　愛	「埋蔵文化財センターの仕事～普及啓発～」 「埋蔵文化財センターの仕事～整理作業～」
11月19日	長野市三陽老人福祉センター	中野亮一	かがやき男塾講座 「遺跡発掘でわかること　遺跡ロマンを感じよう」
11月20日	長野市立通明小学校	谷　和隆・杉木有紗 伊藤　愛・河西克造 中野亮一	総合的学習 「埋蔵文化財センターを盛り上げよう」（31名）
11月22日	長野市立塩崎小学校	市川隆之・風間真起子	塩崎遺跡群発掘現場見学（25名）
11月23日	山梨県立富士山世界遺産センター	河西克造	世界遺産富士山講座「ふじ塚遺跡の調査結果」
11月28日	松本市波田公民館	杉木有紗 酒井実姫	歴史講座「ここまでわかった真光寺遺跡」 出土品展示解説
12月12日 ２月16日	山梨県埋蔵文化財センター	中野亮一	中央４県連携シンポジウム講座講師
１月13日	県上田染谷丘高等学校	川崎　保	職場体験（１名）
３月２日	中野市立博物館	黒岩　隆	ふるさとレポート発表会「南大原遺跡の調査結果」

（３）調査資料の利用

承諾月日	申　請　者	内　　容
３月12日	イギョンファン（雑誌『韓国の考古学』）	川原遺跡画像の転載
４月12日	公益社団法人　日本文化財保護協会	沢尻東原遺跡・日向林Ｂ遺跡・柳沢遺跡 社宮司遺跡・塩崎遺跡群画像の転載
４月23日	東京大学考古学研究室　根岸洋	塩崎遺跡群出土資料の閲覧
４月23日	弥生中期土器研究会　星野宙也	塩崎遺跡群出土資料の閲覧
５月28日	飯田市教育委員会	川原遺跡出土資料の転載
６月21日	株式会社本作り空 Sola	日向林Ｂ遺跡画像の転載
６月21日	上田市個人	ジュニア考古学第８号画像の転載
６月25日	株式会社 ABC アーク	長沼城跡画像の転載
６月26日	株式会社ベネッセコーポレーション	屋代遺跡出土資料の転載
７月１日	若穂郷土史研究会	当センター 30周年記念誌資料の転載
７月２日	公益社団法人　日本文化財保護協会	沢尻東原遺跡出土資料の転載
７月２日	弥生中期土器研究会　星野宙也ほか	塩崎遺跡群出土資料の閲覧
７月２日	飯田市教育委員会	川原遺跡画像の転載・出土資料の借用
７月24日	松本市和田公民館	当センターＨＰ画像の転載（安塚古墳群）
７月25日	長野県県民文化部文化振興課	柳沢遺跡出土資料の転載
８月６日	長野市復興対策室	長沼城跡展示パネルの借用
８月19日	長野市家庭・地域学びの課	長沼城跡画像の転載
９月５日	長沼地区住民自治協議会	長沼城跡画像の転載

9月5日	大正大学教授　塚田良道	塩崎遺跡群・南大原遺跡出土資料の閲覧
9月10日	埼玉県松伏町教育委員会	社宮司遺跡出土資料の転載
9月18日	野尻湖ナウマンゾウ博物館	星光山荘Ｂ遺跡出土資料の転載
9月19日	東京都八王子市　個人	信州大学考古資料の閲覧
10月2日	飯田市北条公民館	西浦遺跡展示パネルの借用
10月10日	長野県立歴史館	当センター HP 画像の転載（長沼城跡）
10月15日	信濃毎日新聞社	長沼城跡出土資料の転載
10月21日	新潟県立歴史館　専門研究員	塩崎遺跡群出土資料の閲覧
10月28日	群馬県板倉町　個人	信州大学考古資料の閲覧
11月14日	公益社団法人　日本文化財保護協会	南大原遺跡画像の転載
11月14日	山梨県立富士山世界遺産センター	ふじ塚遺跡画像の転載
11月19日	株式会社ジャパン通信情報センター	南大原遺跡画像の転載
12月11日	公益社団法人　日本文化財保護協会	南大原遺跡画像の転載
1月16日	中野市立博物館	当センター HP 画像の転載（南大原遺跡出土資料）
1月16日	鳥取県立むきばんだ史跡公園	柳沢遺跡出土資料の転載
1月22日	中野市立博物館	当センター HP 画像の転載（南大原遺跡出土資料）
1月28日	株式会社ジャパン通信情報センター	南栗遺跡画像の転載
1月31日	松本市教育委員会	真光寺遺跡・安塚古墳群・南栗遺跡画像の借用
2月19日	飯田市教育委員会	正泉寺遺跡画像・出土資料の借用

（4）インターンシップ等

参加学生

期　間	所　属	氏　名	遺　跡
6月10日～21日（発掘）	アメリカ　イリノイ大大学院	James　Coburn ※	長野市長沼城跡
8月1日～23日（発掘）	東北大学大学院	楠　裕人	松本市南栗遺跡
8月5日～30日（発掘）	奈良大学大学院	二ノ宮　由大	松本市真光寺遺跡
8月19日～30日（発掘）	立正大学大学院	松本　文斗	松本市真光寺遺跡
8月19日～30日（発掘）	愛知学院大学	安藤　瑠人	松本市南栗遺跡
8月19日～30日（発掘）	静岡大学大学院	福地　朝彦	長野市長沼城跡
8月19日～30日（発掘）	立正大学大学院	小山　峻輝	長野市長沼城跡
8月19日～9月5日（発掘）	愛知学院大学	三村　優斗	松本市真光寺遺跡
8月19日～9月5日（発掘）	奈良大学	吉澤　佑弥	松本市南栗遺跡
8月26日～9月6日（発掘）	金沢大学	小柳　篤史	飯田市正泉寺遺跡
8月26日～9月6日（発掘）	金沢大学	稲葉　大樹	飯田市正泉寺遺跡
8月26日～9月9日（発掘）	金沢学院大	中島　美優	長野市長沼城跡
9月2日～17日（発掘）	金沢大学	清澤　美月	松本市真光寺遺跡
9月2日～17日（発掘）	國學院大学大学院	東　颯太郎	松本市南栗遺跡
9月3日～17日（発掘）	同志社大学	野田　桜子	飯田市正泉寺遺跡
9月9日～24日（発掘）	立正大学	山田　洸貴	長野市長沼城跡
9月9日～25日（発掘）	金沢大学	AHMAD FAIZ SHAZWAN BIN ABDUL MALIK	飯田市正泉寺遺跡
9月12日～27日（発掘）	京都大学大学院	小山　賢太郎	長野市長沼城跡
9月2日～20日（整理）	お茶の水女子大学	久保　陽奈	長野市長沼城跡
2月3日～21日（整理）	奈良大学大学院	二ノ宮　由大	長野市長沼城跡
2月25日～3月14日（整理）	立正大学大学院	松本　文斗	松本市真光寺遺跡

※私費参加

（5）県有施設（県立歴史館）利用の応急的保存処理

期　間	種類・点数	内　容	担　当　者	遺　跡
1月～3月	青銅製品19点 鉄製品147点	X線透過観察、有機洗浄・脱塩・樹脂含浸等	水科汐華 酒井実姫	松本市南栗遺跡 坂城町上五明条里水田址 飯田市正泉寺遺跡耳環 長野市長沼城跡刀装具ほか

（6）派遣等の受入

出向

期　間	所　属	職	氏　名	遺　跡
4月～3月	北海道埋蔵文化財センター	調査研究員	広田良成 大泰司統	長野市長沼城跡 飯田市五郎田遺跡ほか
4月～3月 10月～3月	富山県文化振興財団	調査研究員	町田賢一 島田亮仁	中野市南大原遺跡 飯田市宮崎下遺跡ほか

Ⅷ　組織・事業の概要

（1）組　織

2024年10月１日現在

一般財団法人長野県文化振興事業団

【評議員】　堀内征治　笠原甲一　小出貞之　石川利江　直江　崇

【理事会】
理事長　：吉本光宏　副理事長：金澤　茂　常務理事：山本晋司
理　事　：市澤英利　唐木さち　松山　光　丸茂洋一
監　事　：小川直樹　北山良一

- 事務局
  - 芸術文化推進室
- 埋蔵文化財センター　40名
- 県民文化会館
- 伊那文化会館
- 松本文化会館
- 県立美術館
- 飯田創造館
- アーツカウンシル推進局

所　長

副所長（兼管理部長）

- 管理部　7（8）名
  - 管理部長　管理課長　課長補佐　主事４名
- 調査部　32名
  - 調査部長
    - 調査第一課　11名
      - 課長　課長補佐以下10名
    - 調査第二課　11名
      - 課長　調査研究員以下10名
    - 飯田支所　9名
      - 支所長　課長補佐以下８名

（2）職　員（臨時職員を除く）

2024年10月１日現在

所　長		真関　隆
副　所　長		草間ちづる
管理部	管理部長（兼）	草間ちづる
	管 理 課 長	神田弘一
	管理課長補佐	武井和則
	主　事	日向　育　中澤克子　酒井清美　石田宏美
調査部	調 査 部 長	川崎　保
	飯田支所長	贄田　明
	調 査 課 長	［第一課］　西　香子　［第二課］　谷　和隆
	調査課長補佐	［第一課］　廣田和穂　［飯田支所］　長谷川桂子
	主任調査研究員	［第一課］　杉木有紗
	調査研究員	［第一課］　関　杏介　風間真起子　鈴木時夫　酒井実姫　小出晟生 丸山晃平 ［第二課］　伊藤　愛　依田健太　水科汐華 広田良成（北海道埋文より出向）　町田賢一（富山県財団より出向） 山田清朝　黒岩　隆 ［飯田支所］　村井大海　春日皓介　大泰司　統（北海道埋文より出向） 和田晋治　遠藤恵実子　島田亮仁（富山県財団より出向）
	調査指導員	［第一課］　市川隆之　河西克造 ［第二課］　藤原直人　上田典男　中野亮一 ［飯田支所］　綿田弘実

（3）事　業

事業名または個所名			事業個所		委託事業者等	事業内容	精算（千円）
受託事業	発掘・整理作業	一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事	長野市　塩崎遺跡群		国交省関東地整局 長野国道事務所	発掘作業 整理作業	53,442
		一般国道158号（松本波田道路）改築工事	松本市　真光寺遺跡ほか１遺跡			発掘作業	144,759
		松本 JCT 建設事業	松本市　南栗遺跡		国交省長野国道事務所 ネクスコ中日本	発掘作業	312,897
		上今井遊水地整備事業	中野市　南大原遺跡	その１	国交省北陸地整局 千曲川河川事務所	発掘作業	387,420
				その２		発掘作業	387,049
		長沼地区河川防災ステーション整備事業	長野市　長沼城跡		国交省北陸地整局 千曲川河川事務所 長野市河川課	発掘作業	235,229
		飯田市座光寺上郷道路建設事業（広域連携）	飯田市　正泉寺遺跡ほか１遺跡		長野県 飯田建設事務所	発掘作業	130,048
		飯田市座光寺上郷道路建設事業（道路）	飯田市　宮崎下遺跡		長野県 飯田建設事務所	発掘作業	18,645
		飯田富山佐久間線改築事業	飯田市　川原遺跡ほか１遺跡		長野県 飯田建設事務所	発掘作業 整理作業	23,342
		中央新幹線建設工事	飯田市　五郎田遺跡ほか２遺跡		東海旅客鉄道株式会社	発掘作業	712,250
	技術支援	信州大学医学部所蔵考古資料整理業務	県内遺跡		信州大学	整理作業	5,000
	研　修　等		長野県		奈良文化財研究所 職員自己研鑽研修等		3,418
自主事業	普　及　啓　発		施設公開（夏休み考古学教室）　７月				
			出土品展＆報告会　２月				
			遺跡説明会及び発掘体験				
			広報誌「信州の遺跡」23・24号の刊行				
			普及啓発用教材の作成「古墳カレンダー」ほか				
			出前授業・地域普及啓発事業への協力				46
	そ　の　他		インターンシップの受入				—

Ⅸ　調査研究ノート

（１）飯田市川原遺跡の配石遺構の構築方法に関する考察
調査研究員　　遠藤恵実子

（２）南大原遺跡の玉つくり
調査研究員　　黒岩　隆

（３）川崎市高津区下作延遺跡出土の弥生土器について
―『日本先史土器図譜』第Ⅴ輯46・48-１の再発見―
日本考古学協会員　坂本　彰
日本考古学協会員　宮田　毅

（４）川原遺跡出土百済土器盌の一様相
―製作工程の復元と法量的検討―
調査研究員　　春日皓介

（５）千曲川の瀬直し（中野市上今井）と丸山要左衛門について
所長　　真関　隆

（１）飯田市川原遺跡の配石遺構の構築方法に関する考察

遠藤恵実子

１　はじめに

飯田市川原遺跡は天竜川左岸に位置する遺跡で、2016年度、2022～2024年度の調査で縄文時代中・後期、弥生時代後期、古墳時代中期の遺構が確認されている。

この中で、縄文時代の遺構を中心に調査を行った2023年度において、大形の礫を半円形に立てた飯田地域ではこれまでに例のない遺構が見つかった（配石遺構（SH22））。2023年度には調査は礫の全体を出すところまでを行ったが、遺構の状態とその先の解体を含めた調査方法の検討を行うため、2024年度に専門家を招集して現地検討会を行い、この結果を踏まえて解体を伴う調査を行った。

本稿は、遺構に使われた礫の構築順序を明らかにするために行った礫のインプリント確認を中心に、調査時に撮影した写真から調査の手順を示し、構築順序と構築方法の復元について考察したものである。

２　遺構の概要

縄文時代中・後期は、堤防部分（2016年度調査区）から東側にのびる集落域であり、2023年度の調査では、竪穴建物跡を始め大小の礫を使った遺構が多くみられた。この中で大形の礫が集中する箇所にトレンチを入れたところ、立てた状態の礫が複数あることが判明した。礫全体を検出した結果、大形の礫を半円形に組んだ配石遺構であることを確認した。

規模は径3.4mの半円形で弧の外側が北側を向く。礫は欠損なく全体を検出したと考えられるが、中央よりも東側で一カ所立てられた礫の間に隙間が空く。使われている礫は、立てられた礫が長さ50～64cmで縦方向に置かれるが、中央の１つの礫のみ横方向に置かれている。その前面に長辺30cm前後の楕円形を呈する礫が立てられた礫に接して置かれている。

図１　川原遺跡遺構全体図

図２　配石遺構と縄文時代周辺遺構（南から）

３　調査の方法

１：礫の名称（番号）（図３）：類似遺構などによる呼称の例がないことから、本稿では遺構検出時に付けた名称（番号）を使用した。名称は立てた礫を「立礫」、その前面の礫を「前礫」とし、番号は西側から「立礫１」「前礫１」と付けた。

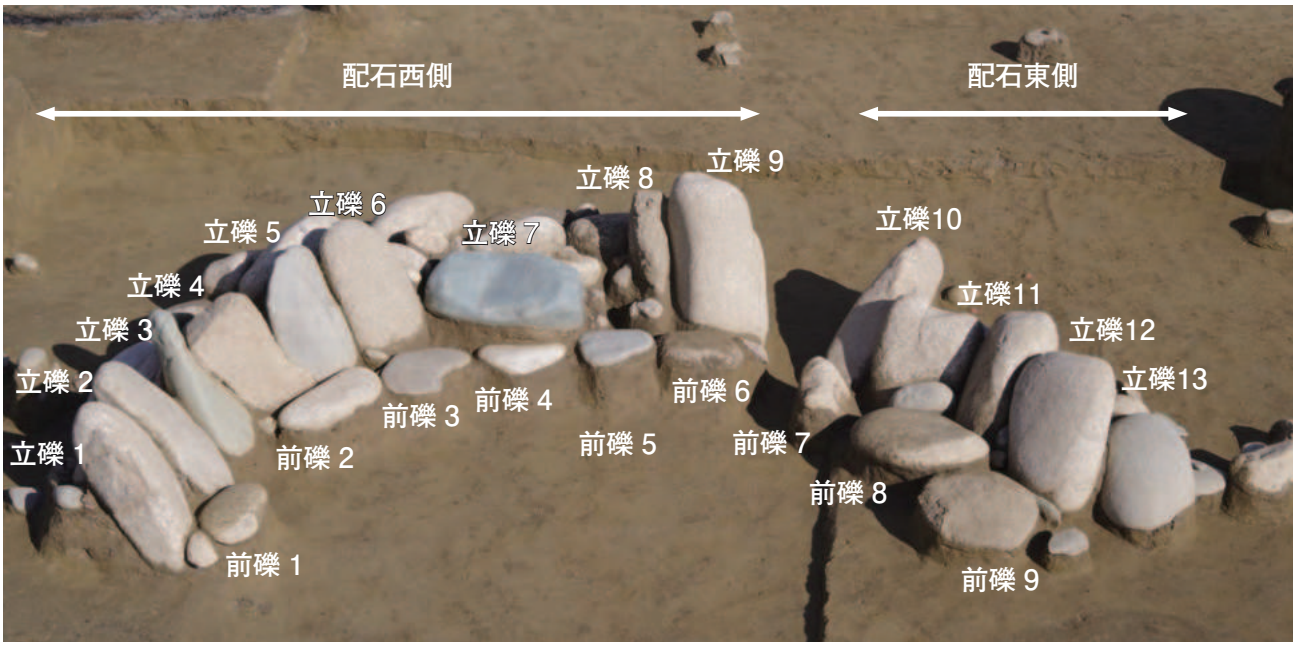


図３　配石遺構（SH22）　礫番号　（図上＝北）

また、立礫の後ろに組まれている礫（図16・17）については「背面（礫）」とした。

２：配石遺構の名称（図３）：配石は、中央からやや東側（立礫９と10の間）で間が空き、ここで配石の様相が異なることから「配石西側」と「配石東側」と記述する。

３：礫の取り外し（図４～図15）：インプリントを残していくことから、取り外しは手作業で行った。まずは全体から礫の重複関係を観察し、取り外しが可能な箇所から行った。その際に写真はインプリントでの前後関係が分かるよう複数個外してから撮影をしたため、この段階では実際の構築順とは異なる順番となっている。また、図のキャプションの礫番号は取り外し後のインプリント部分を示している。

以下、調査順（図の順番）にそって礫の取り外しについて述べていく。

４　立礫と前礫の取り外し

図４　立礫１・４、前礫１・２の取り外し。はじめに東端の立礫１と前礫１を取り外した。立礫４は立礫３の上に重なっていることから先に取り外し、前礫との位置をみるため前礫２も同時に外した。立礫３の次に立礫４が立てられている。立礫と前礫の前後関係が明瞭に出たことから、これ以降の作業では立礫と対応する前礫を同時に外し前後の記録をとっていくこととした。

図５・６　立礫２・３の取り外し。図５では立礫１～３はしっかりと側面を合わせ、平坦面が前

図４　立礫１・４、前礫１・２

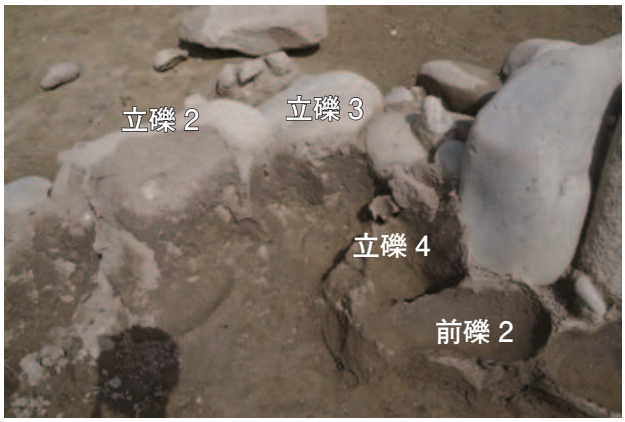


図５　立礫２～４、前礫２（南から）

に出る様にしたうえで、ほぼおなじ傾きで背面の礫に立てかけている。前礫１から前礫２の間が空くが、前礫２と前礫３は接しており、前礫２の次に前礫３が置かれている。また立礫４と前礫２の前後関係により前礫が立礫の後で置かれたことが明瞭にわかる。

図７　前石２・３が立礫５・６に接し、立礫６の下部に小形の礫（▼）をかませている。

図８　立礫５・６取り外し。立礫５と６は礫自体が重複しており、順序は立礫５が先で立礫６が後で基部がぴったりと接している。また、取り外し時に立礫と一緒に取れてしまったためインプリントのみであるが、基部よりも高い位置で背面の礫との間に小型の礫（▼）が立礫５と６の間に置かれている。設置は立礫５設置の後に小型礫、その後に立礫６を置いたとみられ、立礫５・６も立礫１～４と同様に平坦な面が正面を向くようになっていることから、小形礫は礫の向きを合わせるために入れたものと考えられる。

図９　立礫９の取り外し。立礫８は断面長方形の短辺部が中心を向くように置かれ、長辺東側に立礫９が接し、西側は立礫７との間には隙間が空き、隙間部分の前に前礫５が置かれる。立礫９の後ろの支えは、西側の側面が立礫８、背面は真後ろにある長辺15cmほどの円礫（図15立礫９下）のみで支えており､背面の礫組には当たっていない。

図10　立礫７の取り外し。立礫７は検出時からほかとは異なり横向きになっていた。礫の色が特に青く礫の形状も異なること、位置が全体からみて中央（立礫13個中の７番目）にあることから、ほかとは性格が異なる礫の可能性を考えていたが、当初の位置を保っているかについては判断できなかった。立礫７は、両横の立礫とは接してはいないが、背面の礫組には接している。礫の断面形状は上部からは立方体であるが、下部は三角形に近い形であり、底面まで深く入っていた。また前に位置する前礫４とも接しておらず、前面（前礫４の後）に置かれた15cm大の礫（図16 立礫７下）により下面を支えており、後世の移動のない原位置にあるものと考えられる。立礫７の設置順

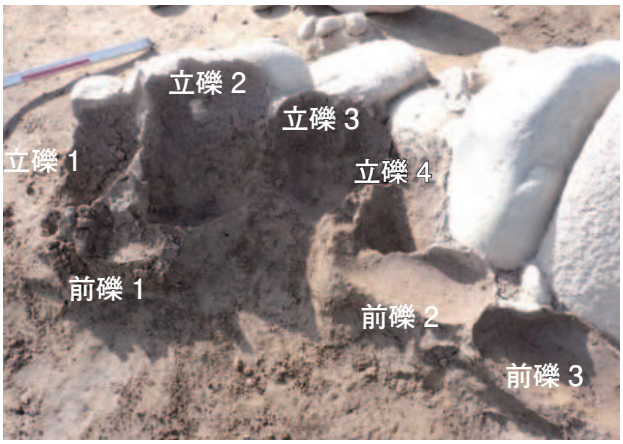


図６　立礫１～４、前礫１～３（東から）

図７　前礫２・３

図８　立礫５・６、前礫２・３

図９　立礫９　前礫６

は、立礫６の後であることは確実であるが、立礫７と立礫８では、立礫７と立礫８に間が空いていることから、前後を判断しかねる。推測の域を出ないが、特異性を考慮すると立礫７は配石遺構全体の最後に置かれたことも考えられる。

図11・12　立礫13、前礫８・９の取り外し。配石東側（立礫10、前礫７から東）は、西側の礫とは違い空間が空き重複がない並びである。目視による礫の重複から、東端の礫（立礫13）から取り外しを行った。立礫13の東側は、背面に組んだ礫が外側に出ており、東側をこの礫に、西側は立礫12に向かって若干斜めに立てられている。前礫８と９は接し、前礫８が先に置かれている。また立礫12と13の下部の間には長さ10cmほどの円礫を（▼上）、立礫13と前礫９の間にも扁平な礫を立てて咬ませている（▼下）ほか、その隣にも前礫９に沿わせるように同じ大きさの礫が置かれている。

図13　前礫７の取り外し。立礫11と前礫８の間に20cmほどの小形礫が置かれている。検出時から確認できたもので、前礫７の後、前礫８の前に設置している。立礫11と前礫８の間を埋めているものであるが立礫11にしっかりと当たっていることから、空いた部分を埋めるのではなく、立礫の抑えとして前に置かれたのであろう。また後に置かれた前礫８も隙間なく置かれている。

図14　立礫11、12の取り外し。立礫12から立礫11の順で取り外した。立礫11と立礫12は隙間なくつめられ、立礫11は立礫10に上半分が重なるように置かれている。配石東側の立礫は立礫10から13の順に立てられている。立礫10と11の背面は大形の礫を組んだものはなく、立礫10は下の小形の礫で支え立礫11は立礫10で側面を支えている。なお配石東側は配石西側よりも後ろに大形の礫がなく、立礫12の後ろは小形礫で、大形の礫は立礫13の後ろ、東端に置かれるのみとなっている。

図15　配石西側・配石東側空間部分、礫取り外し後（立礫９と立礫10の間）。空間部分について、後世の抜き取りなどを想定し礫痕の確認を行った。立礫９と立礫10は、背面の礫組がなく、礫の取り外し後に15～20cmほどの小形礫によって背

図10　立礫７

図11　立礫13、前礫８・９

図12　立礫13、前礫７～９

図13　立礫13、前礫７・８

面を固定していたことを確認した。以上から、この間に大形の礫があった可能性はなく、配石西側と配石東側は、20cm程の間を空けて造られたものと考えられる。

5　構築順序

礫の解体とインプリントの観察から、立礫・前礫の設置は、西側（立礫１）から東側（立礫13）の順（礫番号１から13への時計回り）に設置していることがわかった。

全体の構築順序については、大形の礫で半円形のおおよその形（背面礫組下面）（図17）をつくり、その上に同じ大きさの礫（背面礫組上面）（図18）を乗せて背面の礫組を造る。次に立礫を背面礫組に沿って西側から設置、立礫の設置後に前礫を立礫に沿って同じく西側から時計回りに設置したもの、と復元される。

6　礫の設置方法

構築順序をふまえ、配石遺構構築にあたっての重要な点として、１：遺構の形状、２：正面からの礫の見せ方、３：立礫・前礫の高さを揃えていることが挙げられる。

１：配石遺構の形状：背面礫組の下段で遺構の形状「弧が北を向いた半円形」がつくられる。この段階で、配石の途中に空間がみられ、立礫の様相が変わる配石東側と配石西側の配置もこの段階で設定されている。（図17）

２：正面からの見せ方：立礫は礫の平らな面を正面に向け隙間なく立てられている。このような立て方をするために、背面の礫組の上段の組み方のほかに10～20cmの小形の礫を背面との間や立礫・前礫の間に咬ませながら調整を行っている（図７・８・12）。

３：立礫・前礫の高さ（図18・19）：正面からみて目を引くのは、礫の高さが揃っていることである。

立礫・前礫の高さは、配石西側と配石東側とでは立礫の上面のレベルが異なるが、それぞれで揃えている（図18・19水平撮影）。

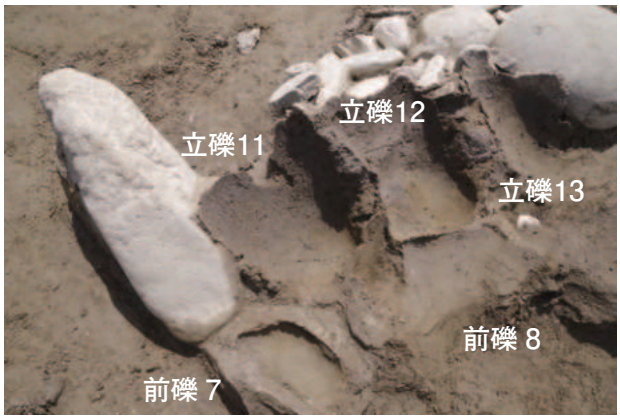


図14　立礫11～13、前礫７・８

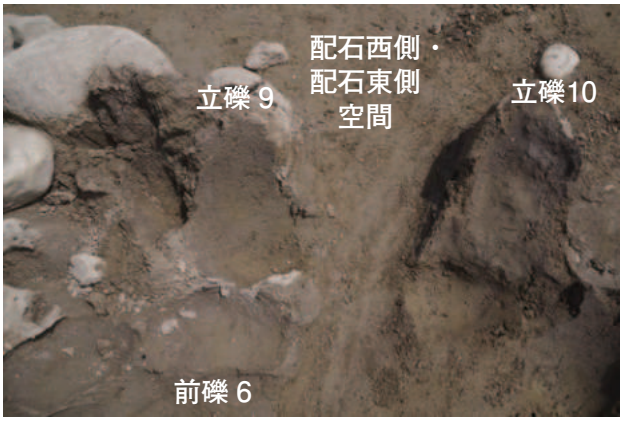


図15　立礫９・10、前礫６

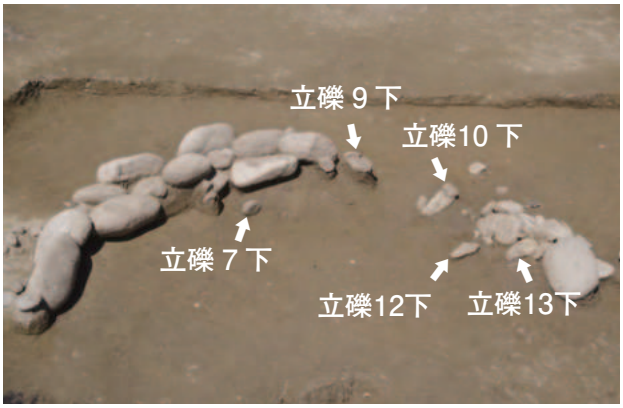


図16　配石遺構背面　上段

図17　配石遺構背面　下段

西側は、立礫１～９のうち横方向に置かれた立礫７以外の高さを揃えており、東側では立礫10～13で高さを揃えている。高さは、西側で立礫７を除き一番高いのが立礫６・９、低いのが立礫４でその差は９㎝、この他での差は６㎝以内と高さは揃えられているといえる。立礫７についてはこれよりも12㎝下がる。東側では両端の立礫10と13、中の立礫11と12がそれぞれ同じ高さでその差は４㎝となっている。西側と東側との比較では、東側が20㎝低くなっている（図19上面レベル線）。

前礫は配石西側前礫１～６での差は３㎝以内に揃い、配石東側は前礫７と前礫９は10㎝差で前礫９に向かって高くなっている。なお、配石西側と配石東側の空間を挟むところは、立礫９（西側）と立礫10（東側）では23㎝立礫10が低く、前礫では前礫６（西側）から19㎝前礫７（東側）が低くなっている。

また、礫のインプリントの直下から、背面の石組とは異なる礫がみられる箇所がある（図16）。大きさは10～20㎝ほどの小形のものが５個、立礫の下面で接している。配石西側で２カ所、東側で３カ所あり、西側では１つだけ横向きなど他の礫とは異なる様相の立礫７と東端の立礫９に、東側では立礫10、12、13と４個ある内の３個に使われている。立礫は立礫７を除きほぼ同じ大きさのものを、東側は西側よりも低く据えていることから、小形の礫で調整したことが考えられる。

配石遺構の礫には加工された痕はみられない。礫を加工することなく天竜川から自然の礫を選別し、組み上げることで、半円の平面形と正面から立礫の平坦が見えるように配置し、さらに上面の高さを揃えて造られたものである。

７　まとめ

配石遺構の調査においては、調査自体が解体作業であることから、記録保存と今後の検討材料としての情報をとることができるかが課題であった。大形で重量のある礫のインプリントを残しながら外す作業は困難であったが、礫の構築順の復元に至る記録をとることができた。掲載写真には報告書では記載されないメモ写真として撮ったものも含まれるが、本稿ではこうした写真も使うことで立礫と前礫の取り外しについて、現場での状況をできるかぎり細かく示すことを目指した。

図18　配石遺構 水平撮影（南から）

図19　配石遺構　水平撮影立礫高さ比（南西から）

謝　辞

本年度調査では、専門家による現地検討会を行い、山梨県立考古博物館館長高橋龍三郎氏、早稲田大学教授中門亮太氏に多大な指導をいただいた。本稿のインプリントの記録による構築方法の復元はここでの指導によるものである。また北海道埋蔵文化財センター理事長長沼孝氏、寺内隆夫氏にはSH22と周辺の配石遺構についての指導をいただいた。記して感謝を申し上げる。

（2）南大原遺跡の玉つくり

黒岩　隆

1　はじめに

日本人が好む色は、今も昔も青緑色に輝く「ヒスイ色」である。2016年９月24日、日本の「国石」に「ヒスイ（翡翠）」が選定された。縄文時代以来のヒスイの青緑に、弥生時代になって「碧玉」の青緑が加わった。縄文時代にはなかった円柱形の玉をつくる技術は、米作りや鉄器とともに、韓半島から日本に伝えられた。

「弥生時代の碧玉[1)]による玉つくりは、弥生時代前期前半までに鳥取県と岡山県をむすぶ中国地域で現れ、中期前葉に近畿北、中部、北陸西部の能登半島基部・富山平野西部、中期中葉以降に北陸東部の新潟県地方（佐渡、上・中越地方）で盛んに行われるようになった。」（河村2024：45、一部表現改変）

それに対して、長野県を含む中部地方では、弥生時代中期における玉つくりは、現在のところ、その実態は明らかになっていない。弥生時代中期の早い段階に太平洋側では愛知県朝日遺跡（名古屋市）まで到達した。しかし、その玉つくりの技術（丹羽1986））は、決して峠を越えて信濃の国に入ってくることはなかった。また日本海側でも、県境に近い新潟県上越市の吹上遺跡で大量の玉材が持ち込まれ、管玉が大量生産されていた様子がわかってきている（馬場2006）が、信越国境を越えると、中野市栗林遺跡、長野市春山Ｂ遺跡、飯山市小泉遺跡等で管玉の未成品が部分的にみつかる程度となってしまう。

令和６年度上今井遊水地整備事業に伴う中野市南大原遺跡の発掘調査において、弥生時代中期後半（栗林Ⅰ式新段階）の竪穴建物跡および隣接する大形土坑から多くの玉つくり関連遺物が出土し、碧玉管玉・ヒスイ勾玉つくりの工程がある程度再現できる状況がみえてきた。遺構内の土壌も採取してきており、今後の水洗選別作業により、さらに微細な遺物の抽出が期待できる。

本稿では、本年度出土した玉つくり関連遺物・遺構について考察し、南大原遺跡の玉つくりについて明らかになってきたことの一端を紹介する。

2　碧玉管玉つくりの工程

現在までに、南大原遺跡から出土した碧玉管玉つくり関連遺物（おもにSB110出土）を観察・検討すると、下に示す製作工程①～⑦がみえてくる。

【管玉の製作工程】（図１）

①工程―荒割段階[2)]：石材（原石）に打撃を加えて加工しやすい形（石核）にする。

②工程―施溝段階：石核を玉鋸（石鋸）[3)]で擦り、溝を付ける。

③工程―形割段階：溝に沿って、直線的に分割す

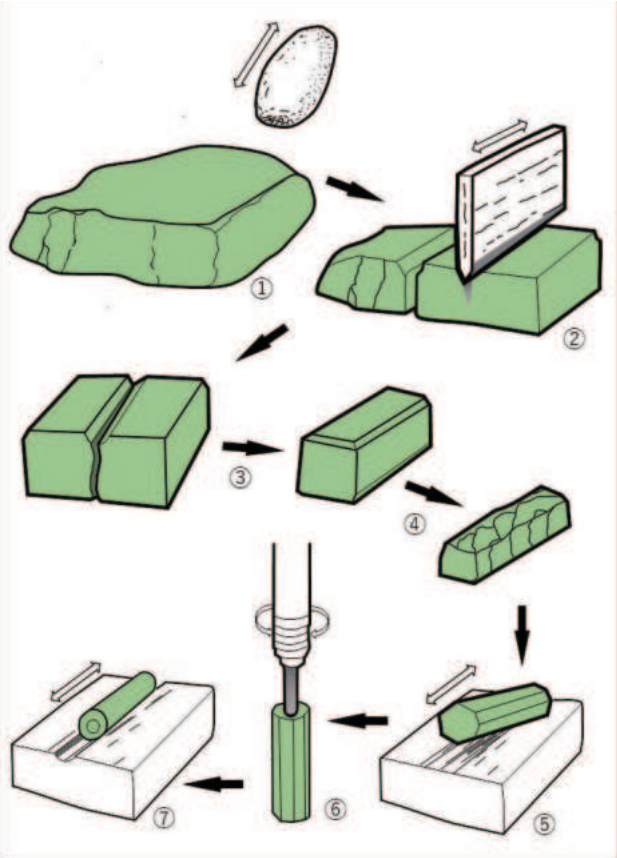


図１　碧玉管玉製作工程の一例
（大阪府立弥生文化博物館2019：22を一部改変、山田清朝作成）

図２　竪穴建物跡（SB110）の壁際に残された玉素材

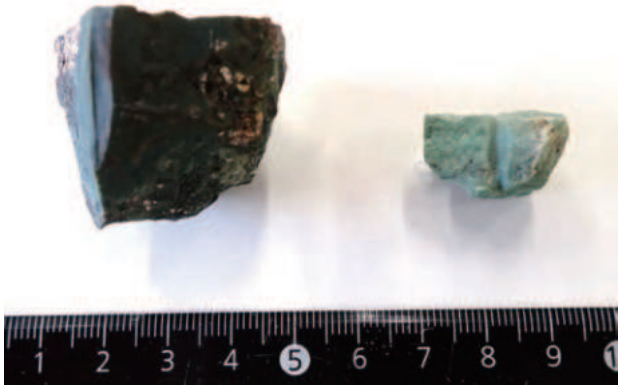


図４　施溝痕のある剝片：分割成功例（左）・失敗例（右）

図３　竪穴建物跡（SB110）の床面に残された鉄石英の残核

図５　四角柱状未成品（SB110壁際出土）

る（施溝分割技法）。玉鋸の刃の厚さの極限まで小さい四角柱状にしていく。

④工程―調整段階：微細な側面剝離や研磨を加えて形を整え、四角柱状を幅３㎜ほどの太さまで細くする。

⑤工程―研磨段階：砥石で磨いて、多角柱状にする。

⑥工程―穿孔段階：玉錐（石針）[4]で孔をあける。

⑦工程―仕上研磨段階：光沢が出るまで丸く磨いて管玉を完成する。

以上の碧玉管玉つくり工程について、特徴的な遺物を工程ごとにそれぞれ示し説明する。

①工程の石核は、粉砕された碧玉の破片群（図２）と赤味の鉄石英の残核がある（図３）。碧玉の破片群22片は、何種類かの青緑色の石材が混在し、中には研磨痕のある剝片、③工程の四角柱状未成品（図５）も含まれている。鉄石英の残核は５㎝大で、床面で約２ｍ離れた位置から２個出土し接合した。円礫の原石を半截したのち何度か剝離を施したが、その後放置されたものと思われる。

②工程の玉鋸による施溝痕が残る剝片には２種あり、施溝により分割が成功した例と、施溝途中で失敗し計画通り分割できなかった例である（図４）。玉つくりの初期段階、施溝分割を繰り返し管玉の形（柱状）に近づけていくが、途中で何らかの理由により製作を断念したものが遺物として残っている。写真右側の剝片は、図２の破片群下層のピット内からほかの剝片７片に混じってみつかっている。

図２の玉素材の破片群に、③工程の施溝分割された長さ15.5㎜の四角柱状未成品が混在していた（図５）。その３側面・２端面は研磨されているが、写真左側の分割面は研磨されていない。

図６　押圧剝離痕のある四角柱状未成品（SB110 P１出土）

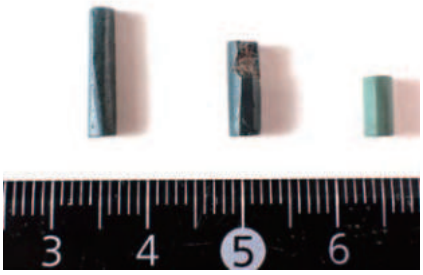


図７　多角柱状未成品（SB110出土　左より12角・11角・14角）

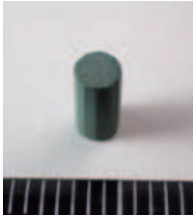


図８　14角柱状未成品（立位）

四角柱状を押圧剝離等により幅４～５㎜ほどの太さにした長さ19.5㎜の④工程の未成品もみつかっている（図６）。

⑤工程の研磨段階の未成品は３点あり、すべて竪穴建物跡（SB110）からの出土である（図７）。１点目は、床面直上から出土した長さ13.5㎜の12角の多角柱状未成品であり、端面施溝分割の痕跡も残る。ほか２点は中央土坑（P１）出土の長さ9.7㎜の11角柱状、貼床出土の長さ6.1㎜の14角柱状未成品であり、前者は長さ6.8㎜の部分に切断痕が残っており長さ6.0㎜前後の管玉を意識した個体とも考えられる。３点とも太さが3.0㎜前後となっており、3.0㎜未満の太さ規定も考えられる。また、14角柱状未成品はほぼ円柱状に研磨されており、穿孔直前の状態であろう（図８）。

⑥工程に関わる遺物に「穿孔欠損品」がある（図９）。ただ外形は四角柱状のままであり、工程手順からするとイレギュラーな未成品である。また長さ13.4㎜、幅6.7㎜、厚さ5.2㎜、孔径2.0㎜と、ほかの未成品に比べると大きい規格となる。その点

図９　穿孔欠損品（角玉、SB110出土）

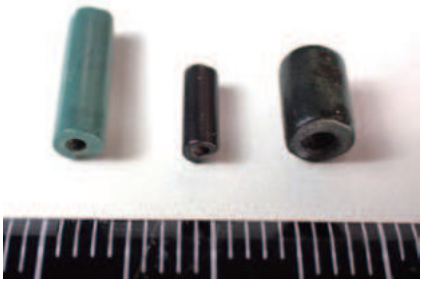


図10　極細管玉（左より SB113・SB103・SB110出土）

から、この種の未成品は「角玉」という管玉の特別品として報告されている（齋藤1979、田海2000）[5]。ただ本遺跡の資料に関しては、周辺遺跡（管玉消費地）での出土例がないことからも、管玉未成品と考えた方が良いのかもしれない。

管玉の完成品は、いまのところ３点にとどまる。未成品のほとんどが出土する SB110からも１点出土している（図10）。長さ6.0㎜、太さ4.0㎜、孔径：外径2.5㎜・内径1.5㎜、暗緑色、極細管玉としては1.0㎜ほど太い個体である。ほか２点は、太さ3.0㎜・2.0㎜と極細管玉の範疇にはいる（河村2024：46）。

３　玉つくりの道具

管玉の製作工程で使用される道具類についても、長野県内での出土例はほとんどない。管玉つくりでは、最初の工程からハンマー（敲石）、玉鋸、砥石（荒砥石・筋砥石・仕上砥石ほか）、玉錐等が使用される。そのほか、当板、鳴子形木製品[6]、製作台、弓錐、カバーストーン（押え石・弾車）も存在したと考えられる（河村2024：45）。

本遺跡から出土している玉つくりの道具類に

は、ハンマー、玉鋸、玉錐がある。

ハンマーは、ちょうど手のひらに収まる５～６㎝大の半截された円礫の先端に敲打痕がみられる。敲打面は幅２㎝と平坦で、荒割段階で使用されたものであろう。

玉鋸は石材が２種あり、１つは北陸西部で出土する四国や和歌山県地方で産出する紅簾石片岩、２つ目は上越市吹上遺跡ほか北陸東部（新潟県地方）で出土している流紋岩[7]である。

紅簾石片岩製の玉鋸は、SB110からの出土で中央土坑と埋土出土の個体が接合したものである。接合した長さは60.3㎜、幅平均13.3㎜、厚さ平均3.2㎜を測る。使用中に欠損して廃棄されたものであろうが、両端も欠損しており、本来の長さがどのくらいあったのかは不明である。刃部は1.3㎜ほどあるが、先端が尖り碧玉剝片の施溝痕の形と一致する（図４）。また、北陸西部出土のものは刃部に対して石材の片理（薄く板状に剝がれやすい性質）が平行になっているものがほとんどだが、本遺物は片理が斜めである。玉鋸の強度を増すためとも考えられる[8]が、明確ではない（図11）。

流紋岩製のものは、SB110とSK1720両遺構から出土している。未成品等の出土状況を考えると、流紋岩製の玉鋸は管玉・勾玉両方の製作に使用された可能性がある。

玉錐については、明確な３点すべてがSB110からの出土で、石英製の打製玉錐のみである。３点

図11　SB110出土玉鋸（上：流紋岩製　下：紅簾石片岩製）

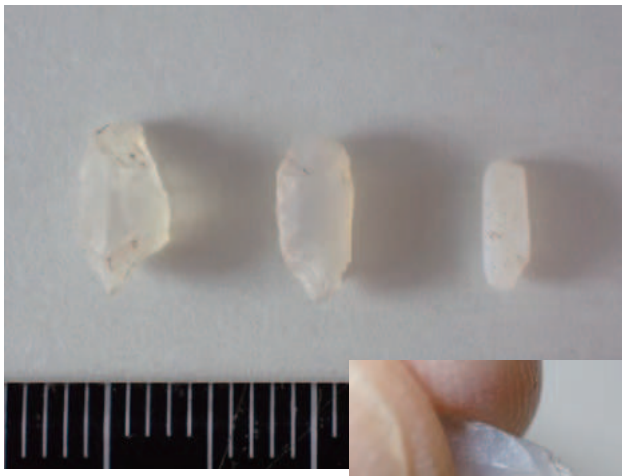


図12　打製玉錐（SB110出土）

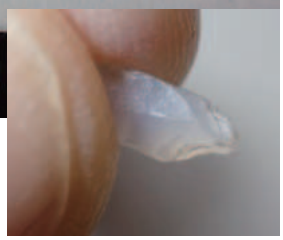


図13　刃部拡大（図12中央）

すべて、長さ8.1～6.5㎜、幅3.9～1.9㎜、先端部太さ1.1～1.5㎜の法量内に収まる大きさである。

図12中央、P17出土玉錐の先端部（刃部）（図13）は平均1.2㎜の太さがあり、本遺跡出土の管玉（図10）の孔径1.0～2.5㎜よりも太い場合があり、玉錐は未成品である可能性も考えられる。今後の水洗選別により、より細い玉錐および北陸地方の遺跡で出土している安山岩製磨製玉錐の出土の有無も確認しなければならない。

4　管玉と並行してつくられた勾玉

管玉工房跡と考えられる竪穴建物跡（SB110）

図14　残核（上段）・未成品（下段左３つ）・勾玉（下段右端）（SK1720出土）

図15　極小勾玉（SK1720出土）

から南へ約５ｍのところに大形土坑（SK1720）があり、その下層より多くの緑色岩の破片とともに、小型の勾玉とその未成品が出土した（図14）。石材はヒスイに類似するが、石材鑑定はこれからなので明確ではない。

敲打痕のある残核、施溝分割と研磨により成形・整形された段階ごとの剝片、そして最終的に長さ7.2㎜の極小に仕上げられた勾玉（図15）、すべて半玦状勾玉を目的とした工程品および完成品である。

弥生時代を通して、管玉と勾玉はセットであり、南大原遺跡の玉つくりにおいても、場所を変え、それぞれが製作されていた可能性がある。

5　玉つくりの場所

玉つくり工房と考えられる遺構に、竪穴建物跡SB110と大形土坑SK1720がある。それぞれ、管玉と勾玉に特化した緑色岩の多量な剝片・砕片の遺物出土状況がみられる。また、北東側約10mの位置に凝灰質頁岩の残核および多くの剝片・砕片類が床面上に散乱する竪穴建物跡SB104が位置し、剝片類の細長い形状から想像をたくましくすれば、管玉・勾玉つくりの際に用いた玉錐を製作していた工房ではないかとも考えられる。ただ、同石材の玉錐完成品がみつかっておらず、いまのところ想像の域を脱しない。今後の遺物洗浄、土壌水洗選別に期待し、朗報を待ちたい（図16）。

ところで、竪穴建物跡SB110であるが、径4.7mの円形プランで、南東～南西側に周溝をもち、東西方向に２主柱穴、その間に中央土坑Ｐ１（図17）が位置する。中央土坑の北側・南東側の床面が被熱しており、炉として機能していたと考えられる。地形的に南東方向に緩やかに傾斜し、南側は壁面がなく周溝もめぐっていない。２本柱のこの建物は全面に屋根が掛けられていたのではなく、南側は明かり取りとしてオープンになっていた可能性があるのではないかという指摘もある[9)]。そして中央土坑Ｐ１（図17）であるが、75×55㎝、深さ45㎝の大きさで、北側と南側の上端に３本の棒を渡した溝状の痕跡（棒は長さ70㎝、径８

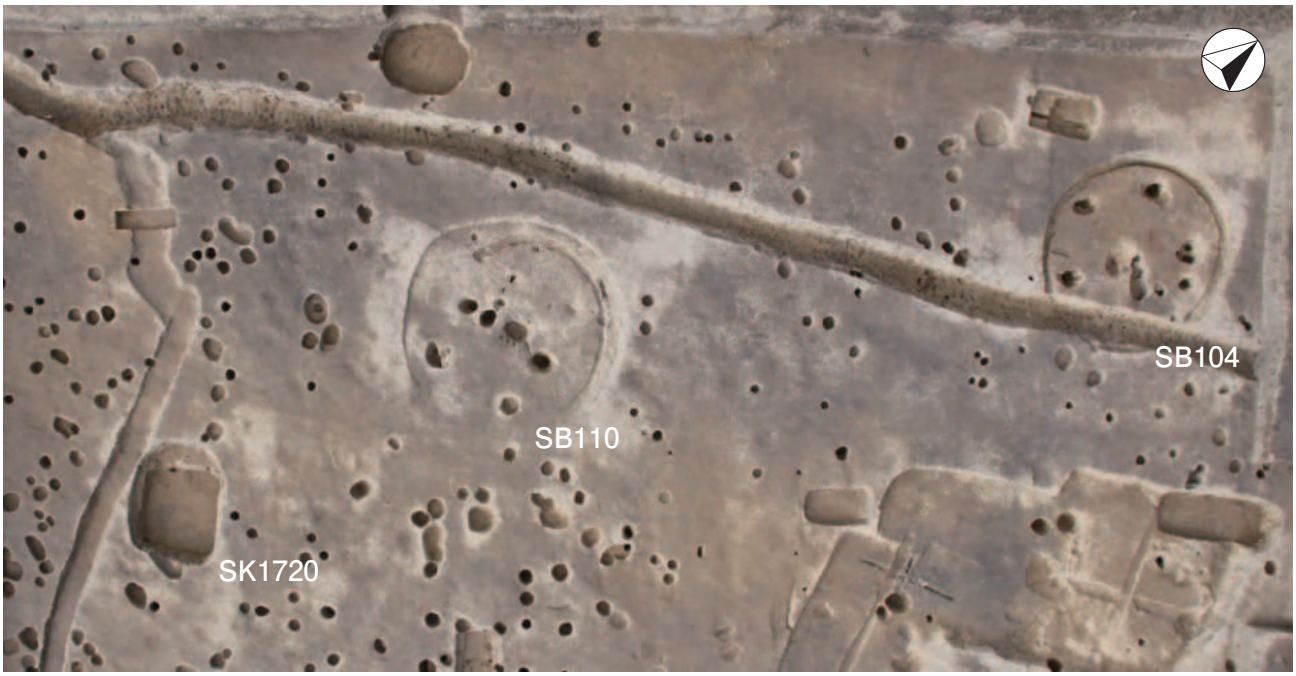


図16　調査区北西側の玉つくり関連遺構群（南東より）

図17　中央土坑Ｐ１（工作ピット）（南東より）

cm程度）があり、土坑を使用しないときには上部を板で閉塞していた可能性がある。内部からは多くの碧玉片、玉鋸、玉錐、土器片が出土している。玉つくりでは水が不可欠であり、東側から流れ込む細い溝、周囲の２つの炉とセットで玉つくりの工作が行われていのたであろう。

本年度の調査で、弥生時代の竪穴建物跡は５軒みつかり、３軒が２本柱（SB110ほか）、１軒が４本柱でも一方向に片寄っている（SB104）。中央土坑も３軒（SB104・110ほか）でみられる。さらに、これらの建物跡は共通して、土器・石器などの日用品の出土量が少ない傾向がある。この区域の建物は通常の居住のためではなく、モノつくりに特化した建物群であった可能性が高い。

竪穴建物跡（SB110）から南へ約５ｍのところに大形土坑（SK1720）がある。約2.2×1.9m、深さ約0.7m の隅丸方形の大形の土坑で、上面に硬化面を持ち楕円形に拡張された後、最終的には別土坑として焼土・炭化物を伴う土器等の廃棄坑として再利用された。下面にある玉つくり関連の土坑は、地山の黄褐色ブロックを多く含む黒褐色土が人為的に埋め戻され、その中に玉つくり関連遺物が廃棄された状態で混入していた。ここからは、ヒスイおよびヒスイに類似した青緑色岩の勾玉、勾玉未成品、剝片・砕片がまとまって出土し、流紋岩製玉鋸の破片も伴う。平坦な底面には施設はなく、機能的には工房跡というよりも廃棄坑的な役割の土坑であった可能性が高い。ただ、丁寧に隅丸方形に掘削された土坑の様子は、単なる廃棄坑ではなく勾玉つくりに関連する「モノおくり」的な儀礼の場の意味合いを感じさせる。同様な形状の土坑が調査区中央にもう１基存在する。

そのほか周辺の大形土坑には、多量の焼成粘土塊が入っていたり、焼土・炭化物がレンズ状に堆積したり、貯蔵穴の可能性が高い垂直の壁面を持つものがある。今後、玉つくりとの関連も考えていかなければならない[10)]。

6　北陸地方の玉つくりとの関係

千曲川中流域の北信地方は、弥生時代中期後半、栗林式土器文化圏の中心地であり、長野市榎田遺跡由来の緑色岩製磨製石斧が多く分布する地域でもある。この石斧は、ブランド品として北陸地方、そして遠くは関東・東海地方まで流通した。この石斧に伴い、彼の地には北信地方の栗林式土器が搬入され類似する土器もつくられた（久田1999）。

北陸西部の石川県小松市八日市地方遺跡をはじめとする本格的な玉つくり遺跡でも、榎田型磨製石斧、栗林式土器が出土している。一方北陸地方からは、ブランド品としての極細管玉がもたらされ、それに伴い栗林式土器と交換するかのように信濃へは彼の地の小松式土器が入ってきたと考えられる。しかし今のところ、北信では長野市檀田遺跡、飯山市小泉遺跡、上高井郡高山村湯倉洞窟、中信では大町市中城原遺跡で確認されている

図18　小松式土器 壺口縁部破片（SB110出土）

のみである。そのうち、中城原遺跡では碧玉の原石が、小泉遺跡では未報告ではあるが施溝痕のある碧玉片が数点出土している[11)]。本遺跡の玉つくり工房跡と考えられる竪穴建物跡SB110からも、新しい段階の小松式土器の壺形土器口縁部破片が出土している。口縁部内面の羽状刺突文が特徴である（図18）。

小松式土器が玉つくり関連遺物とともに遺跡から出土することは、越後・佐渡では日常的な状況である。弥生時代中期後半、越後（・佐渡）を通り信越の山を越えて、極細管玉は多くの信濃の遺跡にもたらされたと考えられる。しかし、玉つくりの技術も同時に伝わった遺跡は限られていたのであろう。

南大原遺跡の今回の調査区からは、北陸ブランドの極細管玉、紅簾石片岩製玉鋸、石英製打製玉錐が出土し、越後・佐渡を飛び越えて北陸西部（越前・加賀・能登・越中）地域と直接結びついていたとも感じられる。ただ北陸地方の遺跡全般と比較すると、玉つくり関連遺物、特に碧玉・ヒスイの原石、石核、剝片という素材となる遺物の出土量が少ない。今回の調査区の周囲を調査してみないと遺跡本来の性格はわからないが、いま現在の状況では一貫して玉つくりが行われていた様子は捉えられるが、北陸地方の遺跡のように量産体制に入っている状態とはいえない[12)]。

7　まとめ

弥生時代の玉つくりは、一部、備中・近畿北部・尾張地域におよぶが、ほとんどが碧玉・ヒスイの原産地を抱える出雲から北陸東部（佐渡・越後）の日本海沿岸地域に集中する[13)]。さらに中心地域では、日本海の海岸線から20km以上離れた内陸には、玉つくり遺跡は存在しなかった。今回、信越の山を越えた内陸の南大原遺跡で管玉・勾玉つくりの実態が明らかとなってきた。旧千曲川で対峙する位置にある栗林遺跡では、戦前の調査で施溝分割痕が残る板状の碧玉片が発見されている（神田1935）。玉つくりの技術は、南大原遺跡のみに限らず北信地方のいくつかの遺跡にもたらされていたのであろう。ただ現在までに、遺構とともに明確に語られることはなかった。今後、周辺地域の調査が進められれば、玉つくりの遺跡が増加する可能性もある。

玉つくりのなかでも、管玉はシステマティックに行われる。南大原遺跡の管玉つくりがどこの地域からどのように伝わりどんな技法でつくられていたのか詳細を明らかにしていきたい。また、管玉と勾玉は同じ石ではつくられないといわれ、そして、勾玉は地元の石を使って独自につくられたともいわれる。この遺跡での管玉と勾玉の関係性についても確認する必要がありそうだ。

ところで、以前の県道三水中野線の調査では、鉄器加工の工房跡がみつかっている。今回調査の竪穴建物跡SB104の石器（玉錐？）工房も考慮に入れると、南大原遺跡がモノつくりに特化したムラだった可能性を提起したい。千曲川が目の前を流れる、つくられたモノを運ぶには最適の場所である。下流７kmには、青銅器が出土した柳沢遺跡があり、次なるモノつくりの痕跡が来年度以降の調査で発見される可能性も期待される。弥生時代中期後半栗林式期の時間幅のなかで、これらのモノつくりの営みがどのように展開していったのか詳細に分析する必要がある。

南大原遺跡の調査範囲は、来年度以降膨大に広がっていく。越後へと流れ下る千曲川のほとりに営まれたモノつくりの拠点的集落の全貌が明らかにされるかもしれない。そして、千曲川流域に栄えた弥生のクニの姿が見えてくる日も近い。

註

1）地質学、岩石学的には、「緑色凝灰岩」等の名称が与えられ、管玉玉材の石材鑑定結果は多様である。ここでは管玉に用いる青味の玉材を一括して「碧玉」とよぶことにする（河村2024：57）。

2）石核調整段階ともいえる段階で、平坦面を作出することが主目的であり、場合によってはハンマーによる打撃以外に施溝分割、研磨が行われることもある（冨山1988：57）。

3）「擦切り具は従来「石鋸（せっきょ）」と称されてきたが、九州地方の縄文時代後期からみられる「石鋸（いしのこ）」との混乱を避けるため、玉つくりに限定して使

用される擦切り具という意味で「玉鋸（たまのこ）」と呼ぶこととする。」（冨山1988：55、一部表現改変）

4）弥生玉穿孔に使う専用棒状錐は、「玉錐」を採用する（中司1986・冨山1988）。「石針」は穿孔具であることが判明する前の呼称であり、錐を「針」と表現し続けることは適切ではない（河村2024：57）。

5）「角玉は円筒形の管玉の中に、遺跡で100点に１点ぐらいの割合で含まれる。」（2024年11月21日、河村好光氏よりご教示）。

6）富山県江上Ａ遺跡から出土している鳴子形木製品は、白い粘土が付着しており、勾玉や管玉を穿孔する際の固定具と考えられている（富山県埋蔵文化財センター2024：12）。

7）当初は石英粗面岩とよんでいたが、現在は一般的に流紋岩とよばれている。長岡市大武遺跡、佐渡市平田遺跡の玉鋸は、流紋岩製のものが多くを占める。

8）2024年11月26日、大阪府立弥生文化博物館禰冝田佳男館長の南大原遺跡での現地指導にて。

9）2024年11月12日、新潟県立歴史博物館宮尾亨氏の現地見学にて。

10）焼成粘土塊、焼土・炭化物は、石材の加熱処理との関連も考えられる。石材の加熱処理については、ヒスイ、メノウ等で研究が進められている（御堂島2023，荒川ほか2024）。長野県埋蔵文化財センターで現在報告書作成中の長野市塩崎遺跡群のヒスイ加工工房跡でも被熱痕を持つヒスイ石核が確認されている。

11）2024年11月15日、長野県文化振興課馬場伸一郎氏より教示。

12）前掲註８

13）福井県羽咋市吉崎・次場遺跡の北側には邑知潟に由来する邑知地溝帯があり、それより北側の能登半島には玉つくりの技術は伝わらなかった。文物の流れは、邑知地溝帯を通り、直接上越の地（北陸東部）にもたらされた可能性が高い（町田賢一氏教示）。

引用・参考文献

荒川隆史・加藤学・小池悠介・長田友也2024「ヒスイ製品の加熱処理」『月間考古学ジャーナル』No.804：15-20

大阪府立弥生文化博物館2019『北陸の弥生世界わざとこころ』令和元年度秋季特別展［大阪府立弥生文化博物館図録68］

河村好光2024「弥生時代における玉の生産流通と保有―大陸化と地域性―」『日本考古学』第59号：41-61

神田五六1935「信濃栗林の彌生式石器」『考古学』６-10：457-465

齊藤基生1979『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第19

坂上有紀2014『一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ　大武遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第249集

田海義正2000『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第98集

冨山正明1988『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡―県営竹田川右岸地区土地改良事業に伴う調査―』福井県埋蔵文化財調査報告　第14集

富山県埋蔵文化財センター2024『と・ＹＡＭＡＴＡＩ国 弥生時代の富山へタイムスリップ』令和６年度 特別展図録

中司照世1986『吉河遺跡発掘調査概報』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

中間研志1987松菊里型住居―我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究―」『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』岡崎敬先生退官記念事業会、同朋舎出版

丹羽　博1986「朝日遺跡の玉作」『年報 昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター：105-113

馬場伸一郎2006「吹上遺跡の玉作りについて」『吹上遺跡主要地方道上越新井線関係発掘調査報告書Ⅰ』上越市教育委員会：75-121

久田正弘1999「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌』92号：19-30

御堂島正2023『石器の実験痕跡研究と加熱処理』同成社

（３）川崎市高津区下作延遺跡出土の弥生土器について

―『日本先史土器図譜』第Ⅴ輯46・48-１の再発見―

坂本　彰・宮田　毅

はじめに

長野県埋蔵文化財センターは、2022年度から信州大学医学部所蔵の考古資料を整理している。2024年８月、所用で同センターを訪れた元職員の百瀬長秀さんが、資料の中に『日本先史土器図譜』第Ⅴ輯（以下『図譜』と略す。）No.46（山内1940）の弥生壺があることに気付いた。以前、坂本がこの土器の存否確認の問合せをしており、そのことが記憶に残っていたという。同センター調査部長の川崎　保さんと共に、同壺が当該資料であることを確認し、８月31日付け書簡で坂本に連絡をしてくれた。

筆者らは、南関東弥生後期の朝光寺原式土器について、2021年から関係資料の再検討を行ってきた（坂本・宮田2021、2022a、2022b、2024、2025）。下作延遺跡出土の写真１は最も初期の報告例（山内1940）であるが、研究史の中ではほとんど論及されることがなかった。これまで実物の所在は不明であったが、公表後80余年を経て、ようやく姿を現したことになる。

2024年９月19日、百瀬さんの案内で長野県埋蔵文化財センターへ赴くと、壺（46）と小型甕（48-１）が揃って机の上に出されていた。両個体の胴部には、朱文字で「神奈川県　帝国臓器東方」と記されており（写真５・６）、まぎれもなく下作延の出土土器であると確認できた。

同センターと信州大学医学部のご理解とご高配により、直ちに写真撮影・実測を行い、『長野県埋蔵文化財センター 年報』において報告する方向で進めることとなった。10月29日、宮田はそのための補充調査を行った。

下作延遺跡は、すでに『図譜』や藤沢の報告（藤沢1941）があるにもかかわらず、本資料の出土地は川崎市遺跡台帳・遺跡地図（川崎市2012）

写真１　『日本先史土器図諸』第Ⅴ集掲載46・47・48-１（山内　1967　再版より転載）

には未登載である[1)]。そのためか、周辺遺跡の調査報告書にも未記載である（渡辺2008、大坪・碓井ほか2011）。小文では、資料の存在が確認されたことにより、遺跡名として「下作延遺跡」の名称を用いた。

なお、小文の作成にあたっては、はじめに・1～3・おわりに、を坂本が、4を宮田が分担執筆した。写真撮影・実測・拓影及び図版作成を宮田が行い、デジタルトレースは宮田裕紀枝があたった。

1　藤沢宗平の略歴（図1、写真2・3）

下作延の弥生土器を発掘した藤沢宗平は、1914年、長野県松本市郊外の島立村に生まれた（以下、樋口1976による）。考古学への興味は、母 泉の歴史好きと泉の弟にあたる小岩井　浄（社会主義運動に入った弁護士）の影響が大きい（上条1974）。島立小学校を経て、県立松本中学校を卒業した。上京して中野本町の祖母宅に住み、東京大学人類学教室の山内清男の知遇を得た。この頃、闘病生活を送っていたが、1935年高橋健自の『考古学』を読み、考古学への道を決めたという（藤沢1989）。

同年に早稲田大学第一高等学院へ入学し（写真3）、世田谷区松原に引っ越した。菊池義次、西村正衛らと知り合い、遺物収集や小発掘を繰り返した。当時知られていた加曽利貝塚や矢上貝塚で土器を発掘し、小豆沢遺跡には山内の指導の下で調査に参加した。

下作延で土器を掘り出したのは、考古学を始めて3年目の1938年（昭和13年）7月で、23歳の時であった。2ヵ月後の9月18・19日には、山内清

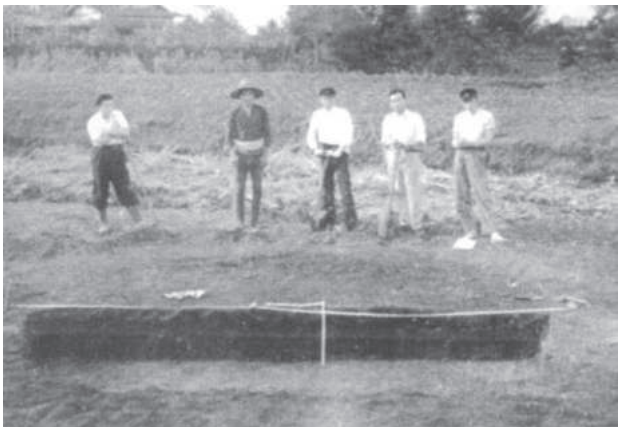


写真2　久が原遺跡発掘調査風景（1938年9月）
左から山内清男、和島誠一、菊池義次、藤沢宗平、鎌木義昌
（大田区立郷土博物館2017　原図を転載）

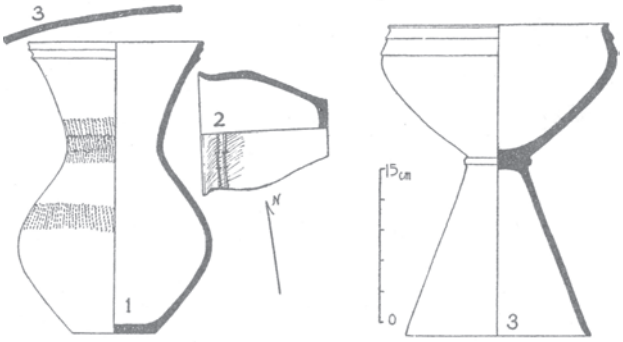


図1　下作延遺跡出土の弥生土器
（藤沢1941　原図を転載）

写真3　早稲田大学第一高等学院時代の藤澤宗平　―昭和11年 史学部送別会　12年1月16日　於稲門堂（藤澤裕子氏提供）―

男・和島誠一・菊池義次・鎌木義昌と共に、大田区久ヶ原遺跡Ｓ１号竪穴住居址（弥生後期）の発掘に参加している（大田区立郷土博物館2017、写真２）。

この頃が遺跡調査や考古学者との会合が盛んな時期で、1939年（昭和14年）に早稲田大学文学部史学科へ入ると、フィールド調査は少なくなった。1941年に同科を卒業し、42年に国府台高女、43年に帝国第一高女で教鞭をとった。1945年３月の東京大空襲後、４月には故郷島立の実家に疎開した。おそらくこの時に、学生時代の採集遺物を持ち帰ったのであろう。その後手元で保管していたが、家族や他人には知られていない。

アジア太平洋戦争後の1946年、木曽中学校教諭となって考古学活動を開始し、大場磐雄の平出遺跡の発掘調査に参加した。1950年に松本深志高校教諭となり、松本盆地の弥生文化を研究した。1952年豊科高校へ転勤し、『信濃史料』考古篇の編さんに関わった。

1954年には一年間内地留学生となり、東京大学人類学教室と國學院大學大場研究室へ通った。翌年には松本深志高校へ戻り、併せて、信州大学医学部非常勤講師に任じられた。当時信州大学医学部には鈴木　誠（人類学者）がいて、野尻湖や栃原岩陰遺跡などの調査を進めていた（高橋2024）。藤沢が、加曽利貝塚や下作延の土器を信州大学に置いたのはこの時の縁によるものであろう。

1958年からは神子柴遺跡を発掘調査して大きな反響を呼ぶかたわら、信濃史学会理事、長野県考古学会役員を務めた。また、松本市を中心とする中信考古学会を主催し、考古学の普及に尽力した。藤森栄一・宮坂英弐と並び、戦後長野考古学会のパイオニアで、その教えを受けた考古学研究者は数多い。

松本深志高校の教え子である百瀬長秀さんは、「先生は清廉潔白で、遺物は私物化しない主義です。」と語っている。手持ち資料を信州大学医学部に寄贈したのは、まさにその表れであろう。加曽利貝塚や下作延の土器には石膏が入れられ、きれいに削り落として整形されている。克明な調査記録を残している点からも、藤沢の几帳面な性格が窺え、考古学に対するひたむきな情熱が伝わってくる。

1974年（昭和49年）３月、享年59歳をもって食道癌のため逝去した。墓碑には「道」と刻まれている。

２　弥生土器の出土状況と報告（写真１、図１）

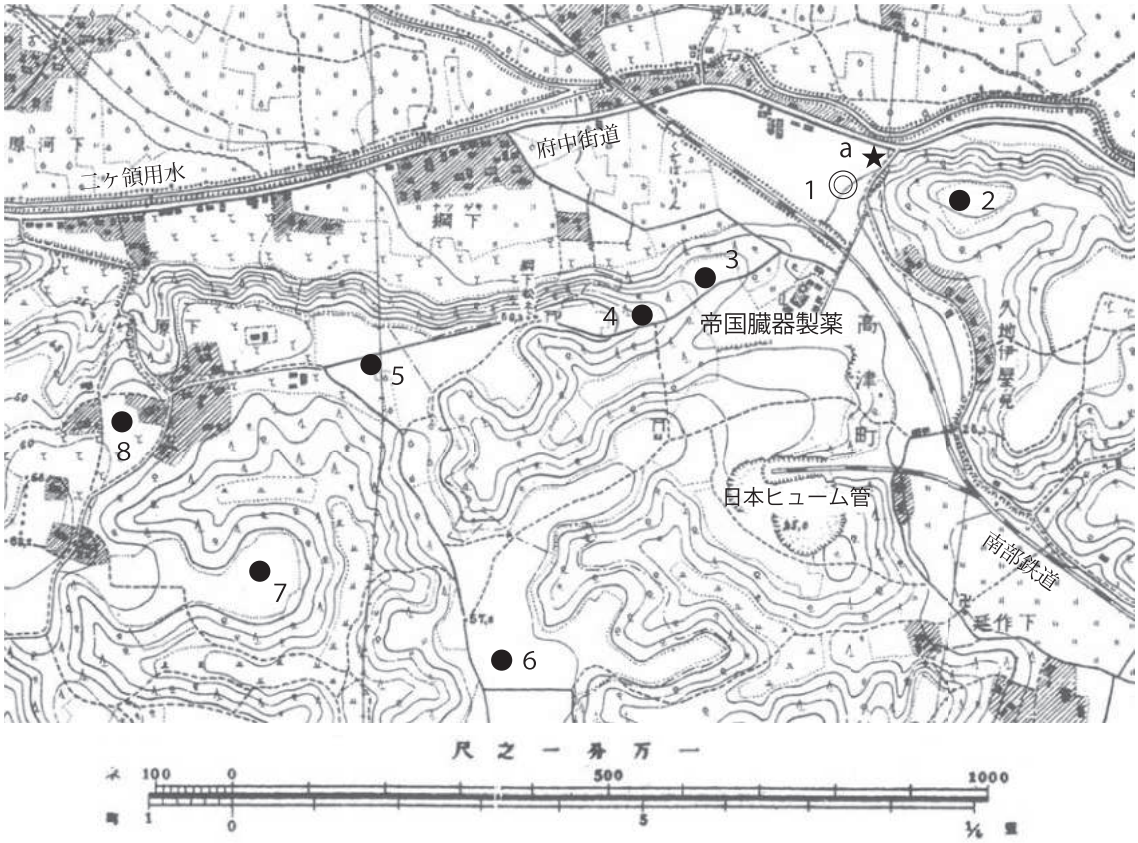
川崎市北西部にある溝ノ口は、多摩川の南岸（右岸）に位置し、近世大山街道の宿場町として栄えた。町の西方には東西に細長い津田山丘陵が横たわり、その北裾を八王子道（府中街道）が走り、多摩川との間に久地梅林が広がっていた。昭和初期には、町の南端まで玉川電車（現田園都市線）が乗り入れ、津田山南裾に南部鉄道（現 JR 南武線）が開通していた（鈴木2004）。

1938年３月15日、藤沢は溝ノ口駅から小田急線登戸駅へ向かい、津田山西裾（久地梅林駅東方約250m）の地点で、縄文土器（主に諸磯式）や石器を採集した。採集地は府中街道と南武鉄道との間、土取りで平らにならされた「帝国臓器高津分工場敷地」[2)] である。

７月15日、ボーリング棒を持参して同地を訪れ、偶然ボーリング棒に当たった土器３点を発掘した。上に高杯破片（３）が小範囲に広がり、その下に口縁北向きの壺（１）が横たわり、壺の東側に小型甕（２）が口縁を壺に向けて置かれていた。藤沢は土器実測図に出土状態を模式図化して残している（第１図）。壺の中身は黒土のみであり、土器の周囲に遺構の存在を示す変化は見られなかった。

７月18日、遺構の存否を確かめるべく調査したが、疑問は解消されなかった。前記のとおり、この２ヵ月後に久ヶ原遺跡の調査に参加し、弥生時代の竪穴住居址に関する知見を深めている。そして翌1939年にかけて、土器の復元を行った。

1940年１月、指導を受けている山内清男が、『日本先史土器図譜』第Ⅴ輯で、３点の土器写真を公開した。その解説において「46，47，及47



1：下作延　2：北の谷　3：伊屋之免第２地点　4：伊屋之免第１地点　5：緑ヶ岡霊園内第２地点
6：緑ヶ岡霊園内第５・６地点　　7：東高根　　8：下原
a：帝国臓器製薬株式會社・日本ヒューム管株式會社案内板

図２　下作延遺跡と周辺の弥生時代遺跡（東京１万分の１地形図集成　登戸、1937年測図）

写真４　下作延遺跡の現状（2021年５月、坂本撮影）

（左）帝国臓器高津分工場（後の帝国臓器製薬）敷地跡南端から出土地点を見る。中央坂道上部の左側、高層マンション付近が下作延遺跡。

（右）同 敷地跡北端（図２－ａ）交差点から出土地点を見る。跡地西側を区切る中央小道の左側、高層マンション付近が下作延遺跡。「帝国臓器製薬株式會社」と「日本ヒューム管株式會社」の案内立看板が交差点に残っていた。

（48の誤り：筆者註）の１）の土器三個は一緒に出たものであって、各例共特有の性状を持ち、所謂久ケ原式と一致しない。明に一型式を示すものである。その年代は弥生式後半に当たるであろう。詳細は藤沢君によって報告されることと思う。２）は最近杉原君によって上野国方面の弥生式の一型式（樽式）に比定されて居る（橘樹郡宮前村野川ヤカマス台出土土器：筆者補）。」と述べ、久ヶ原式とは異なる弥生後期の一型式と位置付けた。

1940年２月29日、藤沢は菊池義次と共に下作延の試掘を行い、弥生土器は深さ70㎝までの黒色土中に包含されており、遺構は構築されていなかったと結論した。

以上の調査結果は、「縄文式遺跡内に発見された三個の弥生式土器」と題して報告された（藤沢1941）。山内の教示に基づき、土器の時期は「弥生式末期」と位置付けた。その後、藤沢はまったく本資料についてふれていない。

以上のように、下作延では完形土器３点がセットを成していたが、竪穴住居址や土壙内ではなかった。これに疑問を感じた藤沢は再三調査を行ったが、「縄文式遺跡」と結論せざるをえなかった。この出土状態については、再検討する必要があると思われる。

３　下作延遺跡と周辺の弥生遺跡

（図２、写真４）

下作延遺跡は、川崎市高津区下作延５丁目28番地に所在する。多摩川下流南岸（右岸）の沖積地は、多摩丘陵北縁の急崖によって区切られている。東西に長く延びる北縁急崖が、多摩川沖積地に最も突出した部分が標高約50ｍの津田山である。津田山は南側を平瀬川から入り込む下作延支谷に区切られ、独立丘陵状を呈する。その北西端は低位台地によって西方の丘陵と繋がっていた。遺跡は津田山北西端の丘陵裾部、低位丘陵の部分に相当する。

藤沢が調査した前年（1937年）測図（図２）を見ると、南武鉄道が低位台地を切り割り、南北に小崖が形成されている。この低位台地は府中街道とほぼ同じ高さで、東側の小道より約２ｍ低く、西方の沖積地より約２ｍ高い。土器出土地は南北小道の屈曲部西側付近と報告されているので（藤沢1941）、造成以前は津田山裾の斜面末端部と分かる。位置は、久地梅林駅（現久地駅）東方約250ｍ付近、帝国臓器高津分工場（後の帝国臓器製薬）の敷地は南西を底辺とする二等辺三角形を呈していた。

現在遺跡周辺は、津田山斜面と北を流れる二ヶ領用水を除いて宅地化し、大きく様変わりした。遺跡地には高層マンションがそびえ、JR南武線との間には、溝ノ口と府中街道を結ぶ道路が走っている。敷地の北端、府中街道久地消防署脇交差点の南側に、2021年５月までは「帝国臓器製薬株式會社・日本ヒューム管株式會社」と並記した案内看板が残っていた（写真４）。これは土器出土地を明示する有力資料であったが、2024年10月にはすでに撤去されて存在しなかった。

本遺跡（図２－１）周辺の関連遺跡は次のとおりである。

北の谷遺跡（図２－２）は、津田山の北端頂部にあり、縄文前期諸磯ｂ式期の住居址１軒、土壙27基が発見された。下作延遺跡とほぼ同時期で、両者の関わりが想定される（岩崎・川名1982）。

久地伊屋之免遺跡第２地点（図２－３）は、遺跡西方の丘陵下位にあり、弥生後期朝光寺原期住居址６軒・方形周溝墓３基から成る集落址である。朝光寺原式は、波状文と無文の土器が主で、東京湾岸系土器も多く、吉ヶ谷式土器も若干ある（渡辺2008）。

久地伊屋之免遺跡第１地点（図２－４）は、同第２地点の西方にあり、丘陵上位に位置する。古墳時代前期の方形周溝墓３基と、主体部に割竹形木棺を有する久地伊屋之免古墳（円墳）１基が発見された。供献された突帯付壺は、東国の弥生後期～古墳後期に類例があるものの、南武蔵では稀有な存在といえよう（持田・村田1987）。

緑ヶ丘霊園内遺跡第２地点（図２－５）は、伊

屋之免遺跡第１地点の西方に位置する。Ｖ字溝を伴う弥生中期後半を主体とする集落址で、後期住居址からは簾状文・波状文をもつ朝光寺原式土器が伴出している。21号住居址出土の頸部に簾状文を巡らす甕は、下作延遺跡出土の甕（図３－２）に近似している（滝沢・小池・細井1995）。

緑ヶ丘霊園内遺跡第５地点（図２－６）は、同第２地点の南方にあり、丘陵中央部に位置する。弥生後期の大型住居址が発見されており、東京湾岸系の無文壺や朝光寺原式系無文甕が出土している（大坪・碓井ほか2011）。

東高根遺跡（図２－７）は、緑ヶ丘霊園と谷を隔てた西側の丘陵上にある。弥生～古墳時代の竪穴住居址77軒と溝が確認され、本地域最大級の集落になるとみられる。弥生後期では、東京湾岸系が主体で、朝光寺原式土器が若干伴出する。現在、斜面のシラカシ林と共に県立東高根森林公園となっている（小薬2017）。

下原遺跡（図２－８）は、緑ヶ丘霊園内遺跡第２地点と小谷を隔てた西側に位置する。縄文晩期の墓地を伴う集落址が主体で、弥生後期～古墳時代前期の住居址６軒も存在する。遺物は少なく、東京湾岸系土器が主体である（浜田2000）。

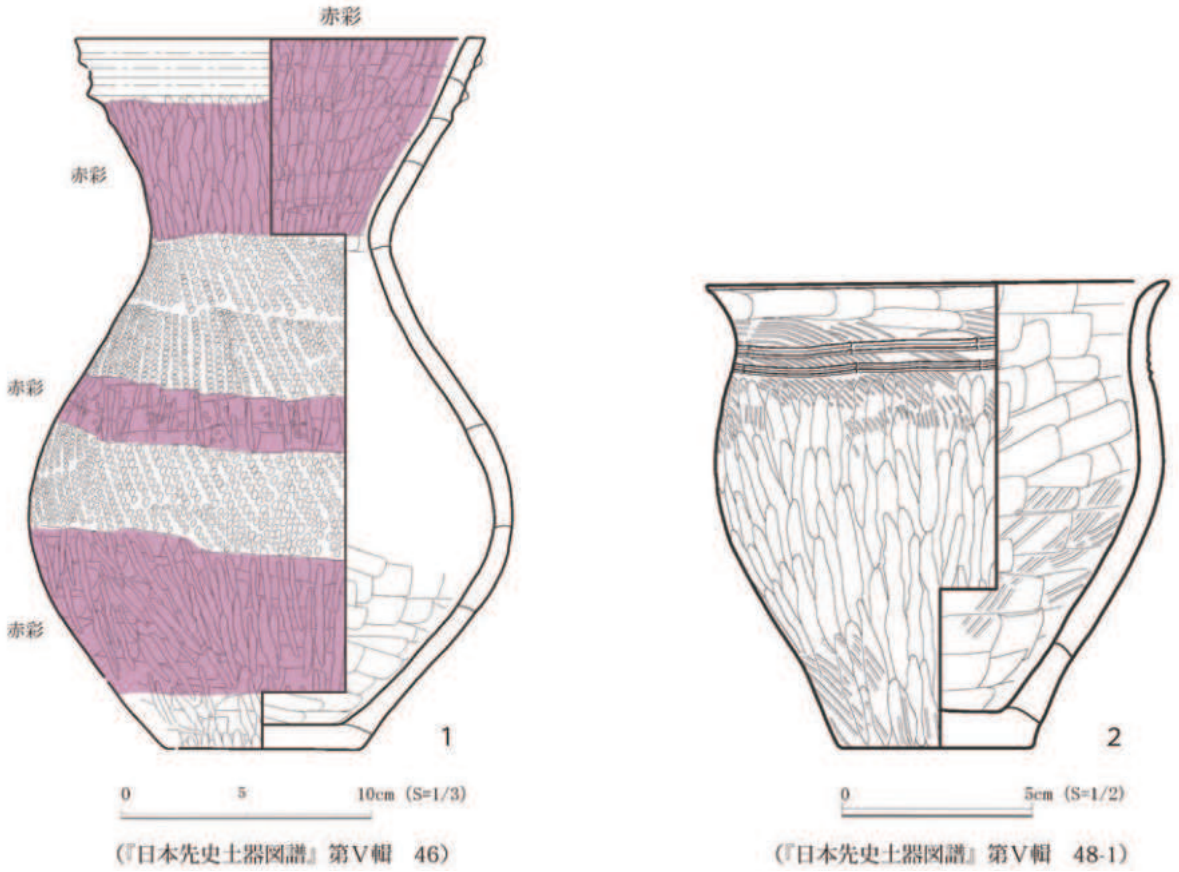
４　下作延遺跡出土土器

（１）壺形土器（図３－１・４－１、写真５）

『日本先史土器図譜』第Ｖ輯（以下『図譜』と略す）46の壺形土器である（山内1940）。

口縁部の 3/5 と、頸部・胴部及び底部下端の一部を欠損する。器高は28.0～28.3cmを有し、やや大型の壺となる。胴部は膨らみをもち、「く」の字状に窄まった頸部から逆「ハ」の字状に開いて口唇に至る。口辺部はわずかに内湾を示す。頸部径は9.5cm、口径は（16.7）cmを有する。胴部中位に最大径があり19.7cmを測る。底径は7.7cmであるが、最大径が器高の下位（1/3）にあるため重心が低く安定感がある。器肉はやや厚く0.8cmを有する。口縁部の欠損は、割れ口からして、内側から外に向けて打ち欠いたように見える。

焼成はやや不良で、口縁部の風化が目立ち軟質



（『日本先史土器図譜』第Ｖ輯　46）　（『日本先史土器図譜』第Ｖ輯　48-1）

図３　下作延遺跡出土土器実測図

化している。胎土には、粒長１㎜前後の長石・チャート・片岩粒など微砂を多量に含み、大粒（粒長1.2～４㎜）のものも多く混在している。色調は、おおむね黄橙色を呈する。黄褐色を呈する箇所もある。また、胴部の片面には大きな黒斑をとどめている。

胴部外面には、「神奈川県／帝国臓器東方」と出土地の朱書きが存在する（写真５）。

口唇部はヘラナデにより平坦に仕上げられている。口縁部は無文であるが、特徴的な隆帯（突帯）文が２条巡っている。断面が三角形を呈するものである。同形態（吉ヶ谷式）の壺に関して、従来の研究では積み上げ粘土の下端を突出させて隆帯を形成したものと見られていたが、本例に関しては、粘土紐を貼り付けて形を整えたと考えられる。断面を観察すると、器体部を成す胎土と隆帯部の胎土では、混入する砂粒の大きさと量に相異があり、使用粘土に相異が認められるためであ

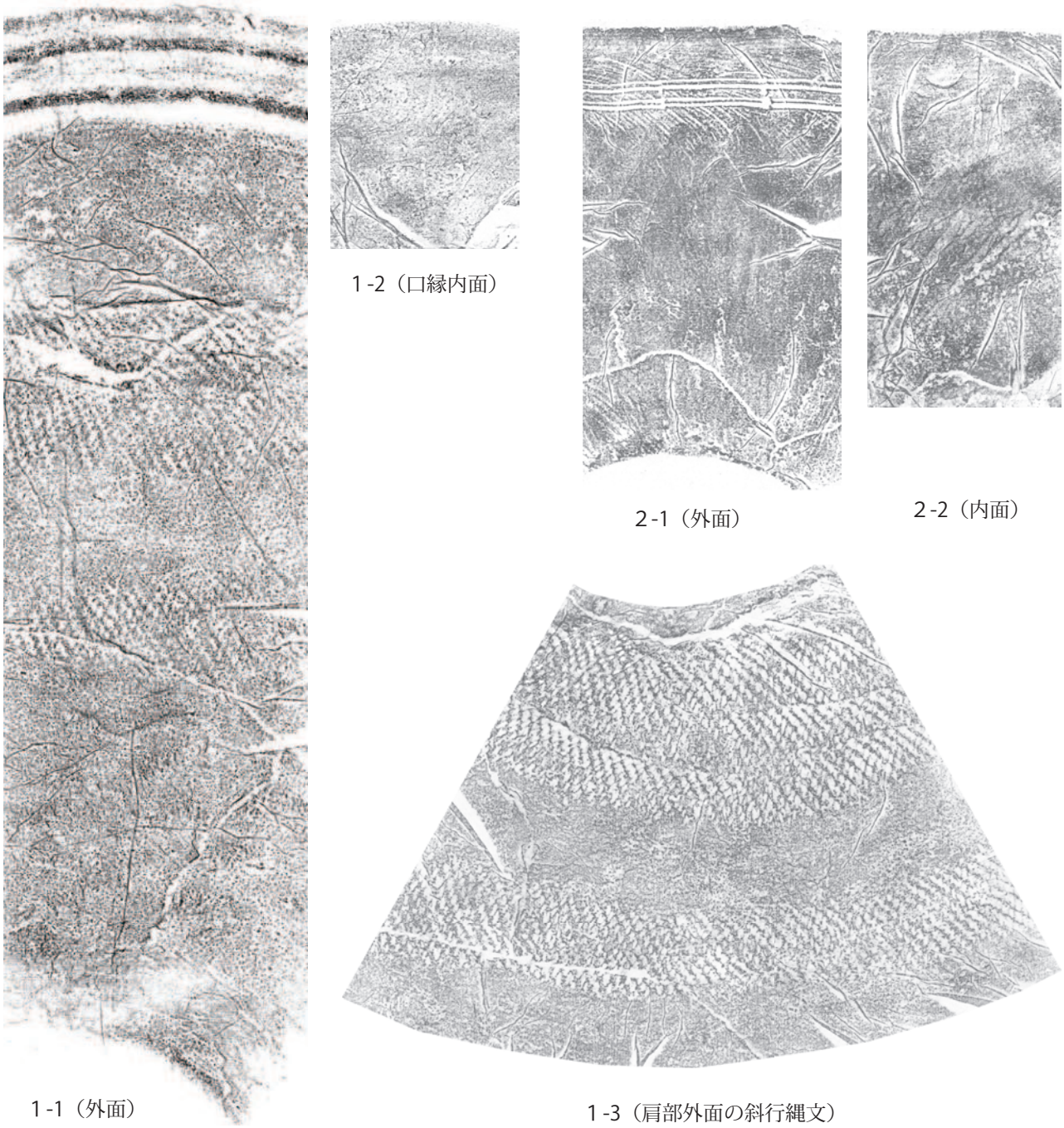


図４　神奈川県川崎市下作延遺跡出土土器拓影図（Ｓ＝1/3）―信州大学医学部資料室蔵―

46 (1)　（『日本先史土器図譜』第Ⅴ輯掲載　46）

神奈川県
帝国臓器東方（朱書き）

46 (2)　胴底部に朱書きされた出土地銘

写真５　神奈川県高津区下作延遺跡出土土器（１）―信州大学医学部資料室蔵―

る（写真５）。

頸部と胴部上位に、２帯の横位斜行縄文（RL）帯が巡っている（前者を帯縄文１、後者を帯縄文２とする）。帯縄文１には、縄文原体端末の回転圧痕が認められ、３段の施文過程を看取できる（図４-１～３）。徐々に右下がりとなっている。縄文は、吉ヶ谷式土器に一般的な太目の節である。また、隆帯文直下から頸部屈曲部の間、及び帯縄文１と帯縄文２の間、底部を無文帯としている。これらの無文帯には、赤彩を施している。ただし、口縁部外面（隆帯文施文部）については表面に風化と摩耗があり、赤彩の有無について明確に確認することはできなかった。内面については、口縁部に赤彩の残存が認める。

隆帯文以下の無文帯に関しては、ほぼ全面に斜行縄文（RL）を施した後、ヘラナデとミガキで帯状に磨り消すことで無文帯を作出している。しかし、完全に縄文を消しきれず、条の一部や節の痕跡が所々に認められる。

内面は、横方向のヘラナデを施し、その後にミガキで仕上げている。

本例は、最大径が中位よりやや下にあるが胴部の張りが強く、弥生中期的な様相を残している。２帯の縄文帯や器形の様相などからして、柿沼編年（柿沼2016）の吉ヶ谷式Ⅱ式の範疇に比定しておきたい。

本例のように、口縁部に太目のしっかりした隆帯文（突帯）を有し、頸・胴部に２帯の縄文横帯文をする壺形土器は、埼玉県坂戸市鶴ヶ丘遺跡２号住や東京都調布市染地遺跡SI18住に見られる。本例よりやや小ぶりであり、隆帯に刻目文を加飾する点で相異がある。他に、隆帯文を有する壺は、口辺部破片ながら荒川中流域右岸と多摩川下流域に比較的広範囲に散見することができる。

隆帯（突帯）文の作出手法については、従来、積み上げ粘土紐の下端を摘まんで突出させて整形するとの見方が大方であり、「折返突帯」と表現されているものもある。今回類例を見る中で、断面図において粘土積上痕（輪積痕）と一体的に捉えて図示しているものがほとんどであった。本例においては、本体（器肉）の粘土と、隆帯（突帯）の粘土には、混和剤に相異が見られることから貼付したものと判断した。詳細は別稿を予定している。

（２）甕形土器（図３-２・４-２、写真６）

『図譜』48-１の小型甕である（山内1940）。

完形の小型甕であり、頸部の窄まりが小さく、口縁部は短く外反する。口辺部の器厚は口唇に向けて徐々に薄くなり鋭角な口唇部を形成する。

器形の最大径は胴部の上位にあり、胴部最大径は11.8cmである。これに対し口径は12.2cmを示し、４㎜ほど大きい。103％の比率となる。朝光寺原広口甕４類に該当する（坂本・宮田2022）。

器肉は、底部下端で0.9cm、胴部で0.7cm、頸部で0.5cmと徐々に薄くなり、口唇部直下に至っては0.3cmとなる。底は中央がやや厚くなり、内底面（見込み）にはわずかな盛り上がりがある。

焼成は良好でしまりがある。色調は、おおむね橙色ないし黄褐色を呈し、胴部以下が灰白色を呈する面（約１/４）がみられる。

壺１と同様に、胴部から底部にかけて、「神奈川県／帝国臓器東方」と朱書きがある（写真６）。

文様は頸部のみで、他は無文である。頸部には２条１単位の簾状文が２段巡る。止めの間隔が長いもので、ほとんどが３cm前後の間隔を有する。

外面の器面調整は、木端状工具により一次整形を行い、横方向のヘラナデによりハケ目を磨り消した後に、頸部に簾状文を施している。その後さらに、胴・底部に縦方向のミガキを加えている。頸部と底部にはハケ目痕の残存が見られる。

内面についても、同様の器面調整過程を踏んだと思われる。胴部最大径は中位よりわずか上にあるが、肩は張らず緩やかな膨らみであり、簾状文は２条１単位と省略され、止めの間隔が間延びしているなど、簡略化の様相が認められる。また、「く」の字状に短く外反する口縁は、甲府盆地の影響が考えられる。田村編年の朝光寺原Ⅱ式新～Ⅲ式古式または渡辺編年の赤田Ⅱ期新～Ⅲ期古に比定されると思われる。

48-1（1）　外面

48-1（2）　内面の器面調整

48-1（3）　胴底部に朱書きされた出土地銘

神奈川県
帝国臓器東方（朱書き）

写真６　神奈川県川崎市下作延遺跡出土土器（２）―信州大学医学部資料室蔵―

藤沢宗平の報文によれば（図１、藤沢1941）、壺１と共伴しており、吉ヶ谷式壺と、朝光寺原式甕の共伴であり、広域交差編年を考える上で貴重な一例となる。

おわりに

白銀の北アルプスを仰ぐ、信州大学医学部の赤レンガ倉庫（資料室）に、多摩川べりの遺跡から出土した弥生土器が、戦後長く眠っていた。

昨年夏に、長野県埋蔵文化財センターで、３点のうち２点が再発見され、保存状態は良好であった。発掘者藤沢宗平の、「いつか評価される時が必ず来る。」というメッセージのように思えた。

これらの土器を最初に公表した山内清男は、「久ケ原式と一致しない。明に一型式の存在を示すもの」としたが、型式名は与えなかった。当時、突帯を有する土器の類例がほとんどなく、その分布が不明な状況ではやむを得ないことであったが、「下作延式」が提唱されなかったのは残念であった。山内は1941年９月から『日本先史土器

図譜』の刊行を予告し、その中において、「久ケ原式」を予告している（同書36頁）。これが実現すれば、南関東弥生後期に２つの土器型式が存在することになり、今日語られている「小地域圏」を提示したことになる。突帯文をもつ壺と高杯、及び簾状文の甕が一型式を組成するのは、稀有な例であり、南関東弥生文化の実態解明に違った道筋が描かれたかも知れない。

突帯文のある壺は、今日、吉ヶ谷式として捉えられている。吉ヶ谷式土器の編年を確立した柿沼幹夫は、研究史の最初に下作延出土土器を取り上げ、「主体的に分布しない他地域の例」としている（柿沼1982）。また、交差編年・地域間交流の鍵とする頸胴部帯縄文甕について、南関東では川崎市長尾台北遺跡、末長遺跡第２地点、横浜市上星川遺跡、関耕地遺跡例を論じた。その中で、下作延と器形や文様が類似した坂戸市鶴ヶ丘遺跡２号住居址例を、吉ヶ谷２式期に位置付けている（柿沼2016）。

下作延出土土器があまり研究の俎上にのぼらなかったのは、『図譜』公表20年後に刊行した『弥生式土器集成』（小林・杉原編1964）に未掲載であったことも一因であろう。今回の再発見に残り１点を加え、３点揃って姿が判明する日もそう遠くない。藤沢宗平の意志を受け継ぎ、新たな再評価がなされることを強く希望して止まない。

（2024年12月20日稿了）

謝　辞

小文を作成するにあたり、下記の機関及び各氏からご高配・ご教示をいただいた。明記して謝意を申し上げる次第である。

信州大学医学部、（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター、調布市教育委員会 郷土博物館、三上徹也、百瀬長秀、川崎　保、奥山隆平、藤澤裕子、吉田浩明、西　香子、矢本夏子、故・村田文夫、及川良彦、宮田裕紀枝（順不同、敬称略）

註

1）この点について、1970年頃に最初の遺跡地図を作成した村田文夫氏（2024年逝去）に問い合わせたところ、「当時は急増する開発への対応が急務で、学史的な部分は目配りが足りなかった。現在の遺跡地図も最初のものを踏襲しているようだ。」との見解であった。

2）帝国臓器は、1920年に性ホルモン薬を主商品とし、「帝国臓器薬研究所」として創立された。1928年に大宮本社工場を開設したが、製造能力が限界に達したため、1936年１月、久地梅林駅南側に高津分工場を新設した。南武鉄道北側の敷地は、戦後まで社宅用地として使われた。1945年には、「帝国臓器製薬」となり、各種医薬品を生産、2005年には、グレラン製薬と企業合併し、「あすか製薬」となった。高津分工場は川崎研究所となり、現在は、再開発事業が進行している（あすか製薬2021）。

引用・参考文献

あすか製薬株式会社編・刊　2021『あすか製薬100年史』

安藤広道　1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器における細分（下）」『古代文化』第42巻７号　古代学協会

安藤広道　2017「寄稿論文　久ヶ原遺跡と久ヶ原式土器」『土器から見た大田区の弥生時代―久ヶ原遺跡発見、90年―』平成28年度特別展（図録）大田区立郷土博物館

岩崎卓也・川名広文　1982『北の谷遺跡』北の谷遺跡発掘調査団

大田区立郷土博物館　2017『土器から見た大田区の弥生時代―久ヶ原遺跡発見、90年―』平成28年度　特別展（図録）大田区立郷土博物館

大坪宣雄・碓井三子・杉本靖子・渡辺昭一　2011『緑ヶ丘霊園内遺跡第５地点』吾妻考古学研究所

及川良彦・山田和史ほか　2023『調布市染地遺跡―第128地点（多摩川住宅商業施設建設に係る埋蔵文化財発掘調査）―第１分冊　本文編』（公財）東京都埋蔵文化財センター

柿沼幹夫　1982「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第５号　土曜考古学研究会

柿沼幹夫・佐藤幸恵・宮島秀夫　2008「岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へ」『国士舘考古学』４　国士舘大学考古学会

柿沼幹夫　2016「頸胴部帯縄文甕―交差編年・地域間交流の鍵―」『埼玉考古』第51号　埼玉考古学会

上条宏之　1974「“仕事のさなかにたおれる”（ヒルティー）生き方―追悼・藤沢宗平先生―」『ふかし』第32号　長野県松本深志高等学校職員誌「ふかし」編集委員会

金子彰男　2000「埼玉県における弥生後期土器編年について」『東日本弥生後期の土器編年〔第１分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会・福島県立博物館

川崎市教育委員会編・刊　2012『川崎の遺跡』

小薬一夫　2017『県史跡・東高根遺跡―公園に眠る古代遺跡―』川崎学双書シリーズ３　かわさき市民アカデミー
小林行雄・杉原荘介編　1964『弥生式土器集成　本編』東京堂出版（1983再版）
埼玉県　1982『新編埼玉県史　資料編２　原始・古代　弥生・古墳』埼玉県
坂本　彰・宮田　毅　2021「幻の朝光寺原式土器基準資料―櫛描波状文のある弥生台付甕―」『利根川』43　利根川同人
坂本　彰・宮田　毅　2022a「朝光寺原式土器の根源的研究―朝光寺原・三殿台遺跡を中心に―」『横浜市歴史博物館紀要』第26号　横浜市歴史博物館
坂本　彰・宮田　毅　2022b「「荏田式」土器の再検討」『利根川』44　利根川同人会
坂本　彰・宮田　毅　2024「続・朝光寺原式土器の根源的研究―大場富士塚遺跡の弥生土器をめぐって―」『横浜市歴史博物館紀要』第28号　横浜市歴史博物館
坂本　彰・宮田　毅　2025「続々・朝光寺原式土器の根源的研究―横浜市青葉区大場町稲荷前弥生集落址について―」『横浜市歴史博物館紀要』第29号　横浜市歴史博物館
鈴木　穆　2004『高津物語（上巻）』タウンニュース社
高橋龍三郎　2024『信州大学の調査研究と日本の考古学』信州大学医学部・付属図書館・大学史資料センター
滝沢　亮・小池　聡・細井吉造　1995『緑ヶ丘霊園内遺跡第２地点　第３地点』緑ヶ丘霊園内遺跡発掘調査団
田村良照　2013「朝光寺原式の属性（後編）」『神奈川考古』第49号　神奈川考古学会
浜田晋介編　2000『下原遺跡』かわさき市民ミュージアム考古学叢書４　川崎市民ミュージアム
樋口昇一　1976「藤沢宗平先生年譜」『長野県考古学会誌』第27号　長野県考古学会
藤沢宗平　1941「縄文式遺跡内に発見された三個の弥生式土器」『考古学』12巻１号　東京考古学会
藤沢宗平　1989「自分の進むべき道を考古学に求めたころ」『信濃先史文化の研究』藤沢宗平著作集刊行会
古屋紀之　2023「第４章 第２節 弥生時代後期土器の編年的位置づけと集落の様相」『舞岡熊之堂遺跡－舞岡新墓園事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―（第２分冊）』（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
持田春吉・村田文夫　1987『久地伊屋之免遺跡』高津図書館友の会郷土史研究部
柳田敏司・昼間孝司　1974「川越市霞ヶ関遺跡第三次発掘調査概要」『第７回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会
山内清男　1940「弥生土器」『日本先史土器図譜　図版解説』第Ⅴ輯　先史考古学会（1967年再販・合冊本による）
横浜市高速２号線埋蔵文化財発掘調査団　1981『横浜市高速２号線埋蔵文化財発掘調査報告書　1980年度（No.6遺跡―Ⅰ）』
横浜市高速２号線埋蔵文化財発掘調査団　1982『横浜市高速２号線埋蔵文化財発掘調査報告書　No.6遺跡―Ⅱ No.9遺跡－Ⅰ　1981年度』
横浜市高速２号線埋蔵文化財発掘調査団　1983『横浜市高速２号線埋蔵文化財発掘調査報告書　No.6遺跡―Ⅲ No.9遺跡―Ⅱ　1982年度』
横浜市歴史博物館編・刊　2017『横浜に稲作がやってきた!?』平成29年度 企画展（図録）
和光市教育委員会　2019『埼玉県和光市 牛王山遺跡総括報告書』和光市教育委員会編・刊
渡辺　努　1989『横浜市青葉区釈迦堂遺跡』日本窯業史研究所報告第25冊　日本窯業史研究所
渡辺　努　1994『横浜市緑区 赤田遺跡群 集落編Ⅰ―№1遺跡、№2遺跡、№6遺跡、№10遺跡―』日本窯業史研究所
渡辺　努　1998『横浜市緑区 赤田遺跡群 集落編Ⅱ―№12遺跡、№14遺跡、№15遺跡、№17遺跡―』日本窯業史研究所
渡辺　努　2003『釈迦堂遺跡第２地区』日本窯業史研究所報告第58冊　日本窯業史研究所
渡辺　努　2008『久地伊屋之免遺跡第２地点』日本窯業史研究所

（４）川原遺跡出土百済土器盌の一様相

―製作工程の復元と法量的検討―

春日皓介

１　はじめに

川原遺跡は、飯田市下久堅知久平の天竜川左岸、遺跡名の通り川に近い低位段丘上に位置している。

2022年度の調査で古墳時代中期の竪穴建物跡から須恵質の杯形土器が出土した。飯田市内で２例目、東日本で４例目の発見となる百済土器「盌」である。本稿は、盌の概要を踏まえたうえで川原遺跡出土盌の製作工程の検討、国内出土盌の法量からみた使用用途の検討を試みるものである。

２　古墳時代中期の集落跡

川原遺跡では2022年度の調査で古墳時代中期の竪穴建物跡が４軒、掘立柱建物跡が１棟みつかった。これまで川原遺跡では、下伊那考古学会、飯田市教育委員会、当センターが調査を行っているが、古墳時代の遺構はみつかっておらず、新知見の遺構となった。

４軒すべての竪穴建物跡の西側にカマドが付設されていたが、SB３はカマドが作り替えられ、カマド祭祀が行われた状況も確認された。出土遺物は、各竪穴建物跡から土師器甕、坏、埦、小型丸底壺、高坏等が出土した。またSB３からは、須恵器坏蓋、瓹口縁部片が出土しており、いずれもTK208型式期のものと考えている。土師器の年代とも合致してくるため、古墳時代の遺構は古墳時代中期中葉から後葉と考えている。飯田市内では、カマド導入時期について鼎地区切石遺跡群の山岸・天伯Ｂ遺跡で確認されたカマドが初期と考えられており、その年代を古墳時代中期と想定している。このほかに、龍江地区大平遺跡、伊賀良地区小垣外遺跡でも同時期と考えられるカマドが導入された竪穴建物跡が確認されている。川原遺跡もその一例となり得る可能性があり、下伊那地域のカマド導入時期や当該期の社会を考えるうえでも重要な発見となった。

３　百済土器と盌

百済土器の定義について、土田純子氏は朴淳発氏の引用を用いて以下のように述べている。「百済土器とは朝鮮半島三国時代に百済人が製作・使用した土器をいう。百済人が属した百済とは歴史的な政治体名だが、その政治・社会的発展段階は、国家水準を意味する。つまり、百済土器とは国家段階の百済において製作・使用された土器を意味する。」（土田2017）。本稿で使用する百済土器もこの定義に則している。

百済土器には、様々な器種がある。その中でも盌という器種は原三国時代に出現した土器で、４世紀末以降に盌が顕著に減少、坏身が盛行するが、栄山江流域では５世紀後半以前までは盌が中心をなすようで、国内出土盌の故地の大部分は栄山江流域と関連が指摘されている（土田2017）。

盌には、直立口縁と外反口縁を持つものがあり、法量も様々である。体部調整は指抑えもしくはタタキで、共通して体部下半から底部端部付近までヘラケズリが施される。

また、器形は時代が下るにつれ器高が低くなるとの指摘もあるが（土田2017）、顕著な変化はなく編年を組むことは難しい。現段階では、共伴する遺物から年代を絞りこむことがよいだろう。

４　盌出土竪穴建物跡の概要と出土遺物

盌が出土したSB４は、古墳時代集落の西側に位置し竪穴建物跡北側を中世と考えられる溝に切られ、弥生時代後期から古墳時代初頭の方形周溝墓を切っている。（図１）規模は一辺約3.8mの方形で４軒のうち最も小さく、周溝、柱穴ともに確認することができず残りもあまり良好とはいえない状態であった。西側にカマドがあるが、火床が若干確認され袖部などの構築物は確認できなった。出土遺物は、土師器甕、小型甕、内面黒色の坏が出土しており、すべてを合わせても１箱と最

も少ない。

盌の出土状況

盌の出土状況は図２の通りである。カマド左側の床直上に正位で置かれていた。周辺には、口縁部を床面にした逆位と正位で小型甕が置かれており、カマド祭祀のような意図的に配置されているように見える。

５　川原遺跡出土盌の概要と製作工程の検討

SB４で出土した盌は、還元焔焼成の須恵質で、口径11.8cm、底部径7.2cm、器高4.5cmであった。直立口縁で平底、底部から体部までは器壁が厚く、厚ぼったい印象を受ける。口縁端部は面取りをしているかのように平らになっており、外面体部上部にかけヨコナデが施される。体部中央は指抑え痕が見られ体部下半から底部端部にかけて手持ちケズリを行っている。底部は平底で、土器製作時に使用した回転台の心棒を支えるハバキの跡と考えられているゲタ痕がみられる。内面は、全体的にヨコナデが周り、体部上半部に等間隔に何らかの工具が当たったと考えられる弧状の痕跡が見られる。これは、内面をヨコナデする際に小口状工具を使用したためと考える。

胎土には、長石とみられる白色の砂粒が入っている。

製作工程の検討

盌の製作技法に関しては、滋賀県草津市谷遺跡出土盌について辻川哲朗氏が詳細な検討をおこなっ

図１　SB４

図２　百済土器盌出土状況（右下）

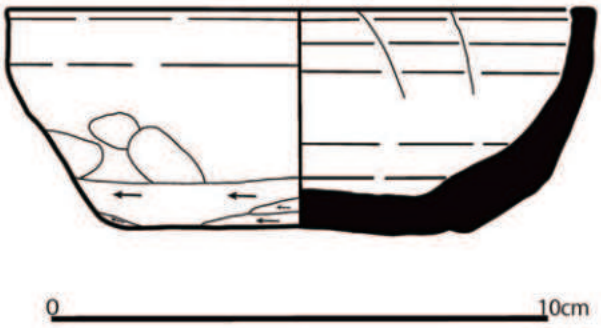


図３　百済土器実測図（外器面中央指頭圧痕・内器面斜状当て具痕）

図４　川原遺跡出土盌（正面から）

図５　川原遺跡出土盌（正面から）

ている。谷遺跡出土盌は体部にタタキ目が施された須恵質の土器である。観察された形態的な特徴や製作技法の整合性がとれるよう、製作工程を復元している。その際、製作時の回転台の使用について、ヘラケズリの単位が長いことから使用したと考え製作工程を考案した。辻川氏案は以下の通りである。

① 回転台上に底部粘土円板を設置。そのさい円板の周縁部を回転台に接地させる。
② 底部粘土円板の周縁部に粘土紐を積み上げる。
③ タタキにより体部を成形する。
④ 内面を回転ヨコナデにより調整。
⑤ 口縁部を回転ヨコナデにより調整。
⑥ 底部外端面をヘラケズリし、接地部を切除する。
⑦ 回転台上から器体を離脱させる。
⑧ 乾燥。
⑨ 窖窯において焼成する。

この案と2023年度に駒澤大学名誉教授酒井清治氏をはじめとした諸先生方に川原遺跡及び百済土器盌のご指導をいただいた内容をもとに川原遺跡出土盌の製作工程の復元を考える。前提として、川原遺跡盌製作時にも回転台を使用したと考えた。理由としては、外面口縁部付近のヨコナデのストロークが途切れることなく一周していることがあげられる。また、還元焔焼成により胎土が青灰色になっていることから、窖窯を使用し焼成したと考えられる。焼成された場所は定かではないが、現在のところ川原遺跡周辺の下伊那地域で古墳時代までさかのぼる窖窯はみつかっていないため、国内のどこかもしくは百済で製作されたものと考えている。

筆者が想定する川原遺跡出土盌の製作工程は以下の通りである。

① 回転台に底部粘土円板を接地。この時に、周縁部だけでなくすべての面を圧着させる。これは、ゲタ痕が底部にみられる以上、粘土円板をすべて接地しなくては痕跡が付かないためである。
② 底部粘土円板の周縁部に粘土紐を積み上げる。
③ 指抑えにより体部を成形する。
④ 内面を回転ヨコナデにより調整。
⑤ 口縁部を回転ヨコナデにより調整。この際、内側に小口状工具を使用し、内面体部上半部をヨコナデ成形したと考えられる。

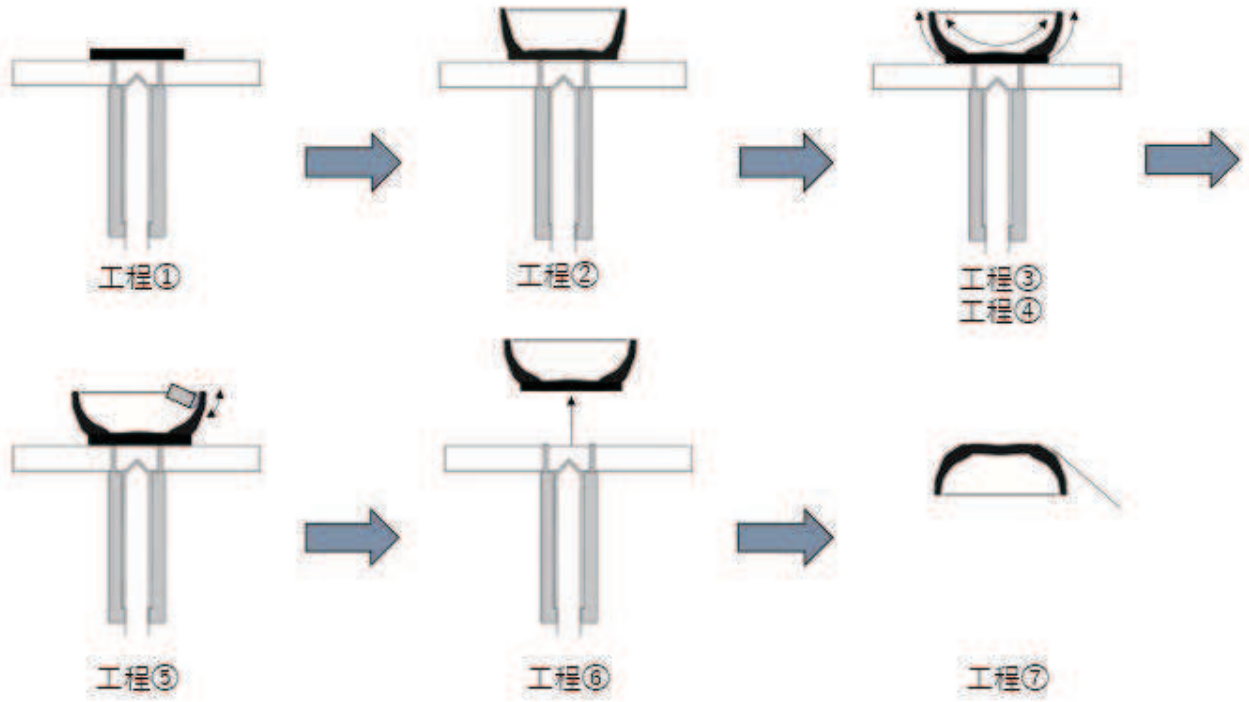


図６　川原遺跡出土盌の製作工程案（辻川2013を参考に作成）

⑥　回転台上から器体を離脱させる。
⑦　天地を逆にし、底部外端面から体部下半を手持ちヘラケズリする。
⑧　乾燥。
⑨　窖窯において焼成する。

器面調整や成形技法から辻川氏案を参考に製作技法を検討した。おおまかな工程は辻川氏案と同じであるが、粘土円板全体の圧着、器体離脱前のヘラケズリの有無、器体離脱後の底部外端面の手持ちヘラケズリなどを付け加え思案した。内面口縁部付近に残る斜状の当て具痕は、図７の通りである。2023年２月、韓国に百済土器資料調査へ赴いた際に漢城期の都城、夢村土城出土の盌を実見させていただいた。夢村土城出土のものの一部にも同じような斜状の痕跡が残っていた。ほとんどはこのような痕跡は消してしまうようだが、成形時の細かな痕跡が一部共通しているのは興味深い。想像の域は出ないが、製作地はともかく川原遺跡出土盌は百済の人びとが製作していた可能性が高いと考えている。

６　法量的検討と製作技法からみた川原遺跡出土盌の位置づけ

日本国内で出土している盌を集成し、法量的検討から川原遺跡出土盌の位置づけを考察する。なお、集成は辻川氏、土田氏、春日宇光氏の集成を元に口径・器高・底部径を筆者が追加し作成した。集成は表１の通りである。出土地の多くは、大阪、兵庫、和歌山などを含む畿内、福岡などが大部分を占め34例中30例が西日本出土であった。残り４例が東日本出土であり、２例が千葉県もう２例が長野県となっている。

結論から述べると、以下の点を指摘できる。

○　法量的検討から、大きさごとに３グループに分けることができるが、その違いが使用用途の差異に反映されない。

口径が20cm以上の盌は、国内で５点あり最も大きいものは、三重県北山Ｃ遺跡で出土したもので口径22cmを測る。口径が17cm以下のものは29例で、その内訳は16cm台が２例、15cm台１例、14cm台７例、13cm台７例、12cm台４例、11cm台３例、

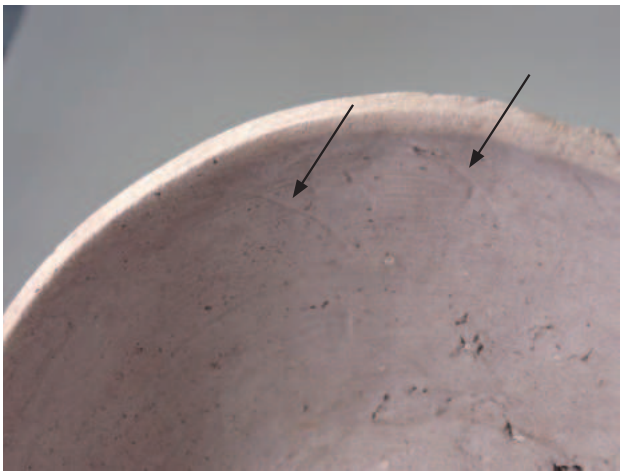


図７　盌内面に残る斜状の小口状工具が当たった痕跡

10cm台４例、９cm台１例となる。多数を占める大きさは13～14cm台で、このあたりが平均的な大きさであろう。ここでは便宜的に20cm以上のグループを大型盌、17cm以下13cm以上の大多数を占めるグループを中型盌、13cm未満のグループを小型盌と呼ぶこととする。

それぞれのグループについて、使用用途に違いがあるのか検討する。そもそも盌は様々な用途が想定されており、生活雑器、炊飯具、祭祀具などがある。出土状況、盌に残る使用痕跡から使用用途がある程度推測できるものを検討したい。

６－１　大型盌類例

兵庫県市之郷遺跡出土例

兵庫県姫路市市之郷遺跡で出土した盌は、竪穴建物跡のカマド燃焼部埋土から出土している。完形品で、口径20.6cm、器高11.1cm。大型盌で、二次被熱の痕跡が特徴的である。内面が全体的に赤変している。この竪穴建物跡からは、格子タタキを全体的に施した甑も出土しているため、甑とセットで使用している可能性を指摘している（兵庫県教育委員会2013）。

大型の盌にはこのように炊飯具として使用されることがあるかもしれない。しかし、日本国内の大型盌の類例をみても二次被熱が残る例は他にはなく、現在は可能性として留めておく必要があるだろう。

三重県北山Ｃ遺跡方墳出土例

三重県北山Ｃ遺跡からは方墳周溝から盌が出土

資料No	遺跡名		長径	高さ	底部径	口縁部形態	外面の器面調整		焼成	共伴遺物の時期
							タタキ痕の有無・種類	底部外端面のヘラケズリ		
1	長野	川原遺跡	11.8	4.5	7.2	直立	無紋	○	還元焔焼成	5世紀中葉～後葉
2	滋賀	谷遺跡	15	4.2	8.6	直立	タテ方向		還元焔焼成	5世紀後半
3	三重	北山C遺跡	22.8	8.4	12	外反	タテ方向	○	還元焔焼成	5世紀後葉
4	大阪	大坂城	12	4	4.6	外反	格子タタキ		還元焔焼成	古墳～飛鳥
5	大阪	長原遺跡	10.8	4.4	7.2	外反	タテ方向		還元焔焼成	5世紀中頃
6	大阪	長原遺跡	13.6	4.8	8.8	直立	無紋		還元焔焼成	5世紀前半
7	大阪	長原遺跡	21.6	9.6	15.6	外反	無紋		筆者未確認	5世紀前葉
8	大阪	蔀屋北遺跡	12.8	4.4	10	外反	無紋		還元焔焼成	5世紀前半
9	大阪	陶邑・伏尾A遺跡	13.2	5.2	8.4	外反	無紋		還元焔焼成	5世紀中頃
10	大阪	陶邑窯跡群ON231	16	5.6	10.4	外反	無紋		生焼け	5世紀前葉
11	大阪	四つ池遺跡	14	4	8.4	外反	無紋	○	還元焔焼成	5世紀中頃
12	大阪	瓜破北遺跡	14	4	10	外反	無紋	○	酸化焔焼成	古墳～奈良
13	大阪	難波宮	9.6	4	6.4	外反	無紋		筆者未確認	5世紀中葉
14	大阪	讃良条理遺跡	16.8	5.6	10.4	外反	タテ方向		筆者未確認	5世紀後葉
15	大阪	讃良条理遺跡	11.2	4.8	6.4	外反	タテ方向	○	筆者未確認	5世紀後葉
16	大阪	八尾南遺跡	14.5	5.4	9.4	直立	無紋	○	酸化焔焼成？	5世紀前葉
17	兵庫	尾崎遺跡	14	4.8	9.6	外反	格子タタキ		還元焔焼成	5世紀後半？
18	兵庫	市之郷遺跡	20.6	11.1	14.4	外反	無紋	○（後ナデ）	酸化焔焼成	5世紀中葉
19	和歌山	田屋遺跡	13.6	3.6	8.8	外反	無紋	○	酸化焔焼成	弥生後期～
20	和歌山	田屋遺跡	13.2	4.4	8.8	外反	無紋	○	酸化焔焼成	弥生後期～
21	和歌山	楠見遺跡	12.4	4.4	7.2	外反	無紋	○	還元焔焼成	古墳時代中期
22	和歌山	東家遺跡	20.4	8.4	15.6	外反	無紋		筆者未確認	5世紀後葉
23	奈良	松山遺跡	10.4	4.8	4.8	外反	無紋	○（後ナデ）	筆者未確認	5世紀中葉
24	福岡	三苫遺跡	13.2	3.2	9.2	外反	無紋		還元焔焼成	王陵都期は4世紀（混入の可能性あり）
25	福岡	吉武遺跡群	12.4	4.4	7.2	直立	無紋	○（後ナデ）	還元焔焼成	5世紀後半
26	福岡	吉武遺跡群	13.6	3.6	8.4	直立	無紋		還元焔焼成？	5世紀後半
27	福岡	吉武S群22号墳	14.4	4	8.4	直立	格子タタキ		酸化焔焼成	5世紀後半
28	福岡	富地原森遺跡	10	4.4	8	外反	無紋		還元焔焼成	5世紀前半
29	福岡	三雲遺跡	13.2	4.4	8.4	外反	無紋	○（後ナデ）	還元焔焼成	弥生前期・5世紀前半
30	福岡	西新町遺跡	19.8	8.1	11.4	外反	無紋	○	酸化焔焼成	4世紀中～後葉
31	福岡	西新町遺跡	15.2	7.2	7.2	外反	無紋	○	酸化焔焼成？	4世紀中～後葉
32	千葉	大森第２遺跡	12.05	4.9	7.4	直立	格子タタキ	○	酸化焔焼成	5世紀後半
33	千葉	大森第２遺跡	11.3	4.4	8.4	直立	タテ方向	○	酸化焔焼成	5世紀後半
34	長野	柳添遺跡	14	5.8	9	直立	無紋	○	酸化焔焼成？	5世紀中頃

表１　国内出土盌一覧（辻川2013　土田2017　春日2023を参考に筆者が一部追加）
＊法量は報告書掲載のものは引用、その他は筆者が図面より計測した。

している。盌が出土した８号墳は、周溝内側で南北約8.5m、東西約９m。北側周溝を除く３辺で遺物が出土しているが、特に東側周溝に集中している。出土遺物のほとんどは須恵器であるが、西辺で盌が出土している。大型盌に属し、口径22.8cm、器高8.4cmと今回集成した中では最大となった。焼の甘い須恵器で外反口縁、体部に平行タタキが施され、下半にロクロケズリ、ヘラケズリがみられる。このほか、大型盌は大阪府長原遺跡、和歌山県東家遺跡、福岡県西新町遺跡で出土している。大型盌類の中でも具体例をあげた２例は生活雑器のほか炊飯具や祭祀具など特殊な使われ方をする事例であろう。

６－２　中型盌類例

滋賀県草津市谷遺跡方墳出土例

方墳の周溝から須恵質の盌が出土している。出土した方墳は、一辺7.4mほどで墳丘は削平され、周溝３辺が確認できている。

盌は、口径15cm、器高4.2cmの中型盌で口縁部が外反し、体部に平行タタキ、下半にヘラケズリがみられる。

前出の三重県北山Ｃ遺跡出土例と同様、方墳の周溝から出土しているが隣接する竪穴建物跡からの混入の可能性も否定できない（辻川2013）。

福岡県福岡市吉武遺跡群22号墳出土例

周溝のみが残る円墳から出土した。盌は、土師質で外面に斜め方向の擬格子タタキを施している。口縁端部は須恵器に似ており、外方向へ下がっている。外面には、赤色顔料を施している。口径14.4cm、器高４cmを測り、中型盌に属する。

上記２遺跡は、出土遺構は古墳周溝であるが、祭祀具として使われていたといえる出土状況ではない。しかし、現段階ではそれを否定できる確証もないため、出土状況を踏まえ何らかの祭祀行為が行われた可能性もあるのではないかと考えている。

また、中型盌の多くは、集落内の竪穴建物跡、もしくは溝などから出土しており生活雑器以外の使用用途を想定できる出土事例はない。したがって中型盌の多くは、生活雑器として使用されていたと考えてよいだろう。

６－３　小型盌類例

小型盌は管見のところすべてが住居内、溝、層内で出土しており、墳墓に伴っている例はなかっ

た。川原遺跡出土盌も小型盌に属する。

千葉県千葉市大森第２遺跡出土例

住居内から２個体が出土している。１つは、口径11.3㎝、器高4.4㎝で棒状の平行タタキ目をもつ。酸化焔焼成で底部端部、体部下半にケズリ痕が残る。もう１つは格子状のタタキ目を持つものがある。口径12.05㎝、器高4.9㎝で酸化焔焼成である。口縁部は外側と内側両方に若干飛び出ており、底部には若干の方形痕を観察できる。どちらも直立口縁で、酸化焔焼成であるが、野焼き焼成にしては硬質な印象を受ける。また、同住居内からは、百済土器の銘々器である深鉢形土器も出土している。これらは、深鉢形土器とともに生活雑器として使用されたものであろう。

大森第二遺跡出土例のほか、大阪府讃良条里遺跡、富地原森遺跡で竪穴建物跡から出土している。

６－４　法量から見た使用用途の検討

いくつか、盌の国内出土例を挙げたが先述した通り、法量の違いが使用用途の違いに反映されているとは言い難い。大型盌、中型盌のどちらにも古墳出土事例がある一方、大型盌に属するもののなかには炊飯具として使用されていたと考えられる事例もあるためである。このような結果から、盌という器種には、特定の使用用途があったわけではなく生活の様々な場面で使用されたまさしく雑器であった可能性を指摘したい。

６－５　川原遺跡出土盌の位置づけ

川原遺跡出土盌は、今回の検討では国内出土事例の中でも小型盌のグループに入ることがわかった。出土状況は、前述した通りカマド横から正位で出土しているためカマド祭祀に伴い遺されたものかもしれないが確証を得ない。現段階では、国内の土師器や須恵器と同様な使用を想定し、生活雑器として使用されたものと考えたい。

７　まとめ

川原遺跡出土盌の製作工程の復元と国内出土事例の法量的検討から使用用途を考察した。盌という１つの器種の検討では限界があるように感じ、国内出土の他器種も踏まえた検討が必要であると感じた。また、今回は触れなかったが盌の時期決定も見直す必要があろう。編年的な検討は土田氏によって行われているが、確定的なものではないと感じるため共伴土器からの詳細な時期決定を行っていくことが良いだろう。

謝　辞

本稿を執筆するにあたり、駒澤大学名誉教授酒井清治氏、日本大学教授山本孝文氏、滋賀県文化財保護協会辻川哲朗氏、飯田市教育委員会春日宇光氏、阿智村教育委員会中里信之氏には多大なるご指導をいただきました。また、2024年２月に行った大韓民国古代土器研修では、夢村土城出土盌を実見させていただく機会を漢城百済博物館百済学研究所の皆様からいただきました。ここに記して感謝いたします。

引用・参考文献

＜書籍等＞

岡田正彦2006「南信州の渡来系文化―古墳時代を中心として―」『飯田市美術博物館研究紀要』16飯田市美術博物館

春日宇光2023「集落遺跡における百済系土器の意義と課題―長野県飯田市柳添遺跡出土「盌」の検討から―」『考古学と文化史―同志社大学考古学研究室開設70周年記念論集―』同志社大学考古学シリーズ XⅢ

酒井清治1985「千葉市大森第２遺跡出土の百済土器」『古文化談叢』第15集　九州古文化研究会

辻川哲朗2013「近江地域における百済系土器の一様相―草津市谷遺跡出土盌形土器について―」『滋賀県文化財保護協会紀要』26

土田純子2017『東アジアと百済土器』同成社

＜報告書＞

飯田市教育委員会1992『柳添遺跡』

大阪府教育委員会2010『蔀屋北遺跡Ⅰ』

千葉県都市公社他1973「大森第２遺跡」『京葉』

兵庫県教育委員会2013『市之郷遺跡Ⅴ』

福岡県教育委員会2002『西新町遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第168集

福岡市教育委員会2003『吉武遺跡群 XV』

三重県埋蔵文化財センター2013「北山Ｃ遺跡・西山古墳群」『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』

八尾市文化財調査研究会2008『八尾南遺跡第18次発掘調査報告書』

（５）千曲川の瀬直し（中野市上今井）と丸山要左衛門について

真関　隆

１　はじめに

長野県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）は、県内の社会基盤整備等に伴う遺跡の発掘調査を行い、原始から古代を中心に地域社会の有り様を明らかにして記録に留め、後世に伝えることが使命だが、明らかになったその姿は、時を経て現在我々が目にする風景に変貌している。

令和元年東日本台風により甚大な被害が発生した信濃川水系において、「信濃川水系緊急治水対策プロジェクト」が国・県・市町村の連携のもと進められており、中野市では、国が所管する「上今井遊水地整備事業」が2023年５月に起工した。この事業は、旧河川敷を利用し遊水池を形成する堤（囲繞堤・周囲堤）の整備と遊水地内の掘削を行うもので、事業面積は約70ヘクタールに及ぶ（中野市2023）。

現在、当センターがこの事業実施に伴い発掘調査（対象面積約38ヘクタール）を行っている南大原遺跡は、曲流する旧千曲川左岸の発達した自然堤防と後背湿地上に立地している（図１）。江戸時代の終わりから明治初期にかけて、千曲川の水害に苦しむ流域の村々の治水を目的に、この曲流部を最短距離でつなぐ新河道の開削（以下「瀬直し」という。）を主導し実現させたのが旧安源寺村に生まれた丸山要左衛門（1825～1895）である。

本稿では、この瀬直しによって河川敷となった旧河道が、150年後に遊水地として生まれ変わることになった上今井地区の治水の背景を振り返るとともに、数多くの村々の利害調整に奔走し、困難といわれた瀬直しを完遂させた人物像とその思いに迫りたい。

２　経　緯

南大原遺跡は、『長野県中野市遺跡詳細分布図』（中野市教育委員会2006）に、縄文・弥生・平安時代の遺跡として登録されている。1950年に神田五六氏らにより縄文時代前期後半の竪穴住居跡が発掘調査され、その出土土器は「南大原式土器」と命名された。その後、県道三水中野線改良工事に伴い、1979年に旧豊田村（現中野市豊田）教育委員会が、2011～2013年及び2019～2020年には当センターが発掘調査を実施し、弥生時代中期後半から後期を主とした集落遺跡であることが明らかになった（長野県埋蔵文化財センター2016・2021）。

「上今井遊水地整備事業」に伴っては、2022年に

図１　南大原遺跡遠景（2023年11月　南から）

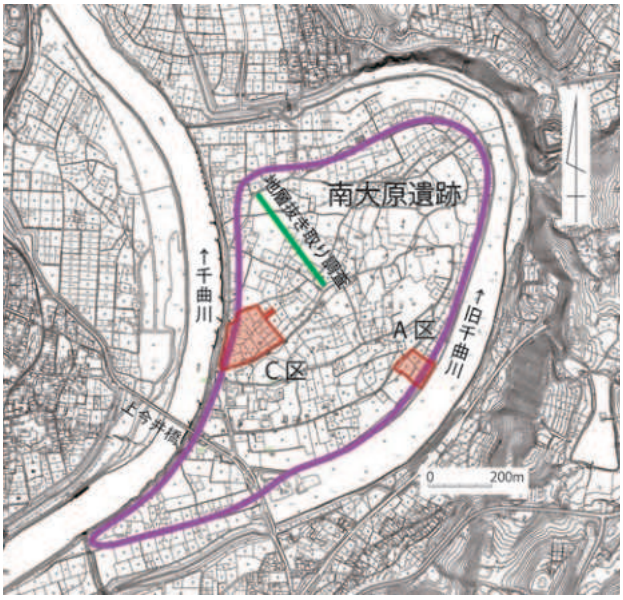


図２　2023年度　調査区全体図

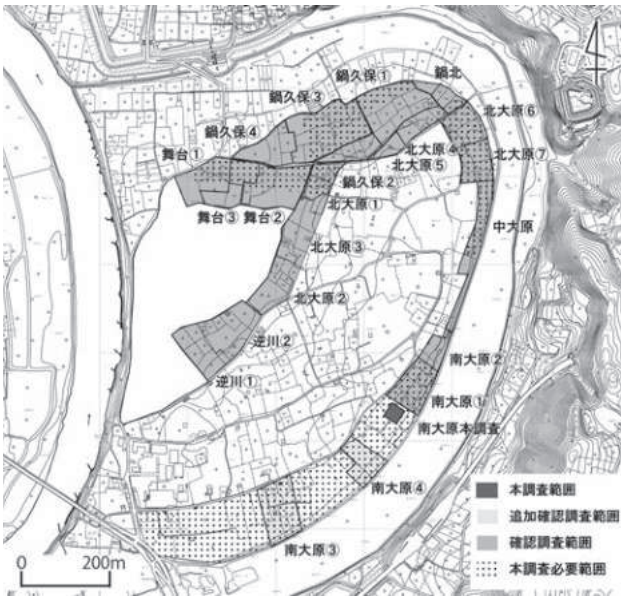


図３　2024年度　調査区全体図

図４　瀬替え以前の千曲川の流路

中野市教育委員会が試掘調査を実施し、旧包蔵地範囲外で平安時代の遺物散布地や近世水田跡を確認したため遺跡の範囲を拡大した。2023年には、当センターが確認調査を実施（調査対象面積119,450平方メートル）し、旧包蔵地範囲の北限部（Ａ区）では重複する平安時代の竪穴建物跡等を、築堤箇所（Ｃ区）では江戸時代以降の水田跡の他、その下層からは奈良時代の掘立柱建物跡等が検出された（図２）（長野県埋蔵文化財センター2024a）。

2024年度は、６月から当センターが面的調査（南大原地区）及び確認調査（逆川・舞台・北大原・鍋久保地籍）を実施（調査対象面積21,000平方メートル（当初））し、８月10日には発掘調査受託者である公益社団法人日本文化財保護協会の協力の下、発掘成果を一般に公開する現地説明会を開催した（図３）（長野県埋蔵文化財センター2024b）。

この説明会に際し、上今井地区の治水の歴史に目を通しているとき、新河道開削に心血を注いだ人物として記されていたのが丸山要左衛門であった。そして特に注意を惹かれたのが、工事完成に尽力した彼の功績を記念して建立された石碑に刻まれた自分の名前や功績を称える文章を削り取らせたという逸話である（国土交通省2024）。瀬直しが行われた時代背景とその人物像に迫りたいと思ったのは、この逸話に触発されたことがきっかけである。

３　千曲川の洪水と瀬直しの歴史（中野市上今井）

信濃川（県内の呼称は千曲川、以下「千曲川」で統一。）は日本最長の367kmを誇り、本県面積の約53％を占める流域では県人口の約７割が生活する。大きく変化する川幅が特徴で、川幅が約５分の一に狭まる長野盆地下流の立ヶ花（中野市）と飯山盆地下流の戸狩（飯山市）では、洪水時に常にこれら区間の上流の水位が上昇する（国土交通省2018）。

明治初期に上今井地籍で新河道が開削される以前、千曲川は立ヶ花直下の同地籍で東側（右岸）に大きく湾曲していたために増水時の流れが悪く、上流の村々や流入河川沿いの村々は洪水の被害を受けてきた（中野市立博物館2024）（図４）。流入河川の一つである篠井川も増水時に逆流し、延徳耕地が浸水被害に見舞われていた。この延徳耕地にはかつて「遠洞湖」という湖があったといわれ、源頼朝が草津温泉に入湯の帰路、湖上から「大熊の飯盛松」を鑑賞したと伝承されている（千曲川北信５市町かわまちづくり協議会2023・本多静六編1913）。

ここで近世の千曲川の洪水及び中野市における被害とその対応を概観する。

1847（弘化４）年に発生した善光寺地震は、北信濃の各地の家屋の倒壊や焼失、人畜の死傷、千曲川の大洪水による家屋流出といった大被害をもたらした。この大洪水の原因は、犀川上流の虚空蔵山（長野市信更町）から崩れ落ちた土砂が川を堰き止め、その大量の湛水が一気に川中島平一帯に大氾濫したためといわれる。洪水の激流は延徳耕地まで押し寄せ、特に大きな被害を受けた旧小沼村では、集団移転先を決めざるを得ない状況にまで至った。流出した大量の土砂により、延徳耕地付近の川床とともに旧立ヶ花村より川下の川底も高くなり、水はけの悪化を招くこととなった。

地形の変化により激化する水害に備えるため、延徳耕地周辺の21カ村の農民は「延徳耕地組合」を結成し、抜本的な治水対策を策定することとなった。対策の一つは延徳耕地の千曲川べりに大堤防を築くこと、もう一つが上今井地籍で曲流する千曲川を直流にする瀬直しを行うことであった（中野市誌編纂委員会1981・渡辺2011・2012ab）。

千曲川の瀬直し工事の計画や領主側への嘆願に取り組んでいた農民の一人が丸山要左衛門であった。彼は洪水の度に自ら舟に乗って水流の状況を実地調査し、上今井地籍の曲流を直流にすれば上流地方の水害を防げるとの確信を得て、上今井の土地を購入し新河道を開削すべきことを人々に説いたが難事として聞き入れられなかった。

弘化の大洪水から21年後の1868（明治元）年５月９日に大洪水が発生、丸山は罹災状況を視察した中野役所詰代官松本省庵を説得し、新河道開削の賛意を得た。丸山は官民の間を奔走、1869年に同盟を結んだ68カ村による新河道開削の請願書を郡役所を通じて民部省へ提出、許可を得た。68カ村による決議は、下水内郡豊井村字今井字押切から長原に至る幅60間（約100メートル）、長さ780間（約1,400メートル）を借地し、直線に新河道を開削して曲折を直すというもので、各村の賦役等の協議を経て1870年６月28日に着工した。

着工から２年後の1872年４月27日に工事が完成するまでの間には、田畑が新河道用地内にあったり、沿岸の田畑へ舟で渡らざるを得なくなる等の

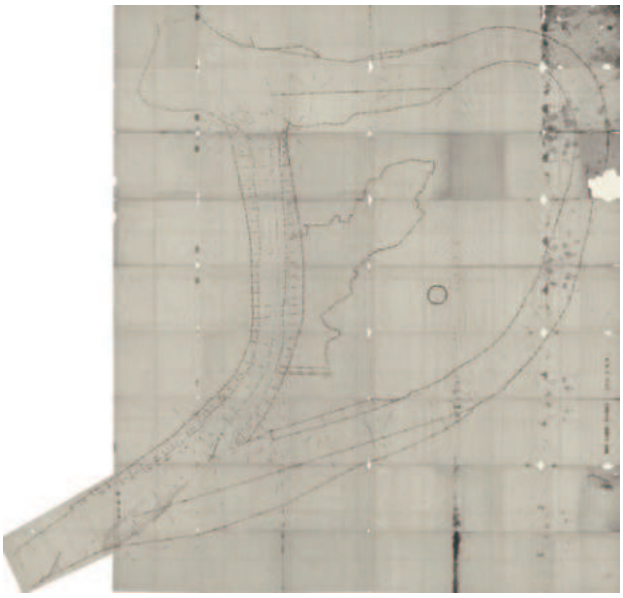


図５　上今井瀬替え測量図

不便を被る上今井地籍の村民から丸山ら推進派が襲撃を受け重傷を負う事件が発生。加えて春雨と融雪増水・梅雨の影響で堤防が破壊されるなど、工事は困難を極めたが、丸山はこうした事態に屈することなく、人夫を励まして作業を続けさせ完成に導いた（図５）。

完成した新河道は幅25間強（約45メートル）、長さ12町49間（約1,400メートル）、延べ23万5,800人余りが動員され、経費は民費５万7,617円及び民部省補助金4,287円の計６万1,900円余に達したとされる。なお、新河道敷地代金として村々が旧上今井村に年額1,000円を支払ったが、1882年に県令大野誠のあっせんにより１万6,000円を一括して支払い賃貸関係を解消した。

この工事の完成により災害を免れるようになった田畑は約1,500町歩（約1,500ヘクタール）となり、1882年の大洪水による被災面積は、これまでの半分に達しなかったといわれる（山口1922・中野市誌編纂委員会1981・国土交通省2024）。

４　丸山要左衛門の残したもの

丸山要左衛門は、1825（文政８）年２月８日に旧安源寺村の名主の家に生まれた。７代目にあたる丸山篤司氏は小内八幡神社（中野市）の参道沿いにお住まいで、丸山氏によると要左衛門の人柄は温厚かつ頑固と代々伝わっており、『下高井郡

図６　文書整理簞笥引き出し（裏面）

図７－１　石碑「千曲川治水記」

誌』にも「資性温良、且つ、剛毅にして頗る義侠心に富み、常に公共の爲めに盡すを以て己が任となせり」とある（山口1922）。公共の福祉のために己が身を削ることを厭わない信条がうかがわれる（中野市教委2007）。

丸山氏宅には、新河道開削の設計図書のほか、堀川掛会計所文書整理簞笥なども残されている。この簞笥の引き出しの裏には1869年に郡役所に請願した68カ村のうち、盟約を放棄せず最後の河床発掘に応じた29カ村の名前が記されている（図６）。

また、要左衛門らが上今井地籍の村民から襲撃を受けた直後、村民らが自らの非を詫びた手紙（実物）が現存する。氏によると、襲撃者が特定され不利益を被らないよう要左衛門が慮り、手紙は門外不出とされていたとのことである。また、襲撃時に体を覆いかぶせて要左衛門を守った体格の良い男性には、襲撃を終わらせようと「自分は死んだと言え」と語ったと伝えられている。

要左衛門宅に保存されていた瀬直しに関わる一連の文書は、1897年に山田庄左衛門家へ永久寄贈された。この文書は1865（慶応元）年から1897（明治30）年までの間の工事関係書類で、帳

図７－２　石碑「千曲川治水記」台座（部分）

簿や絵図など267点に及び、このうちの９割が工事に伴う補償や旧川敷の開田に関するもので、工事により不利益を被る地域への補償がいかに難事業であったかがうかがわれる（中野市教育委員会2008ab・2011）。

この瀬直しのおかげで1882年の大洪水の被害が少なかったことを喜んだ村民らは、要左衛門の功績を称える石碑「千曲川治水記」を小内八幡神社に建立した（図７－１）。丸山氏によると、要左衛門は建立当時金毘羅参りに出かけていたとのことで、石碑に自分の名前や功績を称える文言が彫り込まれていることを知るや直ちに削り取らせたと

図８　丸山要左衛門 肖像画

いう。現在も旧道に面した神社敷地内にある石碑の台座部分に、わずかに読み取れる「はつがしら」（部首）だけが、かつてここに文字が刻まれていたことを偲ばせている（図７－２）。

丸山氏宅では、1889年に賞勲局が要左衛門に授与した藍綬褒章（古川1985）や肖像画掛け軸（図８）を見せていただいた。肖像画からは、柔和だが豪胆な人柄が伝わってきた。

なお、工事が完成した1872年には、完遂まで組合員であった29カ村が石碑「弥都波能女神（みづはのめがみ）」を千曲川新旧分岐点に建立した。現在石碑は白山姫神社（中野市大字栗林）に移設されている。今回当時の建立地点を探ったが、今のところ特定には至っていない（図９）。

５　まとめ

今回の調査を通じて以下の点を指摘したい。

南大原遺跡がどのような性格の遺跡であったかは、今後の発掘調査も踏まえた分析を待つ必要があるが、流速の低下をもたらす河川の蛇行は、当時から大規模な水害を引き起こす誘因であった一方で、他地域との水運を容易にし、文化交流を促す等のメリットももたらす地形上の有利点であっ

図９　石碑「弥都波能女神」

たと推察される。

時はくだり、丸山要左衛門が瀬直しに苦闘したのは、上今井村民の便益を犠牲にしても流域の村々の水害による損失を少しでも減らそうとする大義に立つものであったと理解でき、この瀬直しによって洪水被害を免れる田畑は増大し、流域の村々の人々の安定した生活に寄与した。

そして今、役割を終えたと思われた旧河道が、水害への新たな備えとして生まれ変わることを、流域の治水に全力を傾注した先人たちはどのような思いを持って受け止められるのか、筆者の考えは及ばないが、この地域の水を巡る歴史の新たな１ページとなることは事実である。

埋蔵文化財（遺跡）は地域の過去の歴史を明らかにするものである。その遺跡の存在した時点から現在に至る経過の発端（根拠・ルーツ）や歴史上のできごとをつなぐ資料の掘り起こしを通して歴史の点を線にしていくことは、『発掘調査報告書』の作成はもとより、地域の誇りとして活性化や観光・定住を進める素材としての価値が生まれることにつながると痛感した次第である。

令和６年度から文化財行政の主管が教育委員会から知事部局に移管された目的は、文化財行政について、観光や地域振興等と連携した施策推進を図ることとされており、今回の調査によって目指そうとする方向性とも合致している。

埋蔵文化財（遺跡）と現代の開発事業、さらに

は保存活用につなげる試みの意義については、今後の課題とし、稿を改めて取り組みたいと思う。

謝　辞

文中でも触れたが、丸山要左衛門のご子孫である丸山篤司氏とご家族の皆様から資料調査のみならずいろいろと直接お話をうかがえたことは、望外の幸いであった。この資料調査に至るにあたって中野市立図書館、中野市立博物館柳生俊樹、同山田家資料館大滝敦士、県文化振興課柳澤亮の諸氏には調査に関して様々な資料の提供、ご教示、ご助力をいただいた。本稿をなすにあたっては、長野県立歴史館名誉研究員の山浦直人氏からはご自身で撮影された画像データの提供もいただいた。お名前を記して謝意を表したい。

なお、現地調査にあたっては、当センター川崎保、水科汐華、酒井貴子の諸氏の助力を得た。

引用・参考文献

国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所2018『平成30年度事業概要 千曲川・犀川』

国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所2024『上今井遊水地だより』令和６年１月号（№17）

千曲川北信５市町かわまちづくり協議会2023『歴史散策MAP 中野・小布施エリア』

長野県埋蔵文化財センター2016『中野市　南大原遺跡』

長野県埋蔵文化財センター2021『中野市　南大原遺跡２』

長野県埋蔵文化財センター2024a「南大原遺跡」『2023年度年報』40号

長野県埋蔵文化財センター2024b『南大原遺跡現地説明会資料』（令和６年８月10日）

中野市2023『広報なかの』令和５年６月（№219）

中野市教育委員会2006『長野県中野市遺跡詳細分布図』

中野市教育委員会2007『わたしたちの郷土 中野市』～小学校社会科副読本３・４年生用～改訂版（1995初版）

中野市教育委員会2008『東江部村山田庄左衛門家文書目録Ⅲ』中野市文化財調査報告 第５集

中野市教育委員会2011a『（仮称）山田家資料館特別展示千曲川を掘り替えた地域、「百姓の力」―願い29か村の瀬直し―』

中野市教育委員会2011b『（仮称）山田家資料館特別展示千曲川を掘り替えた地域、「百姓の力」―願い29か村の瀬直し―関係資料集』

中野市誌編纂委員会1981『中野市誌 歴史編（前編）』中野市

中野市立博物館2023『明治初期の村絵図　150年前の信州中野Ⅰ』令和５年春季企画展

中野市立博物館2024『明治初期の村絵図　150年前の信州中野Ⅱ』令和６年夏季企画展

古川貞雄1985「千曲川瀬直しの丸山要左衛門褒章資料」『高井』第72号（昭和60年７月）高井地方史研究会

本多静六編1913『大日本老樹名木誌』大日本山林会

山口菊十郎（下高井郡視学）1922「第３章人物傳 第１節 丸山要左衛門」『下高井郡史』下高井郡役所

渡辺一雄2011「延徳沖の水害と治水（一）」『高井』第177号（平成23年11月）高井地方史研究会

渡辺一雄2012a「延徳沖の水害と治水（二）」『高井』第178号（平成24年２月）高井地方史研究会

渡辺一雄2012b「延徳沖の水害と治水（三）」『高井』第179号（平成24年５月）高井地方史研究会

図の出典

図１　長野県埋蔵文化財センター2024『南大原遺跡　現地説明会資料』2024年８月10日

図２　長野県埋蔵文化財センター2024『南大原遺跡　発掘だより』第１号

図３　本誌４頁図３

図４　「上今井耕地絵図」（東江部村山田庄左衛門家文書39-７-１）（2023年12月11日：長野県埋文センター撮影）

図５　「上今井瀬替え測量図」（山田家資料館蔵）（2020年12月11日：山浦直人氏撮影）

図６・８　丸山篤司氏蔵、筆者撮影

図７-１　酒井貴子氏撮影

図７-２・９　筆者撮影

長野県埋蔵文化財センター年報41　2024年度

発行日　2025（令和７）年３月21日
編集発行　（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
電話：026-293-5926　FAX：026-293-8157
E-mail：maibun@naganobunka.or.jp
印　刷　信毎書籍印刷株式会社